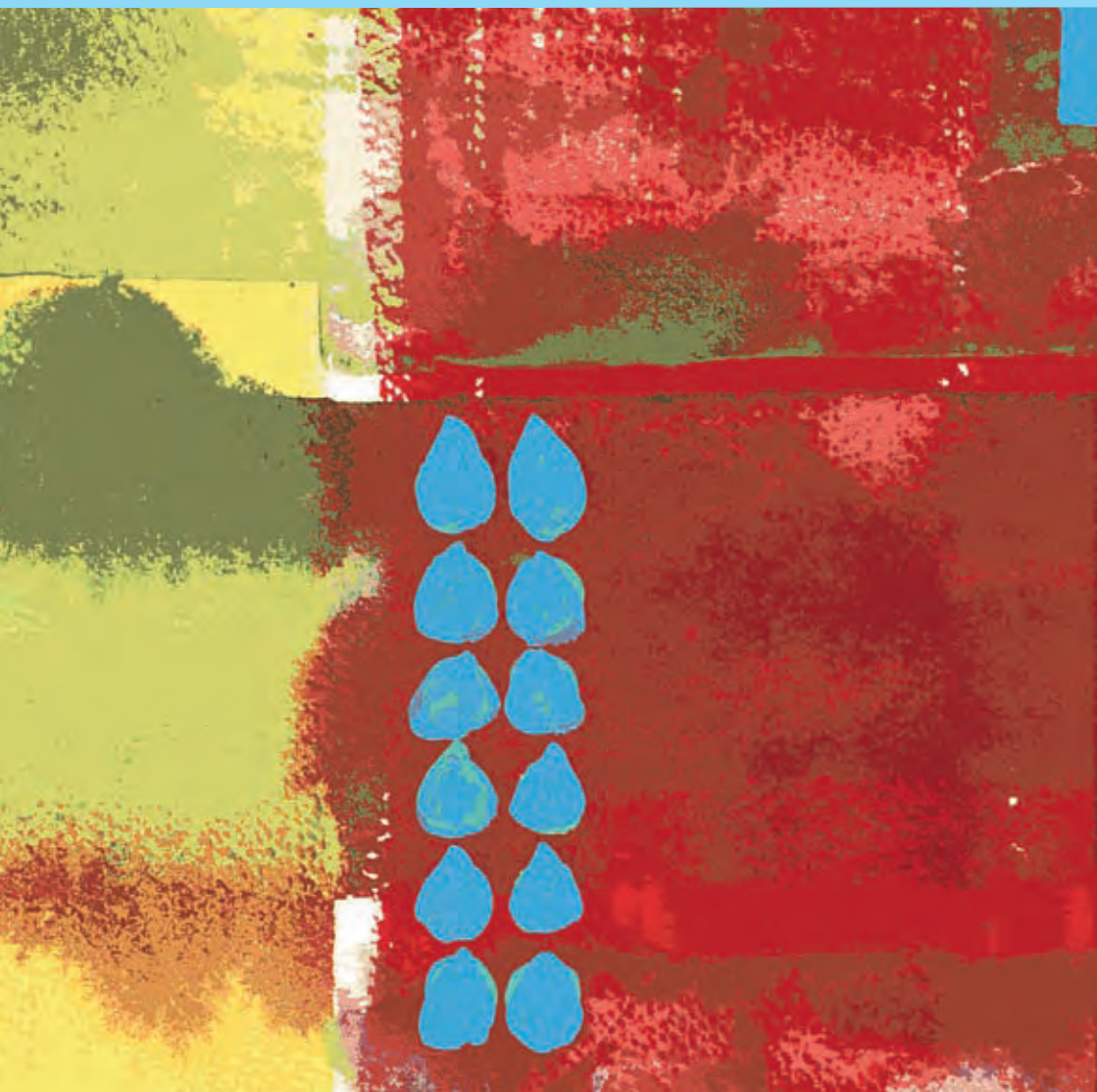
やまがた 秋

2015年
季刊第22号

街角

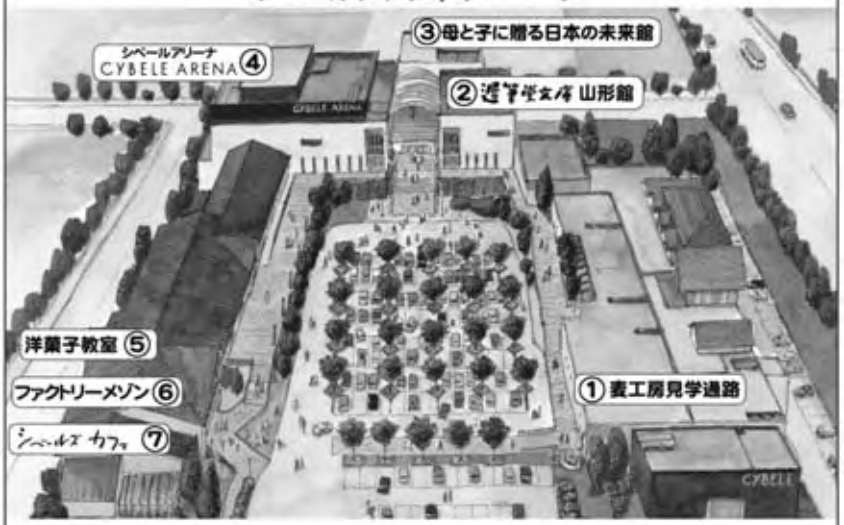
特集／里山

序章・里山六景／千歳山こんにゃく店・丹野正美さんに聞く／盃山がはげ山だった頃／みんなで遊ぼう「三吉山」！／天童「舞鶴山」の今昔／モンテディオ山形の選手たち大蕨の棚田再生に奮戦／森林観察者の里山考／白鷹山山麓 作谷沢畑谷　まんだらの里へ／山形の城を歩く／瀧山考／西蔵王高原 山形市野草園を訪ねて／西蔵王高原の魅力 再訪・まんさくの庭／富神山のふもとで／やまがた街歩き／他



ラスクのふるさと やまがた

シベールファクトリーパーク



ラスク工場の見学や図書館で本をみたり食事やお買いもの、家族で１日中遊べます

① 麦工房見学通路
（ラスク工場）

多い日で約2万本のフランスパンが並ぶさまは圧巻！

見学時間／10:00〜15:00

② 遅筆堂文庫 山形館
（ちひつどうぶんこ）

tel:023-689-1166

作家 井上ひさしさんの約3万冊の蔵書を館内で自由に閲覧できます。

開館時間／10:00〜19:00

※貸し出しは行っておりません。

③ 母と子に贈る日本の未来館

tel:023-689-1166

ボローニャを体感できる空間。井上ひさしさんを取り巻く人々の資料などを展示しています。

入館料 大 人　500円
高校生・大学生　300円
小学生・中学生　無料

④ シベールアリーナ

劇場、体育館、コンサート。変幻自在のホールから一流の演目が飛び出します！

催し物については下記URLでチェック！
http://www.gen.or.jp/

※催し物がない場合は閉館しています。

⑤ 洋菓子教室

tel:023-689-1361

シェフがやさしくケーキ作りを教えます。4〜6名で予約して下さい！　※要予約

費用／2800円〜3600円
（1ホールにつき）

⑥ ファクトリーメゾン

tel:023-689-1136

ラスク・ケーキ・パン、どれも工場出来たて！
夏は特製ジェラートも！

営業時間／9:00〜20:00

⑦ シベールズカフェ

tel:023-689-1137

石窯で焼きあげる熱々ピザやパスタ、サラダなどが手軽に楽しめます。

営業時間／10:30〜20:30
（入店20:00まで）

＊①④⑤⑥は1/1定休日
②③④は12/31〜1/3休館日

きっとみつかるハートのラスクは本物のしるし

株式会社 シベール
山形市蔵王松ケ丘2-1-3
TEL 023-689-1131 FAX 689-1133

http://www.cybele.co.jp/ CYBELE

やまがた街角 秋

通巻第74号 2015・9・1 発行

特集企画／里 山

序章・里山六景　2
千歳山こんにゃく店・丹野正美さんに聞く　4
盃山がはげ山だった頃　解凍マンモス　8
みんなで遊ぼう「三吉山」！　上山三平　12
天童「舞鶴山」の今昔　安喰洋一　16
モンテディオ山形の選手たち大蕨の棚田再生に奮戦　横山成彦　18
森林観察者の里山考　佐藤誠二　20
白鷹山山麓 作谷沢畑谷　まんだらの里へ　鈴木行雄　28
山形の城を歩く 17　楯岡城跡　保角里志　32
瀧山考　黒木あるじ　37
西蔵王高原　山形市野草園を訪ねて　40
西蔵王高原の魅力　再訪・まんさくの庭　43
富神山のふもとで　ボタニカルアート／画と文／杉崎文子　44
やまがた街歩き《秋三昧》　八向　茂　46

やまがた街角グラビア《女》モンテ・サポーター　鈴木未樹さん　48
長谷川コレクション 60 月江泛舟図：田近竹邨筆　長谷川吉茂　50
県内美術の新鋭たち 9 樋渡理志　都間仁　53
話のソラシド 40 昔話、べこの実力　服部公一　54
エッセイ「物語を作る」　橘　千枝　58
ふた粒の涙　小山清春　60
百年老舗／㈱小松印刷所　64
神社散歩／医王稲荷神社　66　松原山神明神社　68
館々学々　ミュージアム再発見 3 山形県立博物館教育資料館　70
旅籠町今昔　旅籠町大火と旅籠屋　市村幸夫　76
イザベラバード・ウオッチング　最終回　野々村邦徳　78
蔵王史話　1　新関昭男　84
【やまがた好古酔連】 7 上山藩士金子清邦宛書状を読む(2)　長南伸治　90
2015 Monte Page　越智隼人　96
編集後記　98

yamagata:east

三吉山

kaminoyama:east

三吉山

特集企画◆里山

序章・里山六景

・千歳山【山形】

（標高 約四七一メートル）

アカマツに覆われ、お椀を伏せたような丸く優美な山の姿は、山形市民の人々の心に憩いと安らぎを与えている。千歳山登山が学校行事だったこともあり、「ふるさとの心の山」として今でも毎日登山を楽しむ市民がいる。「阿古耶の松」の悲しい恋の伝説や平清水焼きの陶芸の里など見どころも多く、春には麓の千歳山公園では桜が咲き乱れ花見の市民で賑わう。山形市のシンボルのような存在だ。

・盃山【山形】

（標高 約二七九メートル）

学校の遠足や登山といえば千歳山と並んで盃山だったという山形市民は多く、旧制山形高校の学生だった作家亀井勝一郎が訪れたのもこの盃山。現在も頂上の古峯神社の参拝へ毎朝登山を楽しむ会がある他、馬見ヶ崎川沿いのジャバ駐車場から沼の辺の森をまわってくる市民ハイキングも行なわれている。山と川の遊び場として子供のメッカだったような、いつまでも懐かしい山。

・富神山【山形】

（標高 約四〇三メートル）

二等辺三角形にとんがっているので「トガリ山」と地元の人達は親しみを込めて呼ぶ。また戦国時代に直江軍が山頂から十日待っても山形城に霞がかかって見えなかったので「十日見山(とかみやま)」と呼んだともいわれるが、古代から神と崇められていたというのが文字通りの由来。山頂から真下には田園風景、その先に市街地、そ

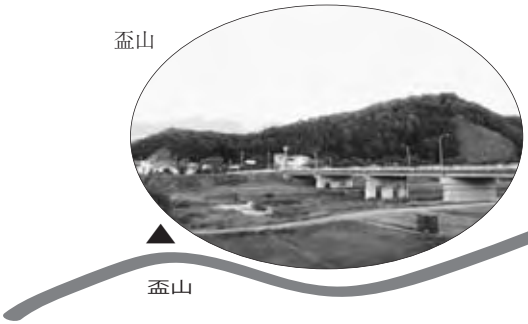
富神山

富神山

虚空蔵山

虚空蔵山

kaminoyama:west



して蔵王山脈が見える天空パノラマは一度見たら忘れられないほどの絶景である。

・三吉山【上山】

（標高 約五七四メートル）

三吉山はむかしは大岡山と呼ばれていたが、村人が秋田の太平山三吉神社から分霊し、祠を祀るようになってから三吉山と呼ばれるようになった。山頂には梵鐘が据えられ大晦日には参拝者で賑わう。また峯続きに葉山がある。葉山は元々祖先が眠る里山を表し精霊が住む所とされ、決して高い山であってはならないと伝えられている。

・虚空蔵山【上山】

（標高 約三五四メートル）

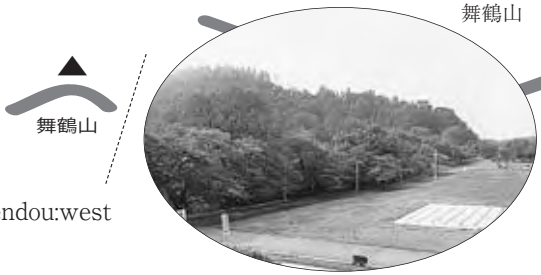
上山市街の西部に誰からも親しまれる虚空蔵山がある。ちょうど山形の千歳山の形に似ている。中世の山城・高楯城があった山として知られ、山頂には虚空蔵堂が建つ。一般的に虚空蔵という名のつく山は真言密教とのかかわりがあった山である可能性が高いといわれている。虚空蔵は仏教伝来とともに伝えられた菩薩で、福徳や知恵を授ける仏として信仰されてきた。

・舞鶴山【天童】

（標高 約二四二メートル）

天童市の中心部にある舞鶴山は、まちのシンボルとして市民に親しまれ、山頂の展望広場（平成二十一年度に再整備）からは、月山や朝日連峰、最上川などが一望できる。この山は、昔天童城があった場所。また、舞鶴山は桜の名所としても知られています。4月下旬の土・日にはおよそ二千本の桜の下で、天童桜まつり「人間将棋」が行われる。

地域に溶け込み親しまれている里山は他にもたくさんあります。ここに挙げた六つの山は編集部が任意に選んだものに過ぎません。



【小口川柳】作品は「川柳やまがた吟社」のお協力により掲載させて頂いております。

特集企画◆里山

千歳山こんにゃく店・丹野正美さんに聞く
千歳山よもやま話

名物・玉こんにゃく

変わりゆく山への思い

「山が荒れている」

千歳山こんにゃく店の店主・丹野正美さんは、開口一番そう言った。千歳山の麓で八十年暮らし、山を見てきた。その声は「俺の山が泣いている」と、そんなふうにも聞こえた。流麗な山容に比べ、山はもう穏やかには話せないほど荒れていると、優しそうな瞳（まなこ）をこわばらせた。

そして、「こんな話からでいいんでしょうか」と、我に返ったように居住まいを正し、こちらの質問を待った。

「かまいません。大事なことです」

ほっと相好を崩し、丹野さんは話し始めた。ためていた言葉を選ぶように、ときおり縁側の向こうの山の斜面に目をやりながら。

いろいろ話を聞かせて下さった丹野正美さん

「私はこの山に育てられました。私の父や母のようなものです。だから、山に感謝しなければなりません。しかし、今はもう荒れ放題です。時代とともに山も変わりました」

現在、千歳山は国有林であるが、その途中でも管理が県や村になったり何度も変わった。そのたびに切っては育てるということを繰り返してきた。その結果、樹齢が揃わずに松の緑がまばらになった。それは雑木林を増やすことにもなった。

また、ひと頃まで農家では野良仕事の合間に毎年千歳山に登り、柴刈りをし囲炉裏や釜土の薪にしていた。その

刈り取った跡は松の木の生育に潤いを与え、山を松林で緑一色に覆った。しかし、今では腐葉土が堆積し、老松の風倒木もあり、松食い虫の被害が群生した松林を急速に衰退させてしまった状態にある。

山形のシンボル千歳山。右の建物が「千歳山こんにゃく店」。正面奥は千歳山稲荷神社への登山口。麓の小路を左の東方向に行くと萬松寺がある。

「文明って怖いですね。樹木が原発や化石燃料に変わり、今こうして我々がいる。松だって日照が必要なんです。でも増え続ける雑木のために遮られてしまっている。鳥のさえずりさえ聞こえない。山はもっと自然であるはずです」

丹野さんはそこで腕組みをし、しばし再び山の斜面を見上げた。

四季の移ろいを楽しむ

千歳山は標高四七一・三メートル、山形市の東部にある。お椀を伏せたようなその姿は松林に覆われ、四季の移ろいを華麗に彩る。丹野さんはそれを長らく体で感じ取ってきた。

「春は澄んだ空気と木々の芽吹きに病みつきになり、以前は毎日登っていました。夏は登山の後のビール一杯が美味いし、秋は木々の葉の色づく変化が目を楽しませてくれます。周りの高い峰から中心の千歳山に迫ってくる変化も日を追うように眺めて楽しめます。冬にも登る時があります。ここと頂上では気温が四度くらい違います。下がマイナス三度なら頂上はマイナス七度くらいでしょうか。高さの距離でなく、温度の差で標高を感じ取ることができるのも楽しいですね。寒い冬でも登れば汗が出て体も温まります。爽快な達成感が何とも言えません」

丹野さんにとって冬は格別のようだ。子供の頃に見た景色を思い浮かべながら続けた。

「一月の中旬頃ですと、中腹くらいからでも朝靄が真っ白く雲海のようにたなびいていて、所々に突き出したものが見えるんです。子供の頃は、教育会館と専称寺の大きな屋根に緑町の放送局のラジオ塔が三つ突き出て見えました。最近では山形駅のセントラルビルと東北電力のアンテナ、それに十日町の高層マンションなど高いビルが顔を覗かせます。当時からするとだいぶ景色は変わりましたが、昔は神社仏閣の鎮守の森が点在して見えて、街はそっくり田園の中にありました。南の端が鉄砲町辺りで、北は銅町辺りでした。その間を蒸気機関車が煙を吐いて走って、街の両端にかかると汽笛を鳴ら

していたように思います」

千歳山から下界を見おろしながら、丹野少年はずっと山形の今昔物語を見てきたことになる。何かとてものどかな羨ましい話だった。

【右】店の前の普賢菩薩の裏にある道標の石碑。「海道ちか道有之」と「左大佛殿四丁」とあるが年号は不明。
【左】国道沿い笹堰に立つ「すじかい阿古耶はし跡」の碑

参拝者の掛け茶屋から

さて、千歳山こんにゃく店の歴史は九十年になる。先代の丹野清太郎とほぼ半分ずつの年月が過ぎたことになる。最初は板こんにゃくだったが、昭和初期の創業当時から「一玉一銭（ひとたまいっせん）」で売ろうということで丸い玉こんにゃくにした。「玉こん」と揶揄されながらも、みるみる人気を得て万人が好む千歳山の名物になった。

千歳山中腹の登山道から山形市街地を望む

そもそも清太郎は千歳山へは一人で住み着き、参拝者のための掛け茶屋を始めた。参拝者の多くは日中は野良仕事をする農家だったので、店は夜明け前に準備して開けた。父は焦げた鉄瓶と鍋の底を磨く「へそびかき」やランプの「ほやみがき」などをしながら、神社の灯明の客を迎える準備に追われていた。

「父清太郎はいろんな客から親しまれ、買い物は皆客に頼み居ながらにして物が買えた。ついでに街場の情報も聞くことができた。父はこんにゃくに劣らない人気があった。八日町の新関家、鉄砲町の鈴木たねもの屋と並んで三大名物人間とももてはやされたりしました。心の扉を開いて接客することを、そんな父の姿から学んだ気がしています」と丹野さん。

清太郎は、また萬松寺の住職平清水千秋と神主の武田真鉄（まがね）とともに「お山の大将」として〝三馬鹿〟の一人でも

あったとか。御仁に冷やかしは勲章にもなる好例である。

千歳山公園のことなど

少し千歳山周辺について聞いた話もしておく。松茸が採れた話では、入札制度があったことを知った。選ばれた者は山小屋に寝泊まりして松茸の見張りをする「止め山」があり、それがあけると、われ先にと一番を競い合った。その後に一般の人が松茸の取り残しを争って取り合ったという。

「松茸の採り方は下ばかり見ていてはダメで、松の木の枝振りや日照の角度など上を見て採るという人がいました。それは〝とりつけ〟と言って、きっと長年の勘なのでしょうね」

豊作の時期には、こんにゃくと一緒に店先に並べても売った。

店の前の千歳山稲荷神社の階段を上ると、じき赤い鳥居が並んでいる。寄進者が競って立てたもので数が増え、緑の樹木の中で凛とした気配を漂わせている。寄進できるまでにご加護を頂いたという表現で、寄進者の心の拠り所でもあるという。

店の右手を山づたいに行くと千歳山公園に出る。そこの桜は在日朝鮮人の帰国記念に植えられたもので、戦後しばらくまで山芸者が花見に色を添えていた。

「山形のお偉いさんがたくさん来ていました。『万松閣』という料亭があったとかで、昭和六十年頃までその小屋だけは残っていました。トタン屋根で、『エビスビール』の看板もひと頃までありました」と、丹野さんは記憶を描くように宙を見上げて懐かしそうに語った。

大仏殿建立を伝える安全地蔵尊（千歳山公園）

最後に、同じ千歳山公園の〝幻の大仏殿〟について聞いた。

「もし大仏殿ができていたら市街地から見えたでしょうね。うちの店の横に〝左大仏殿四丁〟と刻まれた追分石があります。残念なことに建物は天保年間に焼失して、製造中だった大仏も再建かなわず、三メートル近くはある木彫の頭部だけが平泉寺大日堂に祀られて残っています。おかげさまで桜は今でも毎年きれいに咲きますので、公園は花見客で賑わっています」

丹野さんは、千歳山公園から近くに射撃場のあったことも教えてくれた。

「流れ弾が飛んできたことがある」と、目を見開いて話した。話は尽きない。

再会を期し、この座を終えた。

毎晩ドンチャン騒ぎをしていたと聞いています。

つぶやきの虫干ししてるひなたぼこ

伊東　マコ

特集企画◆里山

盃山がはげ山だった頃

解凍マンモス（エッセイスト）

今年解凍マンモスは七十歳になる。趣味は四駆で山遊び・キャンプ・焚き火・水潜り・読書。好きな飲み物は冷やしビール。ウヰスキーはショットグラスで二杯ぐらいが丁度いい。

キャンプは特に里山の少し奥の川沿いでするのがお気に入り。場所に寄っては流木が山ほどあり薪集めに苦労しない場所があれば言うこと無しである。

好きな食べ物は、季節にも寄るが春はタケノコ、ウドの芽、イワナ等。秋にはブナカノカや舞茸。それらを贅沢に天ぷらに仕立てて沢水で蕎麦をしめて食すれば正に天国。谷川の水はビールを冷やしたり蕎麦を洗ったりするのに丁度いい水温だ。

山仲間四、五人集まれば「今度どさ行く?」の相談が始まる。タイトルは「里山で天麩羅蕎麦食うキャンプ」に決定！

そして、夜は満天の星空の下で流木を大型トラック一台分ぐらい積み上げた焚き火の火柱を楽しむ「焚き火バー」の開店だ。オトナのキャンプは夜が本番！闇に光る動物の目やフクロウの鳴き声が怪しく響く。不思議な魅力は暗闇だからこそ盛り上がるのだ。

そんな自由な外遊びが好きになったキッカケは友達と盃山に登って河原の石工小屋で野宿した昭和二十九年夏を想いだす。……後に見た映画Stand By meそのもので、オイラ達は第八小学校の五年生だった。歳月だけを思えばそれは遠い昔のことだ。

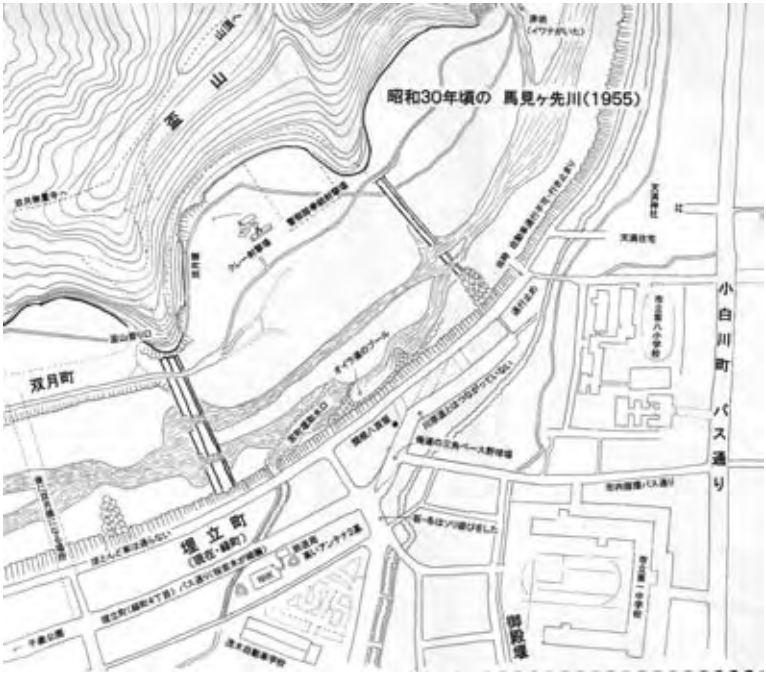
オイラ達はいつも埋立町（現在の緑町）のＮＨＫ山形放送局（今は消防署）を中心に盃山や千歳山、馬見ヶ先川原を〝陣地〟として遊んでいた通称「うめたん」埋立町少年探偵団だ。と言っても団員は四名である。

当時、信じられないだろうが盃山はほとんどはげ山で一本の木も無く見晴らしが最高だった。土手沿いの

家の窓から山の上を歩いている人や登っている人が良く見えた。戦争中里山の雑木林は燃料の薪として使われたのがはげ山の理由らしい。

それにしても、今となっては信じられない事が里山で行われていたのだ。その事実とは！馬見ヶ先川原で、いい大人が盃山に向かって散弾銃を撃ちまくるクレー射撃大会が行われていた。その隣では警察隊のお巡りさん達が盃山に向かって実弾射撃訓練をしていたのだ。里山の動物達にとって迷惑な時代だったに違いない。そのクレー射撃場の塹壕の様なコンクリートの跡形は今でも確認できる。**（周辺地図参照）**

これに驚いてはいけない。一方山形市内の道路事情もコンパクトなもので、駅から東に伸びる道路は南高等学校で車道路は行き止まり。そこから千歳山の根元まで家が一つも無い。腹が減ったらその辺の夏りんごを食べながらあぜ道を歩いて千歳山に遊びに行ったものだ。景色をサエギル物は何も無かったのだ。一方旧県庁舎から西に向かう道路は現在のジョイの所がT字路になっていてその先は畑と田んぼが西



【上】盃山山麓の馬見ヶ崎川周辺地図
【下】馬見ヶ崎川河原の土手からの眺め
(昭和 29 年当時)
※写真、地図、ともに筆者提供

舟山　智恵

の山まで見えた。今の西田町はまだ無かった。馬見ヶ崎川原の土手は散歩道で、天満神社の先から車の往来ができなかった。開墾という言葉が尊ばれていた時代のことである。山と村落の間の里山が大切に守られていたような気がする。開墾の言葉をほとんど聞くことも無くなった現在、住宅地はどんどん山に入り込み、放置された農地は自然に帰り、雪が少なくなった分イノシシ・サル等が北上しているらしい。そいつらと連絡を取り合っている訳でもないので詳しい事はわからないが…。西蔵王高原で畑をしている別荘の主はイノシシの襲撃を受け一夜にして収穫間近のさつま芋畑がメチャメチャに掘り起こされて全滅しているのを見てイモ類の耕作をあきらめたと言う。ハンターの高齢化も原因の一つと指摘されている様だが、人間が宅地開拓とか言って里山に食い込んでいるような気もする。

春、盃山は賑わった。当時ＮＨＫ山形放送局には軍事基地みたいな二基の大きな鉄塔がそびえていて埋立町のシンボルだった。盃山の登り口はその対岸にあって、丸木橋を渡って双月側に行ったものだ（双月橋はまだ無い）現在はバイパスが通り山は大きく削られて登山道路は消滅した。バス通りは当時から桜並木がきれいだった。当時放送局はＮＨＫのみだったのでＮＨＫとは言わず「放送局」と呼んでいた。

放送局の敷地内に試験放送用のテレビジョンが窓越しに設置されていたので時々見に行った。人気の相撲放送の時間になると大勢集まった。横綱鏡里や吉葉山・栃錦・千代の山・若の花の時代で盛り上がった。宝沢からわざわざ見に来る同級生もいたほど、その当時テレビジョンはとても貴重で画期的だったが、それ以上に今ではとても考えられないことが馬見ヶ崎川原で行われていた。

それは、前に書いたが、警察隊が射撃訓練と称して馬見ヶ先川原で盃山めがけて実弾をパンパンぶっ放していたからだ……それだけではない、その隣には、猟銃用のクレー射撃場もあり時々大会をして盛り上がっていた。鉄砲を持ったオジサン達がポインター犬を連れてジープで乗り付ける。アメリカの西部劇でしか見たこともない派手なハンター服を着て、チョッキに散弾銃の玉をいっぱい差し込んで発射台で構える。まるで当時放送されていた名犬ラッシーに出てくるガンマンみたいでおかしかった。そして「フォー」とか「ハー」とかの声を発すると……塹壕のような所から勢い良く黒と白の小皿が盃山めがけて飛び出す、すかさずハンターの散弾銃が火を噴く……バーン発射音がスゴイ白煙が流れ当ると小皿が空中で粉々に砕け散る。ハンター仲間は拍手するが、オイラ達は当るとガッカリ、外れると内心喜んだ。

それは、当たらなかった小皿を拾いに行くのが楽しみで、オイラ達探偵団は落下位置を記憶しておき手分けしていっぱい拾った。今考えると貧乏くさい遊びだった。

そのピストルや猟銃の音を聞くと三角ベース野球どころではない。本物のピストルや鉄砲が見られるチャンスとばかり何をほっぽっても馬見ヶ崎川を渡り見に行った。民家がすぐ近くにあるにもお構いなしでバンバン実弾射撃をしていたの

盃山から馬見ヶ崎川を見おろす

でオイラ達探偵団はいつも一番早く行き特等席で見学した。

しかし、警官隊の射撃訓練はそう簡単には見せてくれない、近付くだけで見つかり何回も怒られた。草むらに隠れてほふく前進、実弾射撃を見学するのも探偵ごっこの基本であるとばかり何度も挑戦、射撃場はバラ線で囲われていて近寄ることが出来ない。警官隊が撤退するのを待って射撃場に忍び込み、山に打ち込まれた鉛玉や銅玉、空薬きょうを拾って遊んだ。真ちゅうの金色の輝きと火薬の匂いが探偵行動を刺激しオイラ達は嬉嬉としていた。警察隊も貧乏だったのか空薬きょうはひとつ残らず回収していたので滅多に落ちていなかったが、その分見つけた時は嬉しかった。その場所はバイパスの北側で盃山を大きく削った崖の右側にクレー射撃場があり、小さく削った崖の左側奥まった根元にピストル射撃場があった。先日散歩の途中に探検してみると、コンクリート製の塹壕の様な跡形も確認できた。鉛玉を打ち込まれた山肌はひっそりと残っていたが、里山としての美しさは感じられない。

盃山の漆の木が赤くなる頃、学校行事の芋煮会が行われた。各自お椀とはしを持ち寄り、ＰＴＡのお父さんお母さん達と一緒に作った芋煮を皆で食べた。旨くて何杯もお代わりして食べたあの味が今でも忘れられない。昭和二十九年のことだから肉も醤油も今ほど上等でなかったはずなのに旨かったなぁ～。

伝統の芋煮会は余計な材料を入れないのが基本だ、芋から出るうま味はとろとろの白い泡にあるらしい。アクでは無いのでそれを取らないのが美味さの秘訣らしい。

あの頃夢中だったものに「馬見ヶ崎川原で砂金探し」「川原で水晶拾い」「盃山山頂の白い十字架の秘密」「赤岩で幻のイワナしぇめ」「馬見ヶ崎川原で一番うまいドッコン水はどこだ」「川原の石工と弁当開き、なぜ石工は青南蛮を焼いて食べるのか」「川原のニコヨンって何?」「八小の暁登山！なぜ山形市民は蔵王の暁登山が好きだったのか」「幻に終わったＢ29三機墜落現場探検登山」「埋立町あけぼの子ども会の夏休み旅行はなぜ作並温泉の岩松旅館だったのか」…等々まだまだ秘密は尽きない。

勉強は少しで遊びがいっぱいの昭和二十九年頃の埋立町少年探偵団は大人になる土台がいっぱいあった。そして里山は魔法のような空間だった。あの当時肥後守の小刀を大切にしていたが無くしてしまった。小さい町だがオイラには全世界だった。

みんなで遊ぼう「三吉山（さんきっつぁん）」！

上山三平（フリー・ライター）

まず、三吉山の八合目付近にある岩場にご注目！

実にのほほんと見えるあのわれらが三吉山の風貌から、自然時間の壮大なドラマがみえてきます。

今では、元日参り以外、近所の子どもたちもあまり入ろうとしなくなった三吉山だが、かつては豊かな遊び場でした。気軽にのぼれる登山道沿いでさえ栗拾いが存分に楽しめたし、「カイコン」（開墾地）と当時呼ばれていた麓の傾斜地では雪が降るとスキーも楽しめました。昭和三十年代、遊びのバリエーションが少なかった時代のことですから単純には比較できませんが、ゲームやスマホに興じている今の子どもたちの嗜好がある意味では偏った寂しいものに思えてきます。取材のときもトンボが親しげに肩にとまったり、栗が目の前に転がっていたり、けっこう癒される体験でした。「子どもたちよ、スマホをおいて、たまには野に出てみよう！」と呼びかけたい気持です。

当時は氷期ですから、氷で被われた地表面に上昇したマグマは、瞬間的に急激な冷却に晒されます。その時マグマは、ガラスを割ったような状態にされ、このような形状の岩石になったものらしい。

三吉山には氷河時代の痕跡がそのまま残っている?

位置的に蔵王連峰の麓にある三吉山は、ともすると成り立ちも蔵王連峰と一緒のようなイメージがありますが、全く違っているのだそうです。厳密に言うと三吉山を含めた「葉山」一帯の造山活動は今から十二万年程前に遡るそうで、蔵王連峰の形成より遙かに古いとのことです。

元上山市立図書館長・吉野智雄さんに教えていただいたのですが、三吉山には誰もが驚いてしまう凄い自然遺産があるのです。耳慣れない専門用語ですが「岩海」（がんかい）と呼ばれる氷河地形のなごりを示す岩場とその岩石の存在です。上に掲載した写真がそれです。

登山道を登って行くとちょうど八合目あたりに突如樹木の育たない岩石だらけの場所があります。吉野智雄さんに教えて頂くまで意識して見たことはありませんでしたが、あらためてジッと見てみると、どの岩石もほとんど同じ位の大きさに破砕されたような形状になっています。上流から押し流されてくる河川の岩石の形状とは全く違う、ほんとうに妙な岩石だけの場所なのです。

これが実は約十二万年ほど前の氷河時代の痕跡そのものなのだそうで、びっくりです。

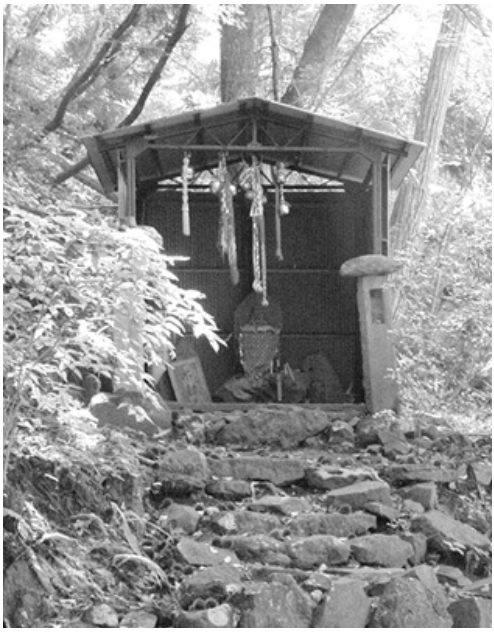
そして、その岩場（風穴地形とも呼ばれている）は、年中

同じような冷気（※一般的には摂氏三度～八度位）状態にあり、体感温度としては冬は温かく夏は涼しい環境をつくっているのだそうです。「ヒロハヘビノボラズ」という亜高山性の植物がこの岩場に植生している理由も頷けます。

※三吉山での観測記録はない。しかし、同じような地形で県の天然記念物に指定されている「じゃがらもがら」等の観測では実際摂氏三度～八度位のデータが出ているそうです。

散策のすすめ

三吉山は穏やかな山ですが、登山道の勾配は急で、雨あがりなどは特に足元に気をつけてください。四合目付近まで車でも行けますし、徒歩で登り始めて間もない五合目と七合目あたりにはそれぞれきちんとした水飲み場があり、とりわけ五合目の水飲み場のそばには祠（上段左写真）も建っていて休憩には丁度良い場所です。ミズナラ、クリ、ケヤキといった高木からヤマブキ、イタヤカエデといった低木までさまざまな樹木が楽しめますし、もちろん折々の野草も見逃せません。木洩れ日も素敵です。山頂にはお馴染みの三吉神社があり、市内を一望するに最も素晴らしいポイントと言えます。



5合目の水飲み場近くには祠がたっている

「月刊かみのやま」より転載

●歴史など

『上山見聞随筆』にある三吉山関連の記述を編集部で意訳してみると次のようになります。

天保七年（一八三六）金沢村（現金生地区）の鈴木源右衛門という人が父の病気を治そうと、秋田の大平山三吉山大明神（現秋田市）にお祈りした。その結果、思いのほか霊験があり、鈴木さんは、翌八年に当山に祠を建てて祀った。それ以来三吉山と称するようになった、とあります。それまでは葉山一帯は「大岡山」と呼ばれていたようです。

年かさね可愛い嘘もついてみる

斎藤たか子

いつも、人がテーマです。

セレモニー&レセプション
パレス グランデール
〒990-2432 山形市荒楯町一丁目17-40 TEL(023)633-3313

4,900円(税別)の上質をあなたへ

Maker's Shirt 鎌倉 山形七日町店
山形市七日町1-4-16 アドレス七日町 マルトノムラビル
TEL 023-622-3560 http://www.maruto-nomura.co.jp
定休日:毎週火曜日 契約駐車場:エチゴヤP、栄玉堂P

vigo FM 78.8MHz
with comfortable music...
Now On Air!

やまがたシティエフエム株式会社
山形市中桜田3-1-11(青春通り)
TEL◎023-625-0788
FAX◎023-625-0861

vigo mail

くらしに役立つ耳より情報から、各メーカーの新商品情報、試写会情報、VigoFMお薦めのアーティスト・各種イベント・コンサート案内まで最新の情報を毎週無料であなたの携帯・PC端末に配信します。番組からのプレゼント案内も多数!今すぐ下記アドレスまでアクセスを!!

vigo@jamta.jp

(iモード・J-Sky・ezWeb全機種に対応!)
なお、本サービスはメールアドレスの転用を致しません。
※番組へのメッセージは、vigo@vigofm.co.jpまで。

作翁山 長泉寺 富神山山麓 山形市を一望できる

戸上霊園 第二墓地 好評分譲中

❶ 宗旨、宗派問わずどなた様でもお求めできます。
❷ 年間管理費4,000円以外の費用は一切かかりません。
❸ 後継者のいない方も心配ありません。ご相談ください。
❹ 契約後1年以内の建墓者に10万円の建墓支援サービス。

墓地永代使用料 ・28万円(完売)6尺 ・38万円 5×6尺 ・48万円(完売)7尺

一休さん ナイガイ

株式会社 ナイガイ メモリアル事業部 山形店:Tel.023-646-1919
URL:http://www.n-mmr.co.jp

天童「舞鶴山」の今昔

安喰洋一
「NPOしん」代表

舞鶴山。海抜二四一メートル。天童の町の中心に位置し、市民の憩いの場所となっている町のシンボル的な山。天童の町が、海抜約百メートルぐらいなので、実際の高さはエジプトのピラミッドと同じくらいの、丘のような小さな里山である。桜の開花期に、山頂で毎年行われる『人間将棋』は、広く全国に知れわたり、天童市の最大の観光行事となっている。

ちなみに、『人間将棋』が現在の場所で開催されるようになったのは、昭和四十七年（一九七二）からで、それ以前は、西に少し降りたところの広場でおこなわれていた。バイパス（現在の国道十三号線）をつくるため、土が必要となり、畑だった山頂を削り取って整備してつくったのが現在の場所になるわけだが、私たちの世代（昭和三十年代以前生まれ）にとっての『桜祭り』は、筵（むしろ）を敷いて『舞台』での『おかぐら』や『映画』（「ビルマの竪琴」等）を見て楽しんだ『昔の桜祭り』である。子どもながらに、酒に酔った大人たちが、あやしげな雰囲気のなかでくりひろげる夜の舞鶴山の饗宴を、興味深くながめていたことが思い出されてくる。

人間将棋野試合の模様（昭和40年）

私は、西に下ったところの、舞鶴山の一部といってもいい、小路という地区で、昭和二十五年に生まれた。物心のつきはじめた昭和三十年代初期は、社会全体が、まだまだ貧しい時代で、テレビもなく、外で暗くなるまで遊んだものだった。

そんな私たちにとって庭のような舞鶴山は、かっこうの遊び場で、『チャンバラ』・『木の実採り』・『水晶探し』・『洞窟探検』、そして冬は『スキー』（女の子は『タケ下

市民に親しまれている舞鶴山全景

駄』）と、一年中暗くなるまで遊びまわったものでした。

なかでも、特に印象に残っているものに、『あたご沼』の水辺での『芋煮会』があります。なべや食材、また、莚などをリヤカーに積み、みんなで引っ張っていった当時のことが、なつかしくよみがえってきます。釜をつくる係、たきぎをとってくる人、調理をする人等々、役割を決めての共同作業は、小学生の私たちにとって、とても新鮮で楽しいものでした。芋煮ができるまでの間、平べったい石をさがして、沼に向かって回転させて投げ、水面を何回飛び跳ねさせることができるかを競った『水切り』は、得意だったこともあり、自慢の一つでした。当時、深緑に濁っていたあたご沼も、現在はきれいに整備され、周囲の人々、また観光客の癒しの場となって親しまれている。

また、舞鶴山は戦国時代、山城としての天童城であったが、天正十二年（一五八四）に、山形城主最上義光との戦いに敗れ、天童城は落城し、そのあとに最上義光は『愛宕神社』を創建し、宗教政策によって民心の掌握を図ったのだった。以来、舞鶴山は愛宕山とも呼ばれるようになった。

その『愛宕神社』から直線にして約五百メートルほど北に行った山腹に、織田信長を祭っている『建勲神社』がある。幕末四十年足らずであったが、織田信長の二男、信雄を祖とする天童織田藩が、当時天童三十六ヵ村の内、九ヵ村を所領として支配していた関係で、明治三年（一八七〇）に建てられた神社で、戦国時代の著名な二人の武将がかかわる建物が、舞鶴山中のすぐ近くにあるというのも、今思えば不思議なことだが、もちろん当時の私たちは、そんなことは知る由もなく、『チャンバラ』や『かくれんぼ』などをして遊びまわったものでした。

余談になるが、『シンチュウグン』・『カモン！』・『パンパンガール』・『ビニジュウク』・『チョコレート』・『チュウインガム』などのことばも、子供のころ、舞鶴山を縁として、学校でなく、社会から教えてもらったので、今でも忘れないで覚えている。

花
花キューピット
JFTDのフラワーギフト全国宅配システム
心と心を花でむすぶ
ムスメヤ
山形市七日町一丁目４の19
TEL 023(641)3265
FAX 023(625)1936

モンテディオ山形の選手たち
大蕨（おおわらび）の棚田再生に奮戦

横山成彦
（株式会社モンテディオ山形事業推進部）

「日本棚田百選」に選ばれている美しい大蕨の棚田（山辺町）

山形市から西へ車で三十分。山辺町西部の山間部に大蕨という地域がある。大蕨には「日本の棚田百選」に選ばれる棚田があり、秋になると一面が黄金色になる地域の宝だ。刈り取った稲を杭掛けし、天日干しされている様は、まさに壮大で「日本の棚田百選」にふさわしい里山の風景美を誇っている。しかし、この大蕨棚田は地域住民の高齢化や担い手不足などにより、百選の棚田は最盛期の三割しか残っておらず、継続的な耕作活動が困難な状況になりつつあった。

二〇一一年三月、Jリーグクラブ・モンテディオ山形を運営する山形県スポーツ振興21世紀協会と山辺町、フィデア総合研究所、地元の中地区有志の会、グループ農夫の会の五団体が、大蕨の棚田の再生を目指す協定を結んだ。目的はもちろん、大蕨棚田の再生と大蕨地区の活性化だ。

二〇一一年五月十五日、モンテディオ山形のチーム、クラブスタッフ全員が地域の方々と一緒に田植えを行い、交流会を楽しんだ。耕作地は四十アール。選手のほとんどは田植えをしたことがなく、ぬかるむ足元に苦戦しながらも無事植え終えることができた。家族を連れて参加した選手もおり、普段はできない体験に自然と笑みがこ

田植え風景

ぼれていた。

米の品種は里のゆき。中山間地域での栽培に適した低アミロース米で、冷めてもおいしいのが特徴だ。九月の稲刈り、十月の収穫を経てモンテ棚田米、大蕨棚田米として世に出ることになった。モンテ棚田米は主に山形県内、大蕨棚田米は主に県外向けに作られたもので、パッケージが異なるだけで中身は一緒のものだ。デザインは東北芸術工科大学の中山ダイスケ教授、「アル・ケッチァーノ」の奥田政行シェフ監修の「おいしい炊き方レシピ」が付属している。販売するときはグループ農夫の会にも手伝ってもらい、クラブスタッフ、選手と共にスタジアムで販売する。また、一つ販売するごとに強化費がクラブに入ってくる仕組みになっており、モンテ棚田米の上々の評判と共に、クラブの支援になるということで、十月になると毎年楽しみに購入する人々が多い。

石川竜也選手

モンテディオ山形の棚田への取り組みは、モンテ棚田米に関わる一連の事業だけではない。毎年二月には、「モンテディオ山形杯 雪中棚田サッカー大会in大蕨」に協力し、ジュニアユースも参加して、熱戦を繰り広げている。一・五m以上の積雪の中、ジュニアユースが毎年棚田の最上部まで走って登り、滑り降りてくるのは、大蕨・冬の風物詩となっている。

商品化された棚田米

こうした活動を続けて今年で五年になる。徐々に血が濃くなるというのはこのことで、当初モンテディオ山形に興味がなかった地域の方々も応援してくれるようになり、外から見ているだけだった人たちも声をかけてくれるようになった。年を追うごとに耕作面積も増加し、今年は当初のなんと四、五倍にもあたる一・六haの耕作面積になった。

モンテディオ山形は、現在年七百回以上のホームタウン活動を実施している。その中にはもちろん、大蕨棚田の再生事業も含まれるし、選手が参加するイベントもあれば、地域のお祭りや、幼稚園・保育園などでの巡回指導など活動は多岐にわたる。

クラブがホームタウン活動を重要視するのには、少ない予算でJリーグを戦っていかなければならない背景がある。現在闘っているJ1リーグのクラブ平均予算は三十億円超。一方、モンテディオ山形は十数億円で闘っている。その中では、常勝を掲げるのは不可能だ。負けることが多い中でも、クラブが人々に必要とされ、好きになってもらうためには、選手やマスコットとのふれあいなどの直接的接点や、メディアからの情報による間接的な接点など、人々とのあらゆる接点を増やすことが必要だ。今日、クラブと関わった方が、少しでもクラブを好きになり、十年後、二十年後もまだ好きでいてくれたら、皆さんの支援や声援に少しでも応えられるのでは。そんな想いで、モンテディオ山形は日々活動している。

中川 晴海

特集企画◆里山

森林観察者の里山考

～「ゼンマイは採っても、男ゼンマイは採るな」とは～

佐藤　誠二（山形市自然環境調査委員）

◆「里山って?」

近頃、自然保護や環境保全に関してばかりでなく、いろいろな所で「里山」という言葉が聞かれます。里山というからには、人里近くのあまり高くない山なのだろうということは、誰でも想像するのではないかと思います。しかし、「どのくらいの高さまで?」とか「どんな植物が生えている?」とか「少し詳しい内容は?」となると、人によって色々な考えや説があって、よく分からなくなってしまいます。そこで、まず、「里山」という言葉は、いつ頃から、どのように使われてきたのかなどについて考えてみます。

「里山」という言葉は、一七五九年に、寺町兵右衛門という人が書いた「木曽山雑話」という本に、『村里家居近き山をさして里山と申し候』と記されているそうです。

この言葉を現代になって使ったのは、森林生態学者の四手井綱英さんで、一九六〇年代前半から使い始め、『この語は、ただ山里を逆にしただけで、村里に近い山という意味として誰にでも解るだろう。そんな考えから、林学でよく用いる「農用林」を「里山」と呼ぼうと提案した』と言っています。

高度経済成長にともなって、郊外地が開発され、身近な自然の破壊が進むと、身近な自然の保全意識が高まってきました。そういう中で、「里山」という言葉が盛んに使われるようになり、次第に一般的な言葉として定着してきたと考えられます。このような経緯からみると、「里山」というのは、人間の手によって管理された「二次的自然」が大きな構成要素となっていることが分かります。ですから、かつての薪炭林や農用林などの二次林は、里山であることは分かりますが、農地や集落などは里山に入れるかどうかで、意見が分

道路の脇の木の生え方や下草を観察中
（県民の森にて）

自然観察実施箇所

（平成 24 年 8 月～26 年 9 月）

※写真及び地図　山形市環境部環境課

かれています。

二次的自然というのは、開発によって失われますし、放置しておいても変質してしまいます。里山が里山として存続するには、人間の「管理」という適正な関わりが必要になります。この人間による適正な管理は、元々の自然の多様性にさらなる多様性を加える働きをしています。また、二次林・農地・集落は、それぞれが互いに関係し合って、一体となって存在しています。ですから、自然保護や環境保全という立場からは、二次林・農地・集落を一体のものとして、「里地」と呼ぶことを提唱している人もいます。

この「里地」という考え方を広めたのは、一九九四年に策定された「環境基本計画」です。目標の一つに「自然と人間の共生」があげられ、『国土空間における自然的社会的特性に応じた自然と人間の共生』として、自然地域ごとの具体的施策が求められています。この自然地域というのは、山地自然地域・里地自然地域・平地自然地域・沿岸地域の四域に分けられ、「里地」とい

金澤　松風

うのは、山地と平地の中間地域と位置づけられています。

以上のように「里山」や「里地」というのは、人間が「管理する」ことによって「成り立っている」自然のことですから、遠くに見える朝日連峰や月山などのような遠い山々を除いて、山形市のまわりの山々は、殆ど「里山」だということになります。

◆里山の雑木林・二次林

私たちのまわりに見られる林は、山でも平地でも、繰り返し伐採されてきて、今の姿になっているものが殆どです。このように元々の林が、伐採されたり、火事に合ったり・風水害に合ったりして破壊され、その後にできた林を「二次林」といいます。つまり、私たちのまわりの林は、殆ど二次林だということなのです。このような二次林は、スギやアカマツなどを植林して作った林を除けば、殆どが数種類の落葉樹が入り交じって生育し、成り立っています。このような林は、「雑木林」と呼ばれています。また、人里に近い二次林の山地は「里山」と言われています。つまり「雑木林」と「里山」は、殆ど同じ意味で使われていることが多いのです。

山形市を取り巻いている里山の雑木林は、コナラやクリ・ミズナラなどのブナ科の樹木を中心に、サクラの仲間・カエデの仲間・ケヤキ・ホオノキなどの樹木の仲間で構成されています。かつて、家庭の熱源が薪や木炭が主だった時代、これらの雑木林は、三十年ぐらいの周期で、伐採利用されてきました。

伐採された後の切り株からは、四～五本から多いときには十本以上もの萌芽成長が見られます。萌芽から三～四年経って、それぞれが二～三ｍ伸びると、芽吹く前、まだ雪が残っている頃、早く良い林に成長するように願い、それぞれの株で良く伸びているもの数本を残し、他は全部刈り取ってしまいます。このように、林を伐採し、切り株からの萌芽を利用して新しい林を「萌芽更新」といいます。このように、里山の雑木林という「二次林」は、定期的に更新され、下刈りなどの手入れが行なわれることによって、維持されていたのです。つまり、里山の雑木林という二次林は、人間が手を掛けて維持管理しなければ、成り立っていかないものなのです。そして、人手を掛けるということは、人間の生活に役立たないものは、淘汰されていくということを含んでいます。つまり、私たちのまわりの里山の自然というのは、長い時間をかけて人々が管理し、作り替えてきて、今の姿になったということなのです。

雑木林の萌芽更新のため、切り株から伸びた芽が適当に成長したとき、必要なものだけを残し、他は全部伐り取りました。このことが、お伽話の「桃太郎」に出てくる『お爺さんは、山へ柴刈りに～』の柴刈りなのです。この刈り取った柴は、全部、畑に運んでいって、エンドウやキウリの「手柴」としての利用しました。手柴としての利用が終わると家に運び、囲炉裏や竈で薪として燃やしました。

この時代の我が国は、全ての物は利

用できるうちは、全て利用するという高度なリサイクル社会だったと言えるのです。

◆里山の生物の多様性

里山の雑木林は、薪炭林や農用林として利用されてきたために、周期的に伐採され、伐採後の時間経過が異なる林分がモザイク状に分布していました。このモザイクは、伐採による撹乱や栄養塩の除去が、競争を緩和するストレスとなって、多様な植物が共存する種の多様性の高い植生をもたらしました。

植物の多様性が高いということは、多様な棲み家や営巣場所、多様な餌などを動物に提供することになり、動物の種の多様性を支えることになります。動物の多様性の高さは、花粉や種子の分散に関わる動物が多く、植物の種子による繁殖や個体の移動を助けることになって、植物の個体群の維持や分布の拡大に繋がることになります。

植物食の動物は、色々な種類の植物を餌にしているもの（ジェネラリスト）と、特定の植物だけを餌にしているもの（スペシャリスト）に分けられます。

杉林に落ちた枝葉の下を観察中

ジェネラリストは、多様な種の植物を餌にしているために、餌にしている植物を利用できるため、比較的安定的に個体群を維持することができます。

一方、スペシャリストは、餌としている植物が安定的に十分になければ、個体群を維持することが難しくなりますから、存在量の多い植物を餌にすることが、個体群の維持に繋がります。森林に優占樹種を餌としているスペシャリストの昆虫が多く見られるのは、そのためなのです。しかし、存在量の多い植物を餌にしているということは、個体群の維持には有利ですが、存在量の多い植物は、食害に対する物理的防御が強いという特徴を持っています。そのため、この防御を破る方策を身に着けたスペシャリストでなければ、豊富にある植物を餌として利用することはできません。雑木林のコナラやアベマキ・クヌギなどを餌にしているミドリシジミ類やウラナミアカシジミなどの蝶類が、まだ柔らかい新葉だけを利用しているのは、植物の防御を破るために身に着けた適応の姿なのです。

雑木林や草原の植物個体群を維持していくうえで、重要な働きをしているのは、トラマルハナバチなどハナバチの仲間です。マルハナバチ類は、里山の自然を形成している植物にとって、最も重要な「送粉昆虫」であり、植物から餌として蜜や花粉の供給を受けているという「送粉共生」の関係にありま

す。里山の雑木林や草原では、マルハナバチ類に送粉を依託している植物が多く、これらの植物は、他の植物の開花と完全に重なることのないように、花期が少しずつずれているといわれています。

◆日本の雑木林

日本の雑木林の様子を見ると、関東地方北部より北は「落葉広葉樹林」、西は「常緑広葉樹林」と、大きく二つに分けることができます。

落葉樹と広葉樹というのは、枝に葉の着いている時間によって分けています。

・新しく展開した葉が一年以内に枯れて、寒い冬の季節や雨の降らない乾期などは、葉を全部落として休眠状態で過ごす樹木を「落葉樹」と言います。

・新しく展開した葉が一年以上着いていたり、一枚の葉の寿命が短くても、次々に展開して、一年中緑色の葉が着いている樹木を「常緑樹」と言います。

広葉樹というのは、ブナの仲間・サクラの仲間・ツバキの仲間などのように幅の広い葉を着けている樹木を言います。それに対しマツの仲間・スギの仲間・ヒノキの仲間などの仲間などのように、細い葉を着けている樹木を針葉樹といいます。

今からおよそ一三〇〇〇年前ぐらいから、地球の気温が次第に上昇し、氷河が融けだして、海面が高くなって、繋がっていた大陸との間が海になって、日本は四方を海に囲まれた島になりました。その頃から、日本の雑木林を作っているような樹木が次第に広がり、今のような雑木林の分布になったのは、およそ六五〇〇年ぐらい前からだと言われています。

下刈りした後を観察中

東北地方から北海道にかけて分布している雑木林（落葉広葉樹林）は、「冷温帯落葉広葉樹林」といい、「ブナ帯」とも言います。ブナ帯を構成している落葉樹は、秋には一斉に葉を落としますが、枝に着いている芽は、「芽鱗（がりん）」という寒さを防ぐ衣を着けています。この芽鱗をまとった芽を「冬芽（とうが）」といいます。

関東地方北部から西に分布している常緑広葉樹林を構成しているのは、ブナ帯と同じ仲間の常緑樹やクスノキの仲間やツバキの仲間などの樹木です。これらの樹木は、光沢があり厚みのある葉を着けているので「照葉樹（しょうようじゅ）」といい、常緑広葉樹林を「照葉樹林」といいます。また、照葉樹林は「冷温帯常緑広葉樹林」と呼ぶこともあります。

ブナ帯の落葉高木林は、葉も薄く重なりも薄いので、林の中が明るく、高木の下にはいろいろな低木や下草が生育しています。これに対し、照葉樹林では、葉が厚く、重なりも厚いので、林の中は暗く、落葉広葉樹林のように低木や下草はあまりよく育ちません。

◆山形市周辺で見られる団栗

山形市周辺の里山の雑木林は、ブナ科のクリ・コナラ・ミズナラ・クヌギ・アベマキ・ブナなどを主に、サクラの仲間・カエデの仲間・ケヤキ・ホウなどの多彩な樹種で構成されています。これらのうち、ブナ科の木の実は、袴とか帽子・毬などと呼ばれる殻を持っていて、団栗と呼ばれます。そして、この袴・帽子・毬などと呼ばれているものは、殻斗と言い、茎が変わったもので、表面の鱗片や刺は葉が変わったものと言われています。つまり、ナラやクヌギの団栗の帽子も、クリの毬も同じものだということなのです。ただ、トチの実の皮は殻斗ではないので、トチは団栗の仲間ではありません。

山形市周辺で普通に見られる団栗は、コナラで、周辺の里山では最も多い樹種です。山形市周辺では、標高六〇〇ｍぐらいまでがコナラ、それより高くなると、次第にミズナラに変わっていきます。そして、標高九〇〇ｍぐらいからブナが交じってきて、標高一〇〇〇ｍぐらいになると、殆どブナに変わってきます。更に、山形市の東部・奥羽山脈の里山と西部・白鷹山地の里山の雑木林を較べてみると、クヌギとアベマキの生育のし方に違いが見られます。

白鷹山地の村木沢・大曽根地域の一部にはクヌギの林が見られますが、アベマキの林はありません。一方、東の奥羽山脈の山麓の里山では、南東から南西向きの斜面の所々にアベマキの林が見られますが、クヌギの林は一ケ所もありません。山形市の南隣の上山市では、東側の里山にアベマキの林もクヌギの林も見られます。一方、北隣の天童市では、アベマキの林は一ケ所もありませんが、クヌギの林は見られます。

旬の味
本物の味
ご賞味下さい。
寿司・活魚・
季節料理
辰寿し
山形市七日町四丁目1番30号
☎023(622)4597

羽前の里……
手打そば
羽前屋
山形市旅篭町一丁目18－11
☎(023) 622－5702
（月曜日定休）
車椅子が入れるトイレを完備しております。
高齢者の方でも安心して御来店下さいませ。

アベマキは、高畠町・上山市・山形市にかけて、奥羽山脈の山麓地に分布しています。しかし、これらの市町の西側の山地には、分布していません。このことについては、一つ言い伝えがあります。『昔、江戸時代頃、地域の人々が集まってお伊勢参りや成田山参りのように、関東や関西に出掛けていった。その帰り道に山形では見たこともないような大きな団栗のなる木があった。この団栗を持ち帰って、山形に植えたら、きっと役に立つ良い林ができるだろうと考えた。そして、拾って持ち帰った団栗を、道々、所々にまきながら帰った。だから、お参りの人たちが通った道筋にだけアベマキがあるのだ』というのである。

また、東沢の妙見院の裏山にあるお堂の周りに、アベマキの大木が林を作っています。これらの木は、第二次大戦終戦間近の頃、代用コルクを作るために樹皮を剥いだと言われる樹です。これらの樹は、根元から二～三mぐらいの高さの所で、上と下の色が違っています。

◆山村には築いてきた森の文化がある

おそらく、地球上に人類が誕生して以来、人々は、森林の恵みを受け、長く有効に利用する方法を工夫して来たのだろうと考えられます。それが、文化として花開き、遺蹟として残っているのが、青森県の三内丸山遺蹟などをはじめとする多くの縄文遺蹟と考えることができます。

森林を長く有効に利用し続ける知恵は、各地に言い伝えとして残っていますが、これらは「その地特有の森の文化」と言って良いものです。各地域の森の文化に共通していることは、その地域の生きもの個々の特性をとらえ、樹木を中心としたそれらの生きものと人間（ヒト）のつき合い方を基本にしているということです。

森林を中心にしたヒトも含めた生きもの同士の関係は、生態系の食物連鎖としてとらえることができ、ヒトは生態系的地位（エコロジカルニッチ）の最上部に位置しています。ある地域を一つの系（生態系）としてとらえたとき、その系がうまく保たれていることを食物連鎖の維持機構からみると、エコロジカルニッチの上部に位置している生きものは、下位のものを決して食べ尽くしてしまうことはしないことが分かります。例えば、森の文化として山村に残っている言い伝えに、「ゼンマイは採っても、男ゼンマイ（ゼンマイの胞子葉）は採るな」というのがあります。これなどは、人々の生活の中で保たれてきた、生活域周辺の自然を自ら守ろうとする知恵であると見ることができます。

日本の心、日本の風味
味わい深い〝そば〟
を心ゆくまで
そば処
三津屋
本　店／山形市上町一丁目一七五
〒〇二三六四四・四九七三
FAX六四五・二二七九
西田店／山形市西田一丁目二一一
〒〇二三六四三・二二八三
FAX六四三・三六六八
出羽路庵／山形市十日町一丁目一二六
〒〇二三六二一・〇二二八

私たちの会社は、環境にやさしい製品とリサイクル製品を提供していきます。
ネットワークシステムとオフィス環境を提案しコストダウンを提供します。

OBISAN
オビサン株式会社
〒990-8668 山形市流通センター1-9-2
TEL.023-633-3331(代)
FAX.023-633-3264
仙台支店・庄内支店・秋田支店

環境にやさしい液晶コミュニケーション
SHARP
シャープ 事務機山形販売株式会社
〒990-0071 山形市流通センター1-9-2
TEL.023-633-3251(代)
FAX.023-633-4000

おかげさまで50年
山形の焼肉屋
みなさまに愛された地元の味をぜひ一度お試し下さい。
焼肉 丸源 山形市七日町三丁目3-32 ☎632-3206
べこいち 山形市城西町五丁目34-32 ☎645-4727
丸喜多 山形市七日町三丁目3-32 ☎632-7505

彩サイン
ART EGG
有限会社 アートエッグ
■〒990-0018 山形県山形市下宝沢21
■PHONE／(023)629-2625 ■FAX 629-2835
■Eメールアドレス／art egg@h2.dion.ne.jp

時代が求める合理的な
自動車利用システム
レンタカー・カーリース
TOYOTA トヨタレンタリース山形
レンタカー・カーリースのご用命は県内下記営業所へ
本社 山形市鉄砲町二町目14-27 HPアドレス http://rent.toyota.co.jp/
本社総務部 ☎023-624-7100
山形店 ☎023-624-0100
山形駅前店 ☎023-625-0100
北山形駅前店 ☎023-647-0100
天童駅前店 ☎023-653-0100
寒河江店 ☎0237-86-0100
東根店 ☎0237-43-0100
新庄店 ☎0233-23-0100
酒田店 ☎0234-24-0100
鶴岡駅前店 ☎0235-28-0100
米沢店 ☎0238-26-0100
南陽店 ☎0238-50-1100
山形空港カウンター ☎0237-47-0100
庄内空港カウンター ☎0234-92-4100
営業時間
AM8:00～PM8:00

商業施設 企画・設計・施工
FORM
株式会社フォルム
TEL 023-622-3755
FAX 023-622-3757

千歳山マンション(賃貸)
千歳山ビル(賃貸)
千歳山ビル駐車場(賃貸)
■お申し込みは
千歳倉庫株式会社
山形市小姓町6－13
Tel. 023-633-1315
Fax. 023-633-1316

白鷹山山麓
作谷沢畑谷

まんだらの里へ

畑谷城と周辺の歴史散歩

鈴木行雄（作谷沢文化団体協議会会長）

「まんだらの里」畑谷地区を望む。後方は畑谷城趾のある館山（左）と尖り森（右）

◆山に囲まれた畑谷盆地

五郡（山形・白鷹・山辺・南陽・上山）の境界の山として知られている白鷹山は山頂に古い社殿があり、虚空蔵菩薩が祀られております。昔はどこの地方でも盛んに蚕を飼育していたので、その護り神として参拝者が多く訪れていました。

白鷹山に続いて、東黒森山・西黒森山と、山形市の西に二十五㎞離れた、四方八方、山に囲まれた畑谷盆地があります。

白鷹山を水源として小川が流れ、多くの湧水場所があり、自然豊かな地域としても知られています。東黒森山と西黒森山には有用な石が無数にあり、世界遺産の富岡製糸場が造られた頃に、国からの助成を受け蚕の種紙を保存するための「風穴」が造られました。

畑谷は鵜川より水を分水し、地区の東側を回るように水を引き、家々が建ち並び、その家々の石垣が見事に積み込まれて、素晴らしい景観を形成しています。

◆県民の森の湖沼群

東南部に「県民の森」が造られ、多くの湖沼が存在しています。代表的な湖沼に大沼があり、県民の森の中央広

県民の森の入口

湖面に東黒森山を逆さに映した大沼。山の裏が作谷沢畑谷

場で県民の森全体を管理しています。又、はんのき広場には天皇・皇后両陛下も訪れており、自然を満喫できる場

湧水の流れを利用して栽培しているワサビ田（西の原）

弁財天清水（畑谷）に立つ筆者・鈴木行雄さん

とも言えます。

二つ、三つ紹介しますと、「琵琶沼」があり、水の上を歩くことが出来る（浮いているコケ）。古代遺物という動植物が生きている湖沼として知られています。その東南にじゅんさい沼（曲沼）があり、昔から畑谷の名物として「じゅんさい汁」が特別に住民に親しまれていました。又、「板橋沼」があります。中央広場の西に当たり、昔は春になると水を干して、田んぼにしていました。現在は「わかさぎ」を放流し、冬期には釣り人が訪れています。もう一つ「荒沼」があります。山形市では「少年自然の家」と称して多くの施設を造り、楽しみと研修を盛り上げている。へらふな釣りの沼として知られており、多くの民話等も創られ伝えられております。

畑谷では湧水を利用しワサビ栽培をし、地元で採れた蕎麦を栽培から製粉まで行ない、蕎麦処で来客に提供して週三日間（金・土・日）営業しています。その上へ登ると、畑谷での代表となる湧水場「弁財天清水」が年中変わ

りなく出水しています。各地からの多くの方が湧水を汲みに訪れていますし、「茶の湯」の水としても多くの方々が愛用しています。

長松寺境内の一角にある城主・江口五兵衛光清の首を上杉勢が洗ったという「首洗い池」の跡

館山の畑谷城趾への入口。手前通り沿いに、城主江口五兵衛光清と家臣らの墓と長松寺や案内所「五兵衛宿」がある

◆出羽合戦の激戦地・畑谷城

畑谷地区は、今から四百十五年前の慶長五年（一六〇〇）に畑谷城が出羽合戦の激戦地だったことでよく知られています。畑谷城は畑谷盆地中心より北東の館山にあります。直江兼続が米沢の上杉領より最上領を攻めるに当たり、まず最西境界の畑谷城に約二万の兵で押し寄せて来ました。畑谷城の兵は三百、住民兵は約二百、計五百では勝てるものではありません。畑谷勢は皆殺しになりました。直江兼続はそれでも足りず家々を焼き払っています。

畑谷の三島神社のご神体を持ち去りましたが、米沢へは持って行かず、長井市の総宮神社に移して今日に至っています。昔の人の話では、ご神体を南方・米沢に向けても、次の日には東方・畑谷方面ばかり向くということです。畑谷城攻めには名前が知られている前田慶次郎が簗沢舘を攻め取り、そこから畑谷城に攻め上がっています。

畑谷城主江口五兵衛光清が移封の時に最初に持ってきた三島神社

畑谷地区は、その後は百年以上ふつうの住民は住むこともなく、寺と城を守る武将がいるのみの時期が過ごされたようです。そして、遠方京都より最上義光公が呼び寄せて、一般住民が住むようになりました。

◆案内所兼休憩所「五兵衛宿」

畑谷城へ来城・見学する方々が気軽に利用できる場として、七年前より個人で駐車場と休み場の建物を「五兵衛宿」として提供していますが、多くの方々より喜ばれています。

その前方に畑谷城主江口光清公の菩提寺でもある長松寺が建っています。寺前にはきれいに石積みが出来ていて、これも畑谷産の石を使い合わせてできており、石段も同様です。

その石垣の両上に狛犬が二匹控えておりますが、元日本銀行の玄関に置かれていたもので、大変歴史的にも意味深い縁起を持つものとして来場者の共

感を得ています。「五兵衛宿」はガイドの方々の詰め所にもなって利用されています。

畑谷は小さい地区でありますが、平坦な所が多く、きれいな水も道沿いに流れていて、燈籠流し等も行なわれています。戦国時代の名残としてそれなりに千人窪・念仏壇・首洗い池等の名が生き生きと付けられ、知られています。

案内所兼休憩所の「五兵衛宿」（右側の建物）

取材余話

●畑谷城主江口五兵衛光清とは？

名前は山形藩主最上義光の一字を賜わり、村木沢長岡楯主から畑谷に移ってきた。義光とともに連歌をたしなんだ。

●なぜ「まんだらの里」なのか？

白鷹山を起点に神々の宿る西黒森山、丸森山、神山（小鳥海山）、雷山、東黒森山を結ぶ菱形に囲まれた盆地で、命名は烏兎沼宏之著『まんだら世界の民話』から。

●「一つ目小僧の伝説」とは？

鉄を打つための神様とされ、古代から伝わる炭焼きの「たたら伝説」による。北作の諏訪神社に板絵があり、また慶松寺には守り神が本堂内にあるという。

●なぜか移住者が多い？

空き家が多くなり移住希望者が住み着いた。岩手、天童、新庄などから九世帯、二十八人がいる。

期待する生命線はただの皺

山田　不及

ラジオモンスター
地域情報
防災情報
FM 76.2 MHz
山形コミュニティ放送（株）
山形市本町2-4-14 津多屋ビル
Tel 023-634-0762　Fax 023-633-7622

人、社会、そして未来へ
エコロジー印刷のすすめ
野崎印刷紙業株式会社
仙台支店
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1丁目2番32号（柏木丁ビル）
TEL 022（271）1451　FAX 022（271）5284
URL　http://www.nozakiinsatu.co.jp

山形の城を歩く 17

中世城郭研究同人 保角里志

「楯岡城跡」の全景。戦国期「楯岡氏」の本城。独立丘陵全体に遺構が残る巨大な山城で楯岡氏の勢力が知れる。

戦争の城と平時の城の特徴をあわせもつ 楯岡氏の拠点山城

楯岡城跡

所在地　村山市大字楯岡字楯山
交　通　ＪＲ村山駅から徒歩二十分程度

楯岡城跡の調査

楯岡の街並み背後に、大きくどっしりとたつ楯山。楯岡の歴史を見守ってきた山である。この山全域に良く残る城跡の縄張り調査は、今から十年以上前の平成十五・十六年の初春と、晩秋から初冬の休日だった。初冬、雪のふるなか、こごえる寒さの調査もあった。

先月、七月二十日の海の日、村山市民会館での「山形学」地域連携講座で、調査の思い出の多い山城「楯岡城跡」を話す機会があった。今回は山形きっての名城の一つ、山城「楯岡城」を街角の読者にも紹介しよう。

独立丘陵全域にある山城遺構

楯山は東楯山、中楯山、西楯山からなる。楯岡の街からの高さは百二十mほどと登りやすい。

主曲輪（しゅくるわ）は西楯山山頂にあった。電光形の道を山にあがり、さらに小さく屈曲した道をのぼる。山裾からの道は山肌をけずり平坦とし広く、かつての大手道で城主と重臣たちは馬で登城したのだろう。

電光形の大手道／山を削り平坦にした城道で、馬足可能な屈曲する広い道である。

楯岡城跡の主曲輪／岩を削り平坦にした広大な主曲輪で、ここには城主の御殿が建っていたろう。

広大な主曲輪は縁辺を直線にけずり、西に土塁で方形窪みにした枡形状虎口が開く。これらは新しい城の特徴である。

そこを西にくだると、二の曲輪下に二十をこえる曲輪が隣正寺上まで階段状にかさなる。見事な階段状曲輪群は、戦国期、最上（現、村山地方）山城の最大の特徴とされる。左沢楯山城跡や天童城跡にもあり、発掘しても遺構はほとんど出ず遺物は少ない。防御施設だろうが、そこになにがあったのか良くわかっていない。

中楯山にも曲輪群がかさなる。最高所には箱堀の堀切で両側を守る中心曲輪があり、西側に大きな曲輪が二つつく。圧巻なのは東側山裾の多重帯曲輪群である。幅狭で細長い曲輪を階段状にかさね、西楯山山裾に連続する。敵を防ぐ遮断施設で、敵はここを突破し上方への進入はきわめて困難であったろう。この多重帯曲輪群は、山形最大の山城「天童城跡」の山裾各所にもある。天童城は天正十二年（一五八四）最上義光の攻撃で落城し、楯岡城の多重帯曲輪群も天童城と同じ頃に最上義光との戦争用につくられた施設とみられる。

そして、東楯山には明確な遺構はない。しかし、最高所の要衝であり、ここにも城の施設はあったろう。

山城「楯岡城」の特徴は、独立丘陵全体に占地する巨大な山城であること、くわえて、多重帯曲輪群にみる戦時色と、枡形状虎口の開く直線的な主曲輪にみる平時の城の特徴をあわせもつことである。それは、最上下郷の国人（豪族）衆とともに最上義光に激しく対抗し、その後、天正十二年には国人一揆を離脱し、最上義光の重臣として山城「楯岡城」を本拠とした、楯岡満茂の歴史を反映する。

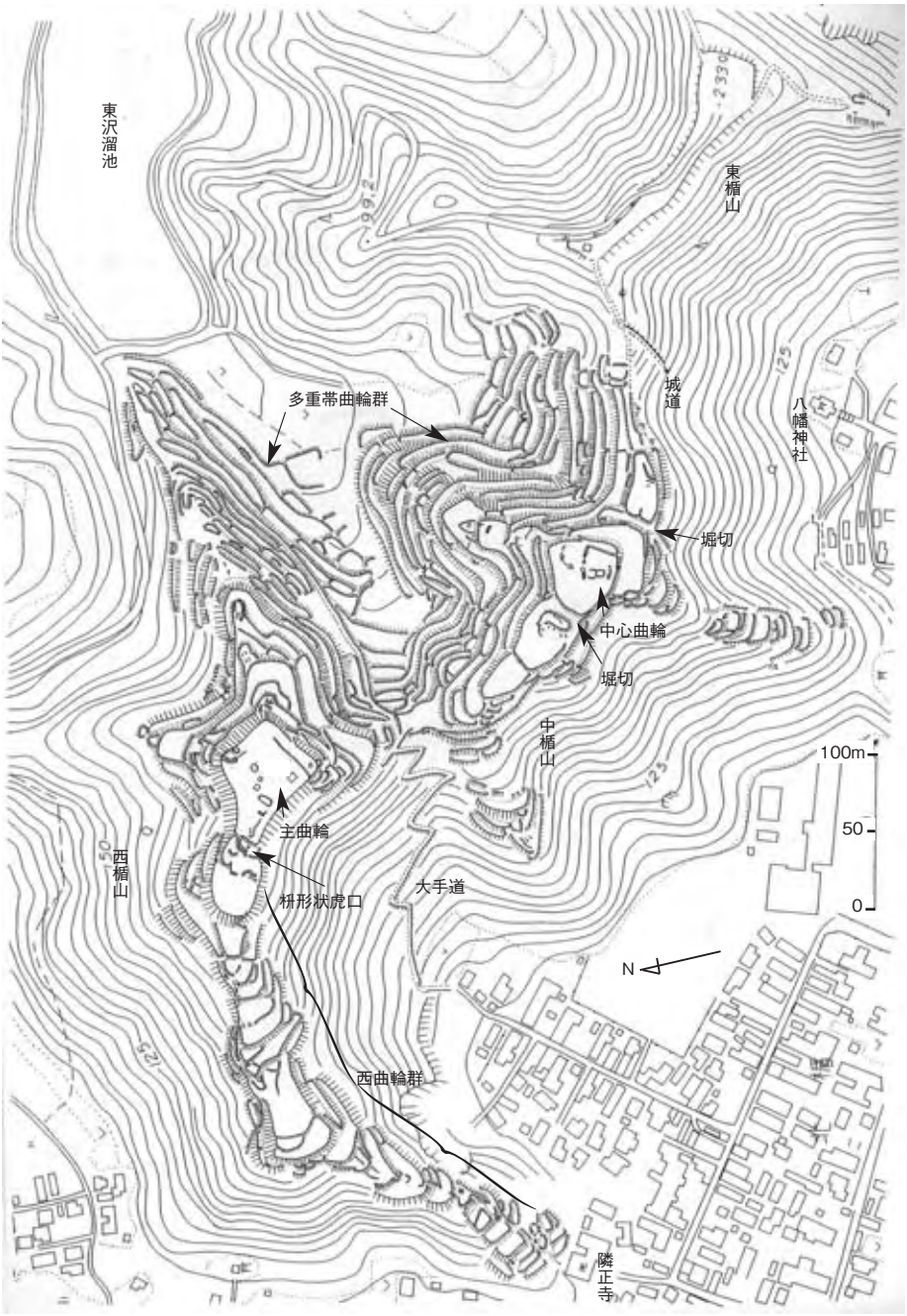
曽根家文書「天童殿あて楯岡満茂書状」

山城「楯岡城」の城主、楯岡氏は出羽きっての名族の出自であった。三管領家、斯波氏からでた最上氏の祖、兼頼のひ孫「満国」からはじまる。入部地「楯岡」を苗字とし、室町時代を生きぬき最後の当主は楯岡満茂であった。しかし、最上家改易により楯岡氏は他国に移され、史料はほとんど残っていない。

戦国期、楯岡満茂に関する唯一の史料は、昭和五九年（一九八四）、山形市曽根家の文書箱底から武田喜八郎氏が確認した書状写し一点である。曽根家書状は十九点。すべて新史料であった。重要なのは、曽根家史料群は、おそらく最上家の歴史編纂に収集された、歴史上とくに重要な文書とみられることである。すなわち、山形の戦国史を語るうえで、欠かせない史料群なのである。

その楯岡満茂書状をみよう。

「いま鮭延が滅亡にひんし、縁族延沢氏の要請から出陣した。攻撃で鮭延の地は焼かれ、とりわけ鳥越では籠城兵全員が殺害された。


東沢溜池
東楯山
城道
八幡神社
多重帯曲輪群
堀切
中心曲輪
堀切
中楯山
100m
50
0
主曲輪
西楯山
大手道
枡形状虎口
N
西曲輪群
隣正寺

山城「楯岡城跡」の概要図

その後、敵は新城の中楯まで焼いたと伝聞した。帰陣の時となり心残りで無念だ。また猿羽根氏も降参し、残るのは清水城と二つとなった。もう戦局はみえた。帰ったら御礼かたがたすべてをお話ししよう。二月四日、天童殿あて楯岡満茂」。

ここにある鳥越は、新庄市鳥越で延沢氏同族の小田島氏出自の鳥越氏がいた。おそらく、鳥越氏は同族の縁をたより延沢氏に支援要請したのだろう。新城は新庄のことで、後に義光重臣となる日野将監かその一族が城主であった。また、猿羽根氏は舟形町富田の猿羽根楯を本拠にした豪族であった。源義家の末裔という名族で古代からの最上川舟運の要衝をおさえ、その繁栄は「江戸をみるなら猿羽根をみろ」と豪語したほどという。最後の清水城は楯岡氏同族の清水氏が城主で、そこも最上川舟運の要衝であった。このとき、鮭延城は大宝寺氏支配下で、鮭延典膳は義氏に近習としてつかえていた（「鮭延越前守聞書」）。したがって、清水城と残る一城とは、秋保氏のいた古口楯の可能性が高い。

この史料には鮭延を席巻した攻撃者名はない。はたして誰だろうか。これまでの通説は最上義光だった。しかし、同じ曽根家文書は義光ではなく大宝寺義氏だったことを語る。大宝寺義氏家臣「七森氏信」が山辺を本拠とした山辺殿にあてた書状を次にみてみよう。

「（天童氏などとともに）一味の方が異議なく（最上義光と）戦うことが大事だ。当方ではなにがあろうと、敵対する寒河江筋の道をひらきあなた（山辺氏）を支援する」「なお、鮭延の戦況は、交通の要衝、名城「田の沢城」（戸沢村蔵岡）をようやく落とし、そのほか小城をいくつか攻略した。そのあと、新城、古口攻撃の手配を命じた。三月五日、山辺殿あて七森雅樂助氏信」。

以上紹介した二つの曽根家文書には年号はないが、「板垣河内覚書」（鶏肋編）には「庄内最上取りあいの時、まむろの地に籠り新城前にて天正九年の合戦に首壱つ取り申し候、ただし新城譜代の者に候」、「鮭延田の沢にて天正十年の合戦に首壱つ、ただし最上譜代の者に候」と、庄内と最上の戦いは天正九年（一五八一）、十年（一五八二）とある。庄内とは大宝寺氏、最上とは出陣した最上下郷の楯岡氏などではなかろうか。

大宝寺義氏は、土佐林氏討伐のあと、砂越氏や来次氏など庄内川北の国人衆を服属させ基盤を固め、由利と清水・新城へ激しい進攻を行ったのであった。

最上義光の苦境と義氏自刃

そのとき、最上義光はどうしていたのか。

天正九年には、天童氏と一味の東根氏と激しい戦いをくりひろげ、その状況を伊達氏の高森殿（留守政景）に伝えた（水沢市砂金文書）。先の曽根家文書によれば、天童氏との戦いには山辺氏が天童に一味し、背後には大宝寺義氏がみえる。くわえて戦国大名伊達氏とも対立し、苦境のなか、同じ斯波一族、大崎氏に支援を要請した。『古川市史』に初めて紹介された「大崎殿あて義光書状」（山形市鈴木文書）がそれを語る。

「鮭延は（大宝寺義氏の）攻撃をうけ、ひましに厳しい」、「当方は伊達氏の中山城と激しく対峙している」、「鮭延はすておけず自ら一騎でも出陣したい気持ちだ。あなたとの関係から鮭延支援を要請する。庭月氏は意のままに使ってくれ。八月七日、大崎殿あて義光」。

余命など気にせず今日も燃え尽きる　長岡　正昭

この局面を一挙にかえたのは、天正十一年春の大宝寺義氏への、近臣前森蔵人の突然の反乱だった。前森蔵人は大軍を率いた由利出陣の途中で引き返し、大浦城を包囲し激しい攻撃ののち義氏を自刃に追い込んだ。南出羽各地の戦いで大きな役割をはたしていた義氏の死は、最上義光の最上統一にみちをひらいた。義光は翌春には白鳥長久を殺害し、天童氏家老ともいう成生氏、そして下郷の国人延沢氏などを味方にし、秋には念願の天童氏討伐をはたしたのであった。そして、翌、天正十三年には大宝寺義氏にかつて蹂躙された鮭延を支配下におき、いよいよ庄内攻略戦へとむかった。

楯岡城のその後

天童氏など下郷の国人（豪族）衆とともに最上義光と激しく対抗した楯岡満茂は、延沢氏の誘いをうけて義光にしたがった。『延沢軍記』には、「下郷八楯衆は、（延沢氏は）山形に従うまえに一揆衆にいうべきだ。あとで言葉をかざっても聞けない」としたなかで、「ただ楯岡上総介ばかりが、延沢氏をたより山形にいき義光にお目見えした」とある。楯岡満茂の義光降参は、下郷国人衆多数派を離れての決断といえよう。

その後、楯岡満茂は義光の戦国大名への戦いに転戦し、湯沢攻略戦などに大功をあげ、文禄四年（一五九五）には湯沢城主となり、本拠「楯岡城」を離れた。その後も目覚ましい戦功により、最上家筆頭重臣として由利本城城主となり、元和八年の最上家改易をむかえた。

満茂の去ったあと、山城「楯岡城」は番城となり、中山玄蕃、山野辺義忠、鮭延典膳が城番を勤めたとされ、その間、山城の改造はなかったろう。

そして、元和四年（一六一八）には、義光の弟、甲斐守光直が入部し、山城の山麓に平城「楯岡城」と城下町を整備したとされる。それが、現在の楯岡の街の原型であった。わずか四年後の元和八年には、光直は改易により楯岡を去った。短期間で、光直はどこまで整備したのか。平城「楯岡城」解明の課題と考えられる。

緑の里山、山城歩きのすすめ

近年、城歩きの女性が全国でふえているという。いわゆる、「城女」である。「楯岡城」山形学講座後、山形市からの女性が「これから楯岡城に登りたい。登り口を教えてほしい」と私のもとにきた。城好き女性は、山形でも着実に増えているらしい。

山城「楯岡城」は登りやすい。そう高い山ではなく、いくつもの整備された登り道があり、案内板も各所にある。さらに、「楯山」のすばらしいことは、かつての山田義三郎さんや、近年の土谷義幸さんの植物、チョウ、野鳥、甲虫など、すぐれた研究のあることだ。山城歩きの楽しみのひとつは、動植物との出会いでもある。かくして、山城「楯岡城」歩きは歴史、動物、植物、さらには地学をも学べる総合地域学習の場として最適と思われる。そして、健康と体力づくり、森林浴、くわえて、心のリフレッシュ効果もある。

緑の里山、楯岡城歩きをしませんか。

特集企画◆里山

瀧山考

黒木あるじ（作家）

■名を知り、山を知る。

本当に田舎だな――およそ二十年前、故郷の青森県から進学のために引っ越してきた際、私が山形市に抱いた第一印象である。

「里山がテーマだというのに、いったいなにを言いだすのか」「二十年もぬけぬけと暮らしておいて、いまさら恨みごとか」

そんな読者諸兄の憤りが目に浮かぶ。だが、まずは落ち着いていただきたい。冒頭の暴言は、きちんと今号のテーマに則した内容へ転じていく予定である。

話を戻そう。

はじめにお断りしておくならば、先述の台詞はべつだんネガティブな感想ではない。たしかに隣の仙台市と比べれば駅前は閑散としていたし、人も店も街灯も格段にすくなかったのは事実である。だが、私は寂しさきわまる街にローカルな哀愁を感じていたわけではない。田舎と感じた原因は、私が籍を置いていた東北芸術工科大学――通称「芸工大」にあった。

卒業まで六年を過ごした学び舎は、山の麓に建っていたのである。

母校は、山形市中心部から車でおよそ十五分（とはいえ、当時は自家用車など持ち合わせてはいなかったから、自転車で四十分というほうが正確かもしれない）、駅を挟んで東側にそびえる山ふところに抱かれていた。私をはじめとする学生連中の多くは、教科書や画材を手に、ある者は歩き、ある者はペダルを漕いで、毎日のように山をめざして歩き続けた。そういえば、同級生の誰かがアパートへ帰る道のりを「下校」ではなく「下山」と発言したのを、たったいま思いだした。言い得て妙な表現である。

市街地をぬけ、やけに古びた石造りの鳥居を眺めながら坂道を進む。やがて国道十三号線を横断した直後から、景色はその様相を一変させる。いまでこそ小洒落た新興住宅が建ちならび、エコでオーガニックでハイソサエティな雰囲気さえ醸しだす芸工大周辺も、私が入学したころはいちめんの棚田であった。黄金色の稲穂が揺れる坂を汗みずくでのぼり、農機具小屋や土蔵を横目に、ときおり山から吹く風に一息つく。なんとも牧歌的な通学路だが、刺激に飢えた十代の私に

とっては、あまりに退屈な景色だった。

なんだって山の近くに校舎など建てたのか。そもそも、このあたりに住む人々は、いったいなにが楽しくてこんな山際を選んだのか……そんな不満と疑問を胸に、若人は野道を青息吐息で闊歩していたのである。

やがて、時が経ち齢を重ねるなかで、私はひょんなことから、学び舎の鎮座ましまします山が「瀧山」なる名称だと知った。名前というのは実に面白い。それまで漠然とした印象しか持たなかった校舎の裏山は、「瀧山」という固有名を得た途端、ひどく魅力的な存在に思えてきたのである（ドラゴンを想起させるその響きと、やたら画数の多い漢字が、夢見がちな十代男子の琴線に触れたのだと推察している）。結果、私は機会を見つけるごと、瀧山についての諸々を調べるようになったのであった。

■奇妙な山の、そのわけは

知れば知るほど、興味深い山だった。

山形市南東部に位置する瀧山は、その名が示すとおり数多の滝に恵まれた水の恵み豊かな山である。山形にかぎらず、滝は修験道とのかかわりが深い。修験道とは日本古来の山を対象とした信仰であり、その源流ともいうべき密教の要素を色濃く受け継いでいる（日本各地の滝に不動明王が祀られているのも、密教の名残りなのだそうだ）。そんな修験道の影響もあってか、瀧山は古より山岳信仰の聖地であったようだ。平安時代、慈覚大師円仁が開いたのちに信仰の場として発展、鎌倉時代には寺をはじめ、山へのぼる前に身を清める行屋などの「別当」がおよそ三百もあったと伝えられている。標高一三六二メートル、けっして大きくはない山にそれほどの数の別当が存在したという事実は、この地が人々の信仰を広く集めていたなによりの証明であろう。

しかしその後、瀧山は閉山を命じられてしまう。あまりにも力を有した現状に、鎌倉幕府が危機感を抱いたのである。こうして、およそ四百年にわたり東北の一大霊場として隆盛をほこった瀧山は、その歴史を閉じることとなった……。

さて、そんな歴史を紐解いていくなかで、私はちょっとした疑問を抱くようになる。

幕府による閉山から現在まで八百年が過ぎ、当時をしのぶ史跡や寺院は数えるほどしか残っていない。日本最古と謳われる石鳥居や西行法師が訪れたとされる寺院、女人禁制の名残といわれる姥神などは現存しているものの、現代に生きる我々の生活と直接かかわりを持つものは（一部の寺を除けば）皆無に等しい。

にもかかわらず、山形の人々は瀧山について語るとき、どこか懐かしげな表情を浮かべるのである。さながら家族の逸話を披露するかの如く、旧友との思い出に笑うかの如く、親しみあふれる口調で瀧山についての諸々を口にするのである。

先述のとおり、信仰の面影はとうに消え失せているのだ。山中に籠り修行をおこなう者がいるわけでも、いまなお崇め奉られているわけでもないのだ。だのに何故、それほど愛着を持つのか。どうせなら蔵王や出羽三山などの、より有名な

山々を自慢したほうが懸命ではないか。

青臭い学生の私にとって、彼らの態度は大いなる謎だった。

そんな疑問が氷解したのは、大学生活も終わりに近づいた、ある秋のことだった。

■里山という答え

その日、大学の講義を聴講していた私は（果たしてどのような分野の講義であったのかは、明瞭には憶えていない。当時は単位を取得することで頭がいっぱいだったのである）、教授が口にした言葉に、はっとした。

里山。

人の手が入っていない深山（みやま）と対をなす言葉で、人が自然に手を加え、共存をはかっている山をさす……そのような意味であったように記憶している。

自然と共存する生活。山とともに暮らす生き方。

ふと、思う。

もしや、瀧山に暮らした人々は、里山の「祖」なのではないか。

瀧山こそ、目の前の教授が連呼している「里山」という文化の源流なのではないか。

隆盛をきわめた栄華の時代と、宗教的な痕跡ばかりが注目される瀧山である。だが、それら「有形」の遺産ではなく、精神の奥底に根ざす「無形」の部分で、山形の人間は瀧山信仰を受け継いでいるのではないか。だからこそ、いまでも彼らは瀧山に思いを馳せ、慈しみ、愛着をおぼえているのではないのか。

そこで、はじめて気がついた。

私がかよったあの道は、瀧山への参詣ルートではないか。

元木の石鳥居を横目にのぼったあの坂は、国道を横断して足を進めた野道は、かつて瀧山を詣でる人々が辿ったそれと、おなじ道程ではないか。

途端、それまであんなに厭うていた大学までの道のりが、歴史の足跡を伝える、豊かでかけがえのないものに変わったのである。

自然を感じ、山と対峙しながら歩む。それは、山形を五感で知る行為にほかならない。人の世が移ろい、刻々と変化していったとしても、まさしく不動明王の如く揺るがぬ自然と、それを享受する私たちの生き方は変わらないのだ。それこそが、瀧山が我々に教えている事柄なのだ。

どうして、学び舎があの場所に建ったのか……私はその理由にひとり納得しながら、教授や学生たちの冷ややかな視線を浴びつつ、何度も頷いていた。

それから、さらに十五年あまりが過ぎた。瀧山を取り巻く環境は大きく様変わりし、私の記憶にある風景は、いまやあとかたもなく無くなってしまった。

けれども、私は憂いてなどいない。かつての田園風景が消え、木立がなくなったとしても、私の心には変わりようのないものが刻みこまれている。

信仰の彼方にあるもの、それこそが瀧山の持つ魅力なのではないか。

私は、そのように考えているのである。

野草園のフジバカマの蜜を吸うアサギマダラ。日本と東南アジアの長距離を移動するという。

西蔵王高原

山形市野草園を訪ねて

休憩ができるシンボルゾーンの中央広場にある自然学習センター

「自然と人間の共生」めざして

蔵王連峰の麓、山形市を一望できる標高約五百八十メートルの西蔵王高原は、日本海側と太平洋側のほぼ中間地点にあり、植物の系統が混在する自然豊かな里山である。市街地からも近く、また山形自動車道から西蔵王高原ラインへのアクセスも整備されており、県内外の自然を求める多くの行楽客に親しまれている。周辺には山形市の野草園を始め、龍山への登山道、西蔵王公園、展望広場、放牧場などがある。

平成元年（一九八九）、市制百周年の記念事業の一環として山形市は、自然とのふれあいを通して植物を育てることを啓発し花と緑のあふれるまちづくりをめざした。当時、すでに市内の西側には白鷹山系の大沼など湖沼地帯に自然学習施設「県民の森」と「少年自然の家」があった。そこで自然そのものの公園に対し、東側には植物を見較べながら学べる〝見本園のような学習の場〟を造ろうということになった。五年後の平成五年（一九九三）四月十八日、「自然と人間の共生」というキャッ

チフレーズを掲げ開園したのが山形市野草園である。

広さは二十六・一ヘクタールを誇り、ミズバショウ、クリンソウ、オミナエシなど四季折々の植物が群生している。その数は野草や樹木を合わせて約一千種で、毎年四月から十一月の間、見学することができる。冬の期間は、かんじきを履いて回る観察会やソリ滑りなどのイベントの日がある。

園内を見てまわる来客のために①から㉚の番号が表示されている。案内図で位置確認ができるが、せっかくの学習園なので無料で説明してくれるガイドウォーキングをすることをお勧めしたい。より詳しく、また楽しく自然観賞をすることができる。

左から山形市都市振興公社の吉田雄次さん、ボランティアガイドの杉原紀代子さん、和田千鶴子さん（自然学習センター前で）

観賞はガイドウォーキングで

野草園での植物案内のボランティアガイドは、野草園が主催している「植物案内ボランティア研修」の修了者が行なっている。

現在ガイドをしている杉原紀代子さんも和田千鶴子さんも、子供の時から大の植物好き。杉原さんは、

「小さい頃よく母と草むしりをしたことがあって、あの楽しさが良かったのかもしれません。定年退職して足腰の効くうちに何かしたいと思ってこのボランティアに応募しました。三年前で、一ヶ月に二回、五月から十回ほど研修がありました。花が好きなのに初めて知る植物がいっぱいあることには驚きましたが、草花が季節を運んでくることを感じられるのもほんとうに嬉しいことなんだなと思います」と、満面の笑顔で話してくれました。

一緒に取材に協力してくれた同じボランティアの和田さんも相づちを打ちながら、

「手つかずの自然はもちろん、こうして手入れをしながら守る自然も素晴らしい貴重な地球の財産だと思います。私は田舎で育ったので土の臭いのすることがしたいと思いこのボランティアに応募しました。四季の移り変わりを

園内のガイドウォーキングをするボランティアガイドの杉原紀代子さんと参加者たち（8 月 2 日）

肌で感じることのできる喜びを伝えていきたいと思っています。オオマツヨイグサなど夜に咲く花もあるなんて素敵ですよね」

と、ひときわ明るい声で話してくれました。

野草園が核になって西蔵王全体の自然を守っていく。自然のサイクルを感じながら花の名を覚えると、自分もその一部であることが嬉しくなる。

「ガイドが終わって参加者から『ありがとう』の声があると、やってみてよかったなとつくづく思います」

ボランティア二人が顔を見合わせて微笑んだ。

守ろう、里山の環境

取材に応えてくれた山形市野草園の吉田雄次さんは、

「学生時代から自然には興味がありました。しかしエビネやキキョウなど、昔は普通にあった植物が近年になって見られなくなってきています。それらは野草園にはありますが、里山の環境を守ることが絶滅危惧種を守ることにも通じます。ですから多くの人に植物観賞をしてもらい、自然保護の大切さを知ってもらいたい」

さて九月、野草園では「七草の庭」が見頃となる。秋の七草の一つオミナエシが咲き始め、フジバカマ、ヤマハギへと続く。山野草の育て方教室や写真コンテストなどもあって賑わう時期となる。

野草園のシンボル、春に咲くミズバショウ（上）。
下はミズバショウよりも先に早く咲くザゼンソウ。
ともにサトイモ科である。

写真協力・山形市野草園

メモ／山形市野草園

場所　山形市大字神尾 832−3
　　TEL 023(634)4120
ＨＰ　http://www.yasouen.jp
アクセス
　※ＪＲ山形駅から山形交通路線バス西蔵王・野草園行き終点下車（約 30 分）
　※ 山形自動車道山形蔵王 I.C より西蔵王高原ラインを蔵王温泉方面へ約 15 分
開　園　9 月〜11 月は 9：00〜16：30
休園日　毎週月曜日（月曜日が祝日・休日の場合はその翌平日）
　　冬期休園（12 月〜3 月）
入園料　大人 300 円、団体（20 人以上）240 円、高校生以下は無料
ガイドウォーキング
　　毎週日曜・祝日のみ
　　（9月は毎週土曜も実施）
　　一日４回…午前 10 時、11 時
　　午後 1 時、2 時
　　ガイド料…無料

西蔵王高原の魅力
再訪●まんさくの庭

お孫さんと一緒に三宅さんご夫妻
（本誌 2010 年夏号より）

西蔵王にオープンガーデンを開いて十五年余りが経つ。敷地は全体で八千平方メートルあり、開墾した花壇は約三千平方メートルある。その花園に囲まれた自宅のテラスからは、テレビ塔が建ち市街を一望できる丘が広がり、さらにその向こうには葉山、月山、朝日連峰と雄大な山波がのぞく。

海外勤務の多かったご主人がリタイヤしたのを機に憧れていた花や庭造りを始めようと移住を決めたのは、奥様の三宅由紀さんだった。五年前に伺ってからの変化を聞いた。

月山が一望できる高台に建つ三宅さん宅

夢の花園のように咲く花々

「北海道の風のガーデンも見てきましたが、このロケーションは他のオープンガーデンにはないと思います。庭造りも毎年少しずつ育ててきたものですから、始めた以上はやめられないのかもしれません。多年草でも三年に一度は植え替えしないと花は咲きませんもの。だからずっと続くんでしょうね。それになによりも優先順位はいつも庭造りが一番ですから」と、三宅さん。訪れる人とも教えたり教えられたり、地元の人や同じ移住者とも交流を持ち、毎日充実した日々を過ごしている。花園には歩道の手入れをしているご主人の姿があった。

メモ／**まんさくの庭**
開園は、水曜・土曜の午前 10 時～正午
日曜の午後 1 時～4 時
入園料 250 円。TEL 023(626)2066

夏　ナワシロイチゴ

春　フクジュソウ

特集企画◆里山

富神山のふもとで

画と文／杉崎文子（ボタニカル・アート作家）

富神山の北麓に仕事場を構えて十年になる。もとは花屋さんの土地で、珍しい草木がたくさんあったのだが、何年も放っておかれたのでジャングル状態になっていて測量も出来ない有様。ここに工房を建てたい、という夫に最初は反対していた私だが、春になり土地の境のフェンスにあけびの芽が萠え、裏山には芹、三つ葉、蕗の薹が生え、吾妻イチゲが咲き出したのを見て、私の胸の中にパッと子ども時代の山の体験が鮮やかに甦った。

紆余曲折があったが、今はこの工房を持てたことを心から感謝している。

立ち上げの時から館長をお願いしている佐藤誠二、淳子先生ご夫妻にはずいぶんお世話になった。土手に種から育てたクリスマスローズを植えてくださったり。東北山椒魚の存在を教えてくださったり、山の周りの植生を伺ったり、作品展のたびに搬入搬出を手伝ってくださったり。今も時々ハッパをかけて頂いている有難い方たちである。

私のフィールドは、まだ富神山の北側に限られているけれど、春、雪解けの水が歌いながらふつふつ湧き出し、あちこちに小さな流れをつくる頃、蕗の薹から始まり、吾妻イチゲ、菊咲イチゲ、カタクリ、猩々袴（しょうじょうばかま）、延齢草（えんれいそう）などが

秋　ミツバアケビ

冬　クロウメモドキ

頑固さもやんわりとなる老い二人

高橋　葉月

次々咲き出し、花に追われる一年が始まる。桜が咲き出し大地が若緑に染まり、富神山のてっぺんまで緑が盛り上がり、囀（さえずり）の季節。鶯や時鳥やいろいろな小鳥たちの声、四方の窓を開け放ち、その中で仕事が出来る幸せ。

夏、蜩（ひぐらし）から始まりミンミン、ジージーと蝉時雨。裏山にキツネノカミソリの群落が現れるのもこの時期。時々教室でモデルとして使わせていただいている。ちょっと歩けば苗代苺などもあり、長袖長靴、帽子手袋、首にはタオルという重装備での薮こぎ。思いがけない場所に図鑑でしか知らなかった鰐口草を見つけたりイタチササゲに出会ったり、ツリガネニンジンを見つけたり。

秋の初め、道路沿いにはミゾソバ、ツリフネソウ、ノコンギク、ゴマナなどがびっしり咲き出し花野が出現。やがてノブドウの宝石のような実が輝き、ツルウメモドキの実がはぜ、野生化したような柿の実も色づき、山全体が紅葉して秋を急ぐ。そして冬。雪が多いので、夫は駐車場の除雪に謀殺されるが、室内から見る景色は美しい。ことに黄昏は……。堅雪になれば、いつもは近づくことが出来ない薮の上をどんどん歩けるので、時々童心にかえって冒険に出かける。クロウメモドキの木を見つけたのもそういう時。新しい兎の糞も見つけると嬉しい。こんな小さなエリアでも、大鷹、ノスリ、カモシカ、タヌキ、兎、リスたちとは時々出会うし、渡りの季節には珍しい小鳥を見ることもある。工房の南の庇には何度もキツツキに穴をあけられ、補修費がバカにならないなどと様々なことがあるが、一年を通して何倍もの楽しみを味わわせて頂いている。

秋二昧

やまがた街歩き

九月／富神山は相変わらず尖っているけれど、稲穂は頭を垂れる。
実りの秋は一年の苦労が報われるとき。
［柏倉］

十月／「朝だ！早ぐ起ぎろ！」といいながら布団をめくるのは簡単。
でも、山形盆地の底に溜まった霧布団を、そう簡単にめくる事はできない。
［滝平］

十一月／澄んだ大気を葉っぱを落とした枝がくすぐっている。
冬に備える村は静かに雪を待ち、その先の春を夢に見る。
［横根］

■写真／ホームページ「山形市の街並み」より
■アドレス／http://yamu.deko8.jp/　撮影・文／八向　茂

十月

十一月

やまがた街角グラビア 女

スネアドラムと娘とわたし！

鈴木未樹さん

●ゴール裏でいつもスネアを叩かれていますが、いつ頃からですか？

未　樹　スネアを始めたのは子どもを産んでからなので六年前ぐらいです。父が趣味のジャズバンドでドラムを叩いていたので、実家に使わなくなったスネアがあって…。小さい頃からたまに遊びで叩いていました。いま応援で使っているのは、ブラジルのサンバ楽器「イシャ」っていう名の太鼓です。

●モンテを応援し始めたのもお父さんの影響と聞いていますが…。

未　樹　父は「長井ユナイテッド」というクラブで現在は代表をしていて、NEC山形の時代からたまにスタジアムに連れていってもらっていました。だからサッカーは私にとって一番身近なスポーツで、毎日のように父と兄弟がサッカーの話をしていたこともあるし、環境がそうだったんです。ただ、最初の頃はスタジアムでは応援せずに座ってじーっと見ていました。父と兄弟は今も座ってじっくり見る派です。私だけが大学生になってから、サポーター席に友達と行くようになりました。

●ズバリ！モンテの魅力って？

未　樹　もはや生活の一部なので、これ！と一言では言えませんが、試合中のゴール裏の熱を背中で感じられるのが幸せです。老若男女が、ヤマガタ！って叫んで、祈って、一つになることがモンテディオ以外で日常にないと思います。モンテのおかげで、年齢も職業も様々な、友人、仲間ができました。人と人を繋いでくれるのもモンテディオの魅力です。

●アウェーでは四国・九州までも遠出されているようですね。

未　樹　さすがにすべての試合には行けないので、できる限りになりますが行っています。娘も無理のない範囲で一緒に…。アウェーの試合はホームにはない魅力があります。一体感、アウェイ感、グルメ…。他のスタジアムやサポーターをみて学ぶことはたくさんあります。だいたいどこにでも仲間と一緒に車で遠征するので、長距離の運転が得意になりましたし、娘も日本地理に詳しくなりました（笑）。

●これまで応援していてとくに印象に残っているシーンなどありましたら…

未　樹　昨シーズン昇格を果たしたときは、今まで生きてきて一番泣きました（笑）。経営規模から考えても、山形は大型補強はできないのでＪ１で戦うのは厳しいと思われていますけど、そんな中でも選手とサポーターが一つになって戦って、勝った時は本当に感動します。今季はなかなか厳しいですけど、それでもブレずにやり続けるのがサポーターです。

●では最後に、まだスタジアムに足を運んだことがない人たちに一言…

未　樹　モンテディオは山形の財産であり、文化です。映画に行く、買い物に行く、そんな感覚でぜひスタジアムに来てほしいです。

　最初は応援するゾーンではなく座ってじっくり見るゾーンで、応援やイベントを見て、グルメを食べて楽しむのもいいと思います。応援したい、でもそのやり方がわからない、という方も、いきなりゴール裏に来ていただいて全く問題ありません。私でよければいつでもエスコートします！

●どうも、ありがとうございました。

取材／平成二十七年八月十六日　Ｊ１第七節
サガン鳥栖戦　ＮＤソフトスタジアム山形にて

長谷川コレクション

【第60回】

◎月江泛舟図　田近竹邨筆◎

長谷川　吉茂
（山形市文化振興事業団理事）

月江泛舟図　田近竹邨筆

田近竹邨（一八六四～一九二二）は明治・大正期に活躍した南画家である。豊後国直入郡竹田村（大分県竹田市）の生まれで本名を岩彦という。郷里で淵野佳僊（一八二五～八一）に学んだ後、同郷で京都で活躍していた田能村直入（一八一四～一九〇七）に入門し南画の研鑽を積み、文展では五度連続して褒状を受けるなど頭角を現した。京都における直入や富岡鉄斎（一八三六～一九二四）等の次の世代を担う南画の旗手としての地位を確立する。田能村竹田（一七七七～一八三五）から直入へと受け継がれた南画の伝統を継承し、明治初期に流行した粗放な作風の南画とは異なる端正で衒いのない作風を得意とした。明治中期以降、徐々に人々の愛好の度が低下しつつあった南画の将来を憂い、矢野橋村（一八九〇～一九六五）等が南画系作家の連携を模索した際には長老各として主導し「日本南画院」を結成したが、翌年の大正十一年三月十一日に五十九歳で生涯を終えた。

竹田、帆足杏雨（一八一〇～八四）、直入と続いた豊後南画の流れを継いだ

最後の画家であり、竹邨がもう少し長生きしてくれれば日本南画は衰微の時期を免れたのではないかとまで評される。

南画（文人画）家として日本では比類のないほど高く純粋な境地に到った人物が田能村竹田であると言われる。竹田の代表作の一つに天保元年（一八三〇）、五十四歳時に描いた『亦復一楽帖』があり重要文化財に指定されている。この画冊は、竹田が友人の医師松本酔古（生没年不詳）に贈るために描き、その跋文を頼山陽（一七八〇～一八三二）に依頼したところ、山陽が激賞して遂に奪い、自ら「亦復一楽なり」と詠ったことで知られる。竹田の一生の業績を集約した作品であると共に、化成期から天保にかけて展開された日本の文人画すべての、小さい乍らも華麗な記念碑と評された作品である。また、それを生み出した山陽と竹田の友情は我々を感動させるものがある。

竹邨は竹田の養嗣子直入の弟子であり竹田の孫弟子に当たる。また竹田・直入と同郷であることから竹田を心から尊敬し、終生、竹田の画世界を追い求めた。さらに竹邨自身、大変な美術品のコレクターであった。大正六年（一九一七）、五十四歳時に『亦復一楽帖』を入手し、それを喜び、新居を建設すると共に画室を「一楽荘」と名付けた。それに止まらず、克明に写して印影だけが異なる同じ大きさの画帖を作成し、その記念に原画の印刷本まで作った。

さらに大正六年首夏から翌七年孟夏にかけて、画帖に則った「亦復一楽帖描」といわれる五十三幅の作品を描いた。本作品はこの五十三幅のうちの一幅であるが、他には数幅しか現存が知られていないという。近代南画の記念的連作の一つとして、竹邨の代表作として極めて貴重な作品である。

『亦復一楽帖』の第二図を手本としたもので、讃は竹田と同じく「水天、空濶の所、舟を泛べて月と相ひ上下す。身世に所属有るを知らず。亦た復た一楽」とある。大意は「水も天も澄み渡る晩秋の夜、満月の明かりの下、湖に独り小舟を浮かべて横笛を吹く。上下の揺れに身をまかせたまま時が流れる。孤独ではあるが寂しくはない。それもまた楽しいことだ」となろう。自然の中に人間が溶け込み一体化するという、心落ちつく理想の世界が現出している。自然と人間が共生する世界は老荘の思想でもあり、古来多くの文人達が漢詩に謳い画にしてきた。『亦復一楽帖』の中でも最高のテーマを描いた作品である。竹邨は写生とは言えない心象風景を画にしており、近代南画という表現が相応しい幻想的な世界が生み出されている。

竹邨はかねがね「美術品や骨董品はそれに相応しい人物が所有してはじめて価値がある。所有していても奥深くしまい込むなど愚かである。愛蔵品、愛用品はすべて競売すべし」という信念を持っていた。

大正十二年四月、遺族はそれに基づき、京都美術倶楽部において「故田近竹邨先生遺愛品入札会」を催した。売上総額五十七万五千円と盛況な売立会となった。最高値は『亦復一楽帖』で東京の骨董商本山豊実が九万三千円で

落札した。この画帖はその後、数々の人の手を経て、現在は奈良東大寺南大門の近くにある寧楽（ねいらく）美術館に収蔵されているが、めったに目にする機会はない。

本作品は大正十四年（一九二五）二月に大阪美術倶楽部で行われた「当市宗像氏所蔵品入札会」において、祖父長谷川吉三郎（当時吉彌）が京都の土橋永昌堂を経由して九百十九円で落札したものである。

宗像氏は船場を代表する創業者の一人、大阪宗像商会社長の宗像半之助（生没年不詳）と考えられる。一連の五十三幅については大正七年に頒布会があり、住友家当主、平安神宮、大原孫四郎、服部七兵衛、土橋嘉兵衛などが購入者に名を連ねているので、宗像もその時に入手したのであろう。

平成二十四、二十五年に神戸新聞社の主催で「長谷川コレクション展」が実現したが、その事前調査で制作経緯が判明した名品である。

図版 Data File 60

月江泛舟図　田近竹邨筆
大正 6 年（1917）丁巳冬日作
丸山長谷川家蔵
絹本・著色　共箱
掛軸・一幅　170.5×52.3cm

千歳建設

東北 ── 過去・現在・未来へ。

本間利雄設計事務所＋地域環境計画研究室

山形市小白川町4-13-12
Tel.023-641-7711
http://www.thaa.co.jp/

TOSHIO HOMMA & ASSOCIATES

県内美術の新鋭たち
第九回◉〈樋渡理志（ひわたりさとし）〉

東北芸術文化学会会員　都間（とま）　仁（じん）

多くの作家にとって、いちど獲得し、みとめられた自分の表現を乗り越えてゆくのは至難の業である。公募団体やコンクールの傾向にのり、評価の序列に組み込まれるようになるほど、いつのまにか身動きがとれなくなるのである。けれども、絵画史にのこるのは、表現の更新と発見に忠実な画家たちであった…。

樋渡理志（鶴岡市出身）は山形大学美術科に学んでいた時代から、白鷺社展最高賞や県水彩画展〇氏賞を受賞。また、枯木を題材に、環境破壊の未来を憂える作品「警鐘」が、千葉県立美術館の第二回「浅井忠記念賞展」第四席（平成元年）、同じ年に国展賞候補に挙がるなど、一〇〇号以上の大画面における描写力の優秀さを存分に発揮していた。

「警鐘Ⅲ」1991年作
130Ｆ・油彩

ところが、このままでは真の制作意図を見失ってしまうと考えた彼は、一九九二年にルクセンブルグに渡り、教員をしながら、現地で西洋絵画芸術の多様な厚みにじっくりと接し、油絵技法を血肉化する努力をつづけてゆく。さらに、オーストリア国立ウィーンアカデミー修士課程で研鑽を積み、抽象的な作画も試みながら、絵画表現の幅を拡げていった。家族のことを思い、山形県にもどったのが二〇〇二年。帰国後は、人間の想像力を超えた自然への畏怖を感じさせる「警鐘」シリーズを、再びわれわれの目に焼き付かせている。

その樋渡にとって、二〇一五は忘れられない転機の年となるだろう。やわらかな筆遣いで、対象を繊細な色面の調子に還元し、画面全体として迫力を生み出す手法にますます磨きがかかってきた彼だが、これまでの廃屋や廃材をモチーフにしてきた一連の作風から脱し、人物画に挑み始めたからである。今年五月の国展（無鑑査）出品作「帽子を被る人々」は、さまざまな世代の人物の後ろ姿を巧みに配置し、現代社会の暗黙の束縛感や虚無感といったものを、静かに表している。

「帽子を被る人々」130Ｆ油彩

この十一月には、人物画を中心とした個展を、ふるさとの致道博物館で開くという。樋渡理志の新たな絵に、どんなストーリーと格闘のドラマが待ち受けているのか。たのしみは尽きない。

話のソラシド

第四十回――昔話、べこ（牛）の実力

服部公一

この話は七十年近く前のことである。もちろん今は時代が違うし諸事改善されていることは万々承知でこれを書くのだが――

ばけ猫、下駄、ウトロ、べこ、じつりょく、ユキちゃん、etc. あの頃の中学、高校の先生方のあだ名である。本名は忘れてもあだ名は覚えている。因みに私たちの学校は中学高校一貫校であった。

と申すのもはばかるのだが、終戦後の学校制度改変でそうなっただけのこと。しかしあの六年間の生活で多くの生涯の友人が出来たし、先生のあだ名にもより親しくなったのは違いない。学習勉学があの一貫教育でより深まったなどと僭越なことをいうつもりはないが、生徒たちはなぜか先生の学歴をより詳しく知るようになった。

そもそも私たちの学校は進学校だったから生徒は先生方の出身学歴により興味があったのだろう。東京大学、東北大、東外大、出身の先生方は何人もおられたし、早稲田など私立有名大学卒業の先生たちも多かった。しかし大学や当時の高等専門学校出身ではなく文部省中等学校教員検定試験なるものの合格者の先生方が何人かいた。これは師範学校を出て小学校訓導（今の教諭）の有資格者がその上の学校を卒業しなくても中等教員―いまの高校の先生になれる資格がとれる制度であった。

これは便利？ でお金のかからない制度なのだが、大変むつかしい資格検定試験だったようである。その専門科目に精通するのは当然としても、教育学などの勉強も科せられていた。当然その合格率はきわめて低いものだったのだろう。いわば教育の専門家選別試験だった。

その合格者のひとりであった芳賀秀次郎先生（長井高校校長、詩人）も「あれは私の人生でいちばんの難関だった」と述懐しておられた。

しかしあの頃我々高校生の当面最高の目標は国立大学入試合格であり、学校全体の雰囲気もまたそのようになっていたから、教育者としての資質内容とは関係なく東大出身の先生を頂点とするという心理的なヒエラルキーが生徒たちにできており、その底辺が検定試験合格の先生方となっていたように思えた。

今考えるとあれは浅はかな判断であった。大学のどこか

イラスト　山川和男

の学部の卒業生が申請して受領したデモシカ免許証とその学科を専門にこつこつと独習した検定試験合格者ではそもそもその科目についての食い込み方がことなるのは当然として、教育者になろうという意気込みや資質に差があるのは当然なのだから。

私は当時音楽に夢中になっていて、殆ど毎日始業前と放課後講堂においてあったグランドピアノにかじりつき練習していた。わが学校には第二部、つまり夜学があり夜の九時まで授業があった。ピアノが置いてある講堂は校舎と離れた別棟であり、ピアノの音が夜学の授業のさまたげにはならないし、私の家も講堂から畑を抜ければほんの五分と近かったのだから、とくに夜はピアノを独占的？に弾くことができた。

当時学校の冬の暖房は各教室の石炭ストーブ、講堂にはそれもなかったので、防寒マントを着て、厚い靴下にゴム長靴着用のいでたちだった。しかしピアノ演奏には指の感覚が大切で手袋をはめることができない、そこでやむなく素手だったのだが、厳寒には凍傷にやられて往生したものだった。

夜学は九時までだったが十時になると宿直の先生が見回りにやってきて、

「もう帰りなさい」と言いながらパチンと消灯するのだった。ところがたまに十時になっても消灯せずにしばらく客席に座って私の下手なモーツアルトのソナタなどを聞いて

くれる先生がいた。それが「べこ先生」またのあだ名が「じつりょく」であった。

彼はいつも旧陸軍の放出物資でカーキ色の軍服を着用、丸いめがねに丸顔の長身―つまり服装からして風采の上がらない国語の先生「べこ」だった。しかしその授業は懇切丁寧をきわめ、黒板いっぱいにこまかい解説をかいた。冗談や面白いエピソードなど一切挿入しない、まじめ一方の教授だった。ときどき生徒がひねくった怪しげな質問をすると、それを軽く受け流したりせずに、教壇上でじっと考え込み、やがて

「その質問はこの文章の微妙な内容に関連していますから、よく調べて次回に回答します」

などと真摯にうけとめるのであった。浅はかな生徒がそれを「じつりょく」がない、とあだ名を命名した所以なのだった。さらに学期試験にはながい記述の回答を求める問題という生徒にとってはくそまじめな人気のない先生であった。この先生こそ「文部省中等学校教員検定試験」の合格者で独学努力の人なのであった。

ある晩「べこ」先生が宿直で十時ころ講堂にやってきた。いつものように客席で私の練習をしばらくきいてくれたあと、つかつかとピアノのそばによって来られた。そして思い切ったように私に話しかけた、

「君はとてもよくピアノ練習しているね、君は音楽を独学独習しているのですか」と。

私は必ずしも独学しているわけではなかったのだったが、

「はい、まあそうです」と答えた。

「私は独学で検定試験をとったのですが、山形は田舎で何によらず良い先生がおられないからね。昔参考書をみてもよくわからないことがたくさんあって困ったもんです。私にはそれを教えてくれる先生がいなかったのです、そんな経験がたくさんありましたよ」

とご自分の自学自習の経験を思い出して私に同情をするかのような話をして一人でうなづいておられた。

「生のベートーベンを聞かせてくれてありがとう。もうお帰りなさい」と言いパチンと消灯した。そのときの曲はハイドンのソナタだったが、「べこ」先生の言葉がなぜかジーンと心にしみ込んだような気がしたのだった。

ピアノ演奏に関して私は当時師範学校の先生にときどき見てもらっていて、べつにそれに不満は感じなかったが少年時代特有の蒼(あお)い自信があったのを告白しなければならない。その後音楽大学には進学しなかったのだから作曲は独習したことになるかもしれない。

のちに上京し、その当時次々に来日したピアノの巨匠ギーゼキングやバイオリンのハイフェッツなどのコンサートを聴くに及んで、その演奏から受ける充実感や感動が山形で師範学校の先生から習った音楽やひとり合点して独習していた音楽とはるかに異質のもののような気がしはじめたのだった。

音楽を生業（なりわい）にするようになって何十年かたってみると、少年時代の山形あたりにはやはり本当の音楽教育が存在しなかった、やはりひとり合点でなく早くから本筋の芸術に接しなくてはならないのだ、と遅まきながらだんだん理解したのである。

独習、という言葉には何かヒロイックでセンチメンタルな印象がありそれを「べこ」先生と一時（いっとき）共有したかに思えたあの夜の講堂の会話はたしかに私の少年時代の温かい思い出になっている。

「べこ」先生は矢作喜一先生である。

追記：拙作の「北国の秋の物語」（芳賀秀次郎作、構成）の初演が、男声合唱団コールマイゼンの定期演奏会で、きたる十一月二十二日（日）午後二時開演、山形市民会館で行われます。これは斎藤茂吉先生の生涯を主題にした芳賀先生の遺作です。どうぞ御来場のほどおさそいします。

著書紹介『童謡はどこへ消えた』（服部公一 著／平凡社新書）

日本に童謡が生まれた時代的な意義、それを元にして日本歌曲が創られたこと、山田耕筰先生をはじめ歴代の作曲家たちが子どもの歌、つまり童謡を一生懸命に創作したこと、それらが近年時代の流れとともに潜在化している事情などを述べたのが本書。巻末に谷川俊太郎氏との対談を収録。　定価／八一〇円（税別）

何事もない幸せのにぎりめし　折原　乱雲

七日町イキイキ情報

七｜日｜町｜か｜わ｜ら｜版

街なか賑わいフェスティバル2015

日時
10月10日（土）
10:00〜17:00

場所
七日町大通り（歩行者天国）、
七日町一番街通り、シネマ通り、他

内容
◆七日町クラフト天国
◆ふらっと街かど音楽祭
◆オクトーバーフェスト
◆やまがた蔵フェスティバル
◆やまがたフラワーフェスティバル
◆街なかミニ動物園　etc…

開催当日9:00〜18:00まで交通規制（車両通行止め）が実施されます。

問い合わせ先　七日町商店街振興組合　☎023-631-6368
http://www.nanokamachi.com

物語を作る

橘　千枝（エッセイスト）

お盆の墓参りには特別な郷愁がある。山形近辺では旧盆の八月十三・十四日は、どの家もこぞって墓参りに行く日だ。そもそも遠いところから、混雑する中をわざわざ帰省するのは墓参りをするためであったはずである。毎年、つばさから降り立った帰省客が、テレビのインタビューに答えて「みんなでお墓参りに行ったり温泉に行ったりしてのんびりします」と、お定まりのコメントをしている。お盆には子々孫々が集って、ご先祖様の墓参りをするのが恒例の行事だった。ところが最近は、その様相が少し違って来ているらしい。

今、都会では「期限付き墓」なるものが増えているそうだ。使用期限を定めて、期間が満了すると霊園側で墓の撤去や永代供養墓へ合祀するという。少子化や家族形態の変化に伴い、子孫への継承ができず無縁仏になる墓が増えていることとも重なる。首都圏で増えているという、オートメーションで参拝口まで運ばれる自動搬送式の納骨堂などは、田舎の人間にしてみれば墓とは言えないように思えるのだが、遠く離れた墓地に時間をかけて行くよりは、頻繁に足を運べるという利点があるのだそうだ。

幼少の頃から、山形の旧盆の寺の賑わいを肌で感じている自分には信じがたい話であるが、今は代々にわたって墓を継承できると考えている人は少なくなっているという。都会に限らず、この辺りの寺でも子孫が当地に不在と思われる、荒れ果てた墓を見かけるようになった。昔は他所に出ても、先祖の供養を怠ってはならないという気持ちが自然にあったため、よほどの理由がなければ、盆だけであっても墓参りには来ていたものだ。

今は子どもに迷惑をかけたくないと考える人も多いと聞く。確かに墓の管理を、それだけのものと捉えれば面倒で迷惑なことかもしれない。自分の家の例をとっても、里山に沿って墓地が拡がっているため、少しでも間が空くと、すぐに落ち葉に埋もれてしまうし、晩春から初秋までは、やぶ蚊にも悩まされる。しかし墓の管理は「それだけのもの」ではない。

少子化や非婚化が進む現代社会では、墓を継承したくてもできない事情は、この先、誰にでも起こり得るだろう。経済的な事情もあるだろうし、価値観もさまざまになっている。そういう意味では、いろいろな選択肢があるのは良いことだし、必要性があればこそ墓の

様式や供養の形も変わって来ているのだろう。そもそも今の形式の墓の概念さえも、そう古いものではないらしい。

しかし毎年お盆に親族が集まって、わいわいと墓参りに行き、いつの間にか幼い子が成長してそれぞれの役割が決まって来たり、親戚の墓へも回ったり、そういう何気ない記憶こそが、生きる上での根っこになるように思う。自然に、自分が何者なのかという、暗黙の存在肯定ができあがるように感じられる。

たくさんの兄弟姉妹がいて、跡取り以外は他所でがんばっていて、盆正月のたびに皆が顔をそろえるという高度経済成長期の構図は、もはや成り立たないのも現実だ。跡を守る者に対する尊敬の念が自然にあり、都会で暮らす者の出世話に花が咲くことも盆正月の恒例行事だった。概して都会に暮らす者の方がいい暮らしをしていたりしたもので、田舎の人間にとっても、それが自慢話だったものである。故郷に錦を飾るなどという言葉もある時代だった。

民俗学では、人の魂は死後五十年間、近くの里山や端山（葉山）に留まって子孫を見守り続け、その後は天に昇って行くのだという。その五十年という歳月は、ちょうど生前のその人を知る者がいなくなる時期と重なる。父母や祖父母の役割を終えて「ご先祖様」に昇華する期間なのであろう。

戒名が消えかけた苔むした墓も、その下に人生があると思えば愛おしい。時の流れと共に、いつか自分の名前もそこに刻まれて、しかしまた何事もなかったように時が流れると思えばこそ、人は精一杯生きて心安らかに死んでいけるように思うのである。

さだまさしの「主人公」という歌が好きだが、人生とは自分の物語を作ることだという。どんなにありきたりであっても自分が主人公の物語を。たとえ、物語を作ることさえできずに立ちすくんだり、生きることに苦しみ悩む時でも、自分の中に自分の存在を肯定できる根っこがあれば、何とか物語を紡ぎ続けられるのではないだろうか。

今や、毎年帰省できることさえ比較的恵まれている層かもしれない。生きるだけで精一杯の時代だ。そんな単純な問題ではないとしても、新幹線の中でガソリンをかぶって命を絶つ前に、故郷の墓参りをするという選択肢はなかったのかと思う。たとえ不本意な物語しか作れなかったとしても、故郷に錦を飾れなくても、よく帰って来たなと迎えてくれる人はいなかったのだろうか。疲れ切ってしまった心を癒せる根っこは、もはやなかったのだろうか。魂の還るべき場所を喪失するということは、しみじみと恐ろしい。

お盆の帰省のニュースを見るたびに、都会で暮らす人々が、たとえ無自覚であったとしても、魂の拠りどころを見つけてくれればいいと思うのである。自分の物語を作り続けられるように。

ふた粒の涙

のん気な殿様こと
小山清春

山形市西方に、「山形ピラミッド」とでも言いたいような緑ゆたかな「富神山」がそびえている。古代エジプトのピラミッドの入口は北側にあるというが、こちらの北側には裾野を巻くように「狐越街道（古道）」がある。山形市の上町から沼木、門伝、荻ノ窪、畑谷の大沼を経て狐越峠をこえ荒砥へ至る。全長距離は八里（約三十二キロメートル）。明治以降、養蚕が盛んになると、山形盆地から大量の桑の葉や養蚕農家の繭が長井盆地の製糸工場へ運ばれ、「長井紬」となった。ラクダのキャラバン隊ではないが、牛の牽く荷車は、さながら狐越シルクロードといったところだろうか。

この街道に昭和二十五年、ようやく荒砥行きのバスが通るようになった。さらに三十年代になると戦前戦後の木炭バスは姿を消し、ぐんと性能のいいディーゼルエンジンのボンネットバスが走るようになった。多くの繭もトラックで運ばれるようになった。町の中心街「門伝四辻」から歩いて登ること二十分、いよいよ杉林や雑木林を開墾した富神山の斜面に桑畑がひろがる。

養蚕は農家の貴重な収入源で「御蚕さま」と呼ばれ崇められている。春蚕、夏蚕、秋蚕、それに晩秋蚕と年に四回掃立てする（生産する）。この季節は夏蚕の桑摘みで、猫の手も借りたい家族総出の忙しさ、帰省中のマコトにも、おまえも手伝え、と桑摘みの声がかかった。

朝早くに里山の桑畑へ出かける。葉の活きがいい午前中が勝負だ。人差し指に琴爪のような刃金の「桑摘み爪」をはめて摘む。

桑畑から眼下を見おろす風景に山形の市街地が広がる。さらに眉を上げると蔵王連峰が一望千里。足元からなだらかに広がるな棚田は、田植えからもうふた月が経った。ひと株二、三本の苗が分蘖（茎の枝分れ）して、すでに三十茎にもなっている。稲は七月十日ごろまで分蘖したのが、ちゃんとした米になるんだ。ひとつ粒の米を作るには一年もかかるんだから無駄にできない、と父親がよく言っていた。

もう稲の株間やあぜ道は見えなくなり一面にひろがる青田を眺めていると、ああ、ここはふるさとだなあ、としみじみ思う。東京にはこれがない。はるか須川から吹きあげる緑いっぱいのそよ風は心地よく、帰省子にとっては何よりの滋養になる。

タバコだあ！、と父親の声がかかると休憩。マコトは久しぶりの桑ゴ（桑イチゴ）を食い気いっぱい口中へ。未熟な桑の実は赤いが、真っ黒に熟すと

甘すっぱくて旨い。夢中になって食いすすんでいくうちに隣の畑へ。

と、桑の葉陰でばったりと鉢合わせた娘。隣の娘も桑ゴ食いに夢中になっていたのだ。視線が合うと、お互いの口元を指さし、「うわぁ、真っ黒！」と言い合った。桑ゴをもぎ取った指、唇や歯並びまでが汁の色素で、お歯黒のように濃(こ)むらさきになり、いくら洗ってもなかなかおちない。

初めて顔をあわせた二人、並んで桑の木陰で涼んだ。はるか下界を見おろす。ボンネットバスが須川の大橋を渡って、なだらかな登り坂にさしかかると、砂ぼこりを舞いあげながら、あえぎあえぎ上ってくるのが眺められた。

「梅雨があがったんだろうか？」

「うん、ほらあの蔵王山のうえの入道雲、すばらしくでっかいねぇ、まもなく明けるよね」

「東京はあがったど」

「東京か、行ってみたいわ」

「オレ、明日、東京さ帰るんだ」

「へぇ、東京なの？」

「うん」

「東京さ来たときゃ、案内するからよ。住所は…と」

「ここさ、書いてけろ」

サチコは絆はんてんの腕をまくり、手さす（手っ甲）の紐をスルスルとほどき、サッと白い腕をつき出した。サチコの手をにぎると二の腕までまくり、桑の葉につぶした桑ゴの汁を指で、『台東区入谷二―三　むつみ荘　林真』と書いた。

桑畑の向こうの大杉の木陰で休んでいた母親から、サチコぉ、はじまるぞ！と声がかかった。

「はーい！」

昭和三十年、マコトは十五の春、中学を出るとすぐに集団就職の夜行列車で上京。秋田県からの学生服やセーラー服もいっしょになり、満員の列車から上野駅へ降り立った。

はじめて目にした東京の街並みは、真っ青な空に、高層ビルが立ち並ぶ。朝の駅頭には視界からはみ出るほどの通勤の人たちであふれていた。車が縦横に走り、けたたましくクラクションが鳴る都会の喧騒に目がくらむほど。これまで見たこともない別世界があった。

山形を出たときはまだ寒く、父親がなけなしの金で就職の祝いにと買ってくれた春のコートが脱げるほどの陽気であった。

職業安定所の人の掲げるノボリ旗にみちびかれ、それぞれの職場へ配属になった。マコトは、浅草に近い入谷のクリーニング店へ住み込みで働くことになった。独りになると、希望と不安の胸の奥からさみしさが込み上げてきて涙が出た。真っ白なユニホームを着て働く姿を、かあちゃんに見てもらいたいと思った。

元来の正直者で根が優しいマコトは、主人夫婦から真心のこもった心づかいをうけた。口数が少なく、なかなか山形弁の訛りがつよく抜けないが、仕事にも都会の生活にも次第に順応してきた。

あの日、上野駅に降り立ってから、すでに三年半が過ぎていた。桑摘みをしたふるさとからもどると、入谷朝顔まつりが終わっていた。半纏、手っ甲から半股引、足袋、それに男女のユカ

タまでの膨大な洗い物が持ち込まれている。

毎年七月六日からの三日間、「恐れ入谷の鬼子母神」が祀られている真源寺の境内から言問通りに、朝顔売りの店と露店が二百軒近くも立ち並ぶ、下町の夏の風物詩である。朝顔まつりは江戸末期にはじまり、大正時代はじめに廃れたが、戦後になって昭和二十三年にふたたび復活した。

マコトは夜もろくろく寝ずの仕事がつづくが苦にしない。夜行列車にゆられて着いた人生の始まり、「帰りたいと思うと、負け」を心にきざみ、仕事一途にここまできたからだ。

主人夫婦は、そんな真面目な仕事ぶりに、ゆくゆくはふたり姉妹の長女に婿入りさせ、店を継いでもらいたい目論見があった。その長女というのはちゃらちゃらした奴で、のっぺりとした顔立ちは一度会ったぐらいじゃ印象がうすい。高校に入ったころから生意気になり、親たちの前では清まし顔でいるが、マコトだけに向き合うと、中学出を小馬鹿にして山形弁につっかかるように絡んでくる。

マコトには心通わす女の子がいた。郷愁にかられ上野公園に出かけたときに知り合った。真源寺の門前通りにあるラーメン屋で働く秋田湯沢からの集団就職で出てきた子である。いつもマコトのラーメン丼には、こっそりとチャーシューとシナ竹が多めにのっている。

祭り衣装の仕事が一段落してホッとした休みのある日、突然、手紙が届いた。

『拝啓、お元気ですか。あの桑畑からながめた稲ホはすっかり出そろい、もう秋です。腕に書いてもらったクワゴの住所は消えましたが、別に書きとめておきました。夏サンが終わり、まゆといっしょに長井の製糸工場へ出かせぎに行きます。次の秋サンまでの間一ヵ月ほどです。この住み込みは足かけ二年目になります。家だと手紙はだめだけど、寮なので手紙も電話も大丈夫ですから、待っています。　かしこ

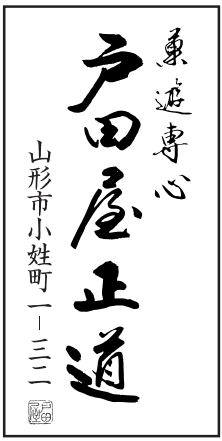
真さまへ　　サチコ　』

嬉しい。手紙は上野の寛永寺の境内から、東北方面への蒸気機関車が吐くけむりの匂いを嗅ぎながら読んだ、何回も読んだ。あの桑畑の木陰のことは忘れてはいなかったが、毎日のいそがしさに思いは遠くなっていたのだった。青い鉛筆の文字は達筆だ。寮の電話番号が書き添えてある。手紙も電話への呼び出しもいいという。便箋の行間からサチコの面影がとどいた。絣はんてんに赤いたすきをしめ、ふくよかな丸い顔、暑さに頬がうっすらと紅色をおびて、黒目がちの澄んだ瞳、健康的な容姿があざやかに甦ってきた。逢いたいなあ、と思うが東京と山形ではあまりにも遠い。

次の休日、上野公園にようやくできた赤電話のボックスに、十円玉をたっぷり持ち込んだ。長距離だから長い会話はできないが、懐かしい声が聴けた。さらに手紙も書いた。手紙だと一通十円切手ですんだ。

サチコは秋蚕がはじまると、住み込み先から門伝の家へもどった。自宅にいるサチコとはおいそれと連絡がとれない。それでも、愛は知恵を呼ぶ、互い

に工夫をこらし連絡をかさねていった。
二人がふたたび逢えたのはマコトが年末の休暇で帰省したときで、そのとき初めて抱きしめ愛を確かめ合った。サチコのかすかにひらいたうけ口のほのかな香りに惹き込まれ、目をとじた頬を両手でかかえると、突き上げる欲望におされて深く唇をからませていった。澄んだ瞳はうっすらとにじんで、涙の粒がひとすじ頬をながれた。
「どうかした?」
かすかに首をふり、恥らうように、
「…うれしいの」、ぽつりと一言。いっそう愛しくなって、もう離さないと強く抱きしめた。
結婚となると、仲人を立ててお見合いするのが常道だから、二人でじっくりと話し合った。ふるさとの人たちの期待におされて東京へ出たからには、何が何でも独り立ちする信念は固い。そうかと言ってクリーニング店の娘は、主人がいくらその気になっても可能性はまったくない。ラーメン屋の女の子の方は、秋田の田舎から出てきてよるべのない身でもあり、突きはなすのはなんとも可哀想だが、マコトは悩む。妻になる人はできれば同郷の人がいいし、サチコに東京へ出てきてもらえば、三畳一間からのスタートも勇気が出るというもの。
サチコにしてみれば三姉妹の長女だから、次男のマコトさんなら山形へ戻ってもらって養子に入ってもらえるだろうと思っている。お互いの認識が雁字搦めにからまった。二人は遠く離れているが故に、相手を想う気持ちが深まっていくばかり。マコトはサチコの直向きな愛、ひとすじの涙に負けた。年が明けて春蚕が掃ける頃、お互いの親へ話した。双方の親御たちは突然のことでびっくりした。
それからサチコのお宅へマコトの両親が訪れたのは夏蚕の掃き立てがおわり、梅雨が明けたさわやかな午前であった。この頃は都会の匂いが田舎の方へもじわっと寄る波があって、農家の長男であっても勤めに出る人が多くなってきて、クリーニングした装いのサラリーマンがふえてきた。
狐越街道のバス通り沿いに、マコトのクリーニング店が開店した。昭和三十四年四月十日、皇太子殿下と美智子さまのご成婚にあやかって、山形市内の豊列神社にマコト、サチコを祝う親戚、友人知人一同が参列し、地酒に酔いしれた。
翌日、サチコが初めてという東京へ旅行に出た。入谷のクリーニング店の主人夫婦にあいさつに行ったが、ずうっと気がかりでいたラーメン屋へは立ち寄らなかった。
あの日、ふるさとへ帰る決意をして別れ話をしたとき、あの子は涙目でマコトをじっと見つめたまま、ポロッと大粒の涙をながした。そして「さようなら」とひと言をのこし去って行ったのだった。



百年老舗

創業明治15年
(1882)

孫から孫へ、活版時代からの

(株)小松印刷所

山形市北町二―七―一一　電話〇二三（六八四）二七三五

【上】二代目小松久兵衛（昭和48年3月に山形印刷製本工業組合より前理事長として感謝状を受領した時）
【右上】30年前に手差しの活版印刷で作った蛇腹式の讃佛歌集と御詠歌集
【右下】二代目が印刷した『高湯温泉誌』を三代目久兵衛が平成22年に印刷した復刻版

現在、会社は北町にあるが、創業は旧小橋町の錦町である。小松家の初代久兵衛は、明治維新の頃、仙台から武士の身分を捨て笹谷峠を槍を担いで越え、独り小橋町にやって来て住み着いたという。初めは胡桃売りをし生計を立てていた。

印刷業は二代目久兵衛からで、明治十五年（一八八二）のことであった。七日町の八文字屋がしていた山形活版社で修業した。しかし印刷業だけでは生計が立たず、文房具の販売も手掛けていた。

やがて大正、昭和と時代が流れ、戦争の時代が長く続いた。第二次大戦の戦時中は印刷と文具を兼業することが禁止され、印刷の方を専業にすることにした。その二代目について、孫に当たる現当主三代目久兵衛は、次のようにふり返った。

「祖父とは五、六年一緒に働く時期がありました。無口なヒトでしたが、技術的なことよりも客を大切にしろ、嫌われないようにしろと仕事の心構えを教えられました。女子商業のＰＴＡ会長をしたりもしていました。当時はまだ小橋町の自宅が工場でしたので、祖母（マス）も夫と精を出して働いていました。山辺町の大寺から人力車に乗

創業から昭和45年まで印刷工場のあった旧小橋町（現・錦町）の社長宅（左側）

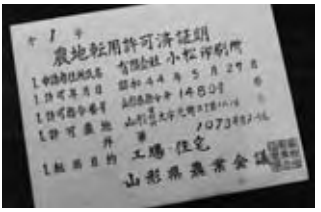
って嫁に来たと聞いています。二人には八名の子がありましたが、長男久作は戦争に取られ、フィリピンで戦死しました。その公報が届きますと、祖父（二代目久兵衛）は急に病魔に冒されて急死しました。そんな中、祖母は女手一つで苦しい時代を守り抜き、やがて孫に当たる私が後を継ぐことになりました」

4色オフセット印刷機に並んで今も活躍している野手製作所の活版印刷機（昭和四十三年製造・菊4切版用）

それは昭和二十七年のことであった。二代目の現当主の久昭が三代目久兵衛として家業を継いだのである。当時会社を仕切っていた祖母からは、「無理だと思っても反発せずにお客様の言葉に従え」、「いったんこの人が良いと思ったら最後まで付き合え」、「働いているなら、五つ流して働け」と、祖父同様に教えられた。母政代は工場に入り生産の方を手伝い、最近まで妻朝子も経理を手伝っていた。現在は、次女美穂子が代わって経理の方をやっている。そんなことで、山商の友人からは「お前の会社は女で持っているようなものだ」と揶揄されたりもした。

数字印刷のための活版用の活字

会社の前に立つ３代目社長



現在地移転の農地転用済許可証明

「正直、女手は欠かせなかったですね。小橋時代は役所や銀行の仕事もありましたが、高度経済成長の時代とともに山形での競争が激しくなり、新庄までバイクで営業に出たこともあります。山刀伐峠を越えて行ったりもしました。あの頃は何でもやらなければならなかったので文選工の仕事も捨てきれなかったし、石版の印刷も始めたりしました。会社を興しながら仕事も作るという感じでしたね」

そして昭和三十二年に有限会社、四十五年には北町に移転し翌年株式会社になった。現在、長女の嫡男四代目剛史氏が企画次長として働いている。再び孫から孫への継承となる。

神社散歩

医王稲荷神社（山形市薬師町二丁目）

薬王院柏山寺から分祀した施薬の神様

◆薬王院の大医王仏から「医王」に

神社は真新しく拡幅された薬師堂前の通りから公園西側を北へ入った小路沿いにある。クヌギの大木の下に赤い鳥居があり、その奥に小振りな切妻式の屋根の社殿が建っている。

「医王」の名称は、神社がその昔、東隣の薬師堂内にあったことから付いた。由来書きには、創建が不明であることをことわった上で、隣接する柏山寺が所蔵する寛政三年（一七九一）の「出羽国村山郡金光明護国山国分寺薬王院柏山寺境内絵図」（墨絵）が「薬師堂参道正面から二十メートル程の左側に『稲荷社』と社殿図がはっきりと記されている」と伝え、「薬王院」と「医王」の同様な名称に深い繋がりがあるとしている。当時は神仏混淆の時代であったので薬師如来は「大医王仏」とも呼ばれ、病を癒す施薬の神様として人々の信仰をあつめていた。

明治の時代に入ると神仏は分離され

明治 44 年の市北大火で焼失し再建した時の記念碑（右）と大正 14 年に拝殿を落成した記念碑（左）

ることとなり、施薬の神は独立して、京都伏見稲荷からの勧請を得て「医王稲荷」として祀られるようになった。

神社となって、施薬や除病、厄難消除の神様の他に、家内安全、無病息災、身体健固などのご利益が祀られるようになった。

◆二つの記念碑が物語る再建への願い

ふだんはほとんど人気のない所ではあるが、薬師堂の祭りの植木市の折には、神社に立ち寄り柏手を打つ人の姿が見られる。詳しい神社由来書など文書は、明治四十四年（一九一一）五月八日の市北大火の類焼でほとんどを焼失した。そのかわり境内には、大正四年に篤志家の浄財で御堂が再建されたことや、同十四年にも参拝者の不便を遺憾として拝殿が建造されたことなどを刻んだ二つの記念碑がある。

神社入口には山形市の保存樹にもなっているクヌギの大木が、赤い三本の鳥居のある短い参道を覆い被せるようにたっぷりと枝の葉を茂らせている。祭礼は現在、九月第三日曜日に柏山寺住職の祈祷により執り行われている。

医王稲荷神社本殿

【上】国分寺薬師堂
【下】柏山寺

【右】柏山寺の墓地にあるオットセイの墓
【上】神社（左）の脇にある小路

◆オットセイの墓

さて、せっかくなので柏山寺にも立ち寄ってみた。ここには市北大火のあった日に、植木市の薬師祭りの見世物として「有田サーカス」に出演中火災の犠牲になった「ブロニー」君という名のオットセイの墓がある。サーカス団の人達が供養のために建立した墓で、「妙技如神」という戒名ももらってある。ブロニー君の人気の程は大したものだったに違いない。百年も前からそこに眠っていることを思うと、祭りの賑わいのざわめきが聞こえてきそうだ。

散歩は周辺にこだわると、思いがけない発見をするものだ。

神社散歩

松原山神明神社（山形市松原坂ノ上）

二軒茶屋で賑わった見晴らしの神社

山形市街地の眺望が素晴らしい丘に建っている。手前よりも左奥の鳥居が旧参道

◆みはらしの丘に建つ

南山形の旧羽州街道筋に「通判なき者は通すべからず」とされた松原番所があった。そこから南へ行くと、今でも長い黒い塀が残る大庄屋の渡辺久右衛門家があり、さらに黒沢温泉の入口の反対側の小路に入って奥羽線の小さな踏み切りと不動川の橋を渡ると、目の前に黒沢峠が迫ってくる。その登山口のような所が神明神社の参道の入口であった。道は途中で二手に分かれ、右へ行くと歌人斎藤茂吉が母に連れられ通った病目（やんめ）不動尊があり、左へ登ると七曲がりの坂上峠となり、その頂きに松原の神明神社がある。辺りは現在「みはらしの丘」と呼ばれ、起伏の豊かな緑の公園となっている。

羽州街道の松原番所跡（南山形）

不動沢橋から黒沢峠に入るここからが神社参道の入口

神明神社は、天照皇大神を祭神とし、松原の産土の神として古くから信仰されてきた。津金沢の本沢法印の文書によれば、元は「亥子方」（西北）にあったのを山形城主秋本摂津守永朝の時代、安永二年（一七七三）に今の坂ノ上に遷座したとある。しかしそれだけで、正確な場所や時期、理由などは明

らかでない。（資料・高瀬助次郎『南山形の文化財』八十頁より）

その後、明治二十年（一八八七）には松原大火で社殿を焼失し再建。平成十三年（二〇〇一）山形ニュータウン開発に伴い境内の全面的な模様替えが行なわれた。従来の鳥居口は残され新たな石鳥居も建てられた。例祭は九月第二土曜日。

二軒茶屋の三八茶屋。左に神社がある。（昭和初期、『南山形物語』表紙より複写）

茶屋の跡。絵は江戸後期の皆川義川。

◆二軒茶屋と、今も残る深井戸

神社前の通りは旧羽州街道で、神社側に八兵衛茶屋、向かいの西側には三八茶屋（おかめ茶屋）の「二軒茶屋」があった。深井戸の跡があり、後者の横に江戸後期の皆川義川筆の「峠の登り口の絵図」の看板が立っている。茶屋はいずれも大名や幕府の巡検使も休んだので大きな構えの建物であった。深井戸は旅人の喉を潤し、茶屋では綿入れ餅が名物であった。しかし、明治十三年（一八八〇）県令三島通庸により早坂新道が拓かれ、賑わいも急に寂れてしまったという。近年の開発前までは西側の三八茶屋の建物は残っていて、辺りは山形市の「うるおい百景」の一つでもあった。（資料・渡辺信三『南山形郷土史探訪』）

【右】神社南、羽州街道の四ツ谷にある上山藩領境界石標
【上】街道沿いの左の鳥居から登った旧社殿跡

羽州街道をここから南に向かうと、かつては花立峠と呼ばれた高台となり、地蔵堂があった。そこはちょうど山形藩と上山藩の領地の境界であったが、現在は県道四五八号線が通る四ツ谷地区に上山藩領境界石標として、上山藩の儒学者五十嵐柔兵衛（于拙）の揮毫による「是より南は上山領」という石碑が立っている。

山形県立博物館 教育資料館

山形県立博物館教育資料館　山形市緑町二丁目２番８号　Tel.023（642）4397

戦後七十年のいまに見る映像「戦ふ少国民」

今年は戦後七十年の節目の年。二十歳で終戦を迎えられた方も九十歳ということになる。戦地に赴き実際に戦場での戦いを体験された方々の大半は黄泉の国に旅立たれ、私たちはもう肉声で戦争を語ってもらう機会をほぼ失いつつあるといってよいかも知れない。

今回紹介する県立博物館分館の「教育資料館」に、その戦争にかかわる現在ではめったに見ることの出来ない戦時中に製作された全国的にみても貴重なフィルムが残されている。それは昭和十九年に電通映画社が製作した「戦ふ少国民」という軍人援護精神の高揚を目的としたドキュメンタリー映像で、戦後占領軍の接収を逃れるため天井裏に隠していたため残ったものだという。それを戦後「戦時下の教育」としてVTRに再編集し、当館の展示スペースの一角で公開し、開館時間内であれば誰でもが自由にみることができるようになっている。オリジナルの「戦ふ少

国民」は「春・夏・秋・冬」の四部構成になっており、その中の「冬季、農山村編」として製作されたフィルムが山形県大曽根村国民学校で撮影されたそのフィルムなのである。

戦争について考える一助として戦後七十年のこの機会に是非ご覧になられてはいかがだろうか。

ＶＴＲ「戦時下の教育」(「戦ふ少国民」)

建築物としての見応え

妙な書き出しになってしまったが、国指定重要文化財のみならず経済産業省の近代化産業遺産にも認定されている山形県立博物館の分館「教育資料館」は、ルネサンス様式を基調とした木造桟瓦葺き二階建ての建物で、それ自体の美しさは目を見張るものがある。旧い建造物マニアにアピールすればそれだけでも全国から見学に訪れる人は少なくないのではないかと思われるほど魅力的な存在といってよい。

この建物は旧師範学校の二代目の建物として明治三十四年現在地に建てられたもので、写真でも味わえるように

廊下・天井（部材の張り方を敢えて真逆にしている。ただし、この写真では錯視現象だろうか、なぜかそうみえない。）

外装はもとより内装も実にすばらしい。たとえば天井と床の板張り方向が真逆になっており、構造的に筋交いの役割を担っているという珍しい設計でもあるという。注目してみては如何だろう。

ところが残念ながらそんな魅力いっぱいの県立博物館の分館である「教育資料館」を訪れたことのある人はそんなに多くないと聞く。その理由のひとつとして、現在の県立山形北高等学校の北側に位置し、大通りからの視界に入って来ないという立地環境にもよると考えられる。

「教育資料館」の展示

さて、本題に入り「教育資料館」の展示構成をみておきたい。展示スペースは二階の教室毎に配置され「藩校と寺子屋」「学校のはじまり」「明治から大正へ」「昭和初期の教育」「戦時下の教育」「新しい教育」「教員養成のあゆみ」の分類で構成されている。それぞれの部屋（教室）には各種資料やジオラマ、それに解説文などが配置され、山形県における教育全般の流れが分かり易く紹介されている。

たとえば「藩校と寺子屋」の展示の一部として使われている寺子屋板戸にはなんと文久年間（江戸時代末期）に書かれた落書きなども散見され、歴史をより身近な物として引寄せてくれる素材となっている。みる人はそういう何気ない面白さに惹かれるものである。

またいわゆる学校制度がスタートした頃（明治初期）の様々な教科書、大正時代の教科書、昭和激動期、とりわけ戦時体制下の教育環境、一転して戦後の新しい民主教育の歩みなどについて、現物展示や資料もまた豊富で貴重なものである。

中でも目を引くのは、戦時中教室や講堂に掲げられた教育勅語の掛図である。そこには図解入りで十二の徳目が

寺子屋のジオラマ

明治・大正期の教科書

記されている。

父母ニ孝ニ（親に孝養を尽くしましょう）
兄弟ニ友ニ（兄弟・姉妹は仲良くしましょう）
夫婦相和シ（夫婦は互いに分を守り仲睦まじくしましょう）
…略…
一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壌無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ
（国に危機があったなら国のため力を尽くし、それにより永遠の皇国を支えましょう）

さて、墨塗りというと昭和初期に軍部の圧力によって当時の政府に不都合な内容の部分を墨塗りされたり、図書そのものが発禁処分になったりした歴史は広く知られているが、ここに展示されている「墨塗り教科書」はＧＨＱによる墨塗りである。音符と五線譜だけが残り、歌詞がすべて墨塗りされている。おそらく軍国教育の中で謳われた戦意高揚を煽る言葉が印刷されていたのだろう。

この時代を生きていた多感な少年たちの心境を考えるとなかなか気持ちの整理がつかなかっただろうことは容易に想像出来る。昨日までの正義は悪に、悪は正義にと、百八十度の大転換を強いられた激動の時代だったのだから…。

教育勅語図解

戦後の墨塗り教科書

プラスαの魅力
藤沢周平資料

「教育資料館」の前身である旧師範学校、そして山形大学へというぐあいに学制の変遷の中で幾多の人材が本校舎で学んでいるが、そのなかの一人に作家藤沢周平氏がいる。氏の師範学校時代の「砕氷船」、さらに中学校教員時代の「プレリュウド」といったそれぞれの同人誌、そして自筆原稿なども展示されており、藤沢周平ファンは見逃せない隠れた名所となっている。

藤沢周平関連の展示(師範学校時代の同人誌)

＊

このように山形県立博物館の分館「教育資料館」はその名の通り、本県の教育のあゆみを展示物を介して時系列で学ぶことの出来る施設。教育の重要性が叫ばれている現在、一度は訪れてみて、周遊時間にしてほぼ一時間、教育について沈思黙考してみるのもいいのではあるまいか。

山形県立博物館教育資料館
〒九九〇―〇〇四一　山形市緑町二―二―八
TEL／〇二三（六四二一）四三九七
FAX／〇二三（六四二一）四四〇三
http://www.yamagata-museum.jp/
無料入館日／五月五日、十一月三日

開館時間／午前九時～午後四時三十分
（入館は午後四時まで）
休館日／毎週月曜日と国民の祝日
（ただし四月二十九日、五月三日～五日、十一月三日は開館）
年末年始休館（十二月二十八日～一月四日）

豊かさと錯覚してた物の数

只木すもも

羽田設計事務所
HADA ARCHITECTS

〒990-2414
山形県山形市寿町11-15
T.023-622-2818
http://hada-sekkei.jp
hada@hada-sekkei.jp

HADA ARCHITECTS TOKYO
〒180-0005
東京都武蔵野市御殿山1-7-12-101
T.0422-24-7611

杉の子保育園
第7回キッズデザイン賞受賞

賃貸住宅ユニテフレックス
山形県内入居率100%
（2015年2月10日現在）

※パースはイメージです。

土地活用を賃貸住宅経営で！
「相続税を減らす」
不動産活用を
考えてみませんか？

◎詳しくはこちら　クリエイト礼文　相続　検索

センチュリー21
イメージキャラクター
ケイン・コスギ

ぜひお気軽にお問い合わせください！

センチュリー21 クリエイト礼文 0120-31-6774
〒990-2413 山形市南原町2丁目7-39　TEL.023-631-5379／FAX.023-631-5416　E-mail:info@create-lemon.jp

出逢い咲く日、
でわざくら吟醸酒

●美術館のある酒蔵 ——
出羽桜
※出羽桜は20歳になってから…

(財)出羽桜美術館本館　天童市一日町1-4-1
電話(023)654-5050

李朝工芸・秋展
●期間／9月5日～11月23日

斎藤真一「さすらい」展
●期間／9月17日～3月27日

(財)出羽桜美術館分館　心の美術館
●時間／午前10時～午後5時（入館は4時半まで）
●休館／月曜日（月曜日が休日の場合は翌日）

出羽桜酒造株式会社
天童市一日町　電話(023)653-5121(代)
出羽桜酒造・美術館ホームページアドレス
http://www.dewazakura.co.jp/

旅篭町今昔

旅籠町大火と旅籠屋

市村幸夫
村山民俗学会

材木と紙で作られた日本の家屋は火事の歴史と背中合わせであった。もちろん山形市とて例外ではない。明治二十七年の市南の大火、同じく四十四年の市北の大火は平成の世にいたるも話題になる大火であった。

市南、市北の大火に匹敵する惨事があったのは文政二(一八一九)年。火元の店の名を冠した、いわゆる和右衛門火事である。当時の記録によれば、「文政二己卯年閏四月二十七日の夜四ツ半時頃、七日町通より出火、南風烈敷翌二十八日朝四ツ時頃迄焼失、町家七百三十八竈、寺院九ヶ寺、土蔵焼落候分百二十七、其外裏屋借家の分千二百共千六百共申し不分明候」とあり、横町、元三日町、七日町、旅籠町、六日町、鍛冶町、新鍛冶町、四日町、歩町、小橋町、円応寺町、が炎に包まれている。この火事で念仏寺万日堂が焼けなかったことから、町の人たちの万日堂への信仰が一段と深まったと云われている。

旅籠町の大火は明治十六年にもあり、新聞号外が出されていることを小形利彦さんから教えていただいた。山形新聞社の八月十五日の号外は、旅籠町の旅館を全て焼き尽くした火災の詳細な記事である。当時の山形新聞社は郡役所の南、現山形銀行本店の向かい側であった。新聞の創刊は明治九年九月一日で、社主は村山市土生田の遠藤慎七郎であるが、号外は遠藤時助となっている。

いま旅籠町に旅籠屋は一軒も存在しない。しかし、この号外から江戸時代から変わることなく続いた旅籠屋の存在が浮かびあがってきた。

旅籠町大通りの南側には東の方から、絹屋、越後屋、柴田屋、本陣後藤小平次、小林屋があった。後藤小平次は旅籠屋ではなく小間物屋と記されている。北側を見ると、柏屋、佐久間屋、後藤屋、大沼屋、高橋屋、足利屋である。真ん中あたりに藤屋があったが、明治十六年の大火当時は湯殿山神社の参道に当てられ藤屋の名はない。焼失総戸数五十四、うち旅籠町の焼失戸数は三十九の大火災であった。

旅籠屋が旅籠町に集中していたことは違いがないが、他の町にも点在していた。嘉永六(一八五三)年頃の旅籠屋組合の記録から、他国の特定商人専用の旅籠屋である十日町野村屋、七日町足利屋、六日町米沢屋、旅籠町西山屋などがあったことが分かってきている。

明治十六年の火災から二十八年後の明治四十四年には再び

かつて藤屋・後藤屋があった旅籠町

旅籠町を奈落の底に落とすこととなった。この市北の大火罹災者の名簿を見るに、旅籠屋としては越後屋、柴田屋、後藤屋の三軒だけしか探せなかった。明治十六年の火災は二十八年もの歳月を経て大きく替わり、旅館業から多数の転業者を出したということであろうか。

度重なる大火に遭いながら、県庁、市役所、裁判所、銀行などの進出により旅籠町は変貌を遂げていくことになる。明治四十四年大火罹災記録からは、下宿屋四軒のほか旅人宿として雁島公園前の栗山旅館など十一軒があり、参勤交代通過の際の大きな宿屋とは一味違った旅籠屋が誕生していたことが確認できた。人力車曳、代書屋、活版屋など、明治の新しい風は様々な職を生み出していた。

旅籠町に旅籠屋を探し出せない今、町名改正という枠組の中で旅籠町という町名が消えなかったことを良しとすべきであろうか。

ほろずっぱい梅の味
山形名物
乃梅
文政四年創業
乃し梅本舗 佐藤屋
山形市十日町3-10-36
TEL. 023-622-3108

イザベラバード ウォッチング

最終回　野々村邦徳

明治十一年七月十五日。

湯殿山神社境内にあった県の迎賓館？〝茶屋〟（料亭・野々村の出張店か）で昼食を終えたイザベラバードは、外で待っていた大勢の野次馬に囲まれながら、最後の訪問先・公立病院（済生館）へ移動した。

県令・三島通庸の命で建設中の済生館はこの年九月に完成するが、バードの訪れた頃は最終仕上げの段階だった。工事費に当時の金で県庁舎の倍近い四万三千円が投じられていたのを見ても、医療行政にかける通庸の強い情熱が感じられる。

バードは真新しい済生館を眺めながら

『…丸屋根の尖塔が付いた大きな二階建ての病院は完成間近で、百五十人の患者を収容し、医学校になる予定である。設備は非常によく整えられ、換気もよい』（金坂清則 訳）

と、彼女の評価も悪くない。

病棟のベッド数や、医師、ローレッツを招聘して開設する医学校計画などが紹介されているから、この日は通庸の指示を受けた院長・長谷川元良あたりが待機し、バードに詳しく説明したのだろう。

ところで九日後の七月二十四日、バードは隣県秋田の久保田（現・秋田市）でも、病院（秋田病院）や機織工場などを公式訪問している。秋田では訪問先への事前連絡が徹底していなかったとみえ、病院では当初断られるが手続きをやり直し、翌日再訪している。視察後、バードに英国式料理（仕出しか？）やコ

バードも訪れた国指定重要文化財の済生館病院
（現・山形市郷土館）

ーヒーが提供されたりして、本県同様、秋田でもかなりの厚遇ぶりが窺える。

それにしても、山形霞城公園に今も立派に残る済生館・三層楼は我々の大きな財産であり、誇りだと思う。

ところで、「日本奥地紀行」でバードが紹介している山形市街の記述は他地域に比べて短いが、スケジュールの量が一日分としては極端に〝盛り沢山〟で〝ハード〟ではないか。

バードはこの日早朝六時頃に上山の宿を出発。須川の「常磐橋」工事現場を皮切りに「商店街」を覗き、「警察・裁判所」で内地旅行免状を提示して通過申請し、県立「製糸場」を昼頃まで見たうえ〝茶屋〟での食事に一時間費やした。ラストの「済生館」でも一時間は滞在したと思われるから、既に九時間近く経過し、時刻は午後二時を過ぎていた計算になる。すべての公式訪問を終えたバードは、この日の宿泊地・楯岡へ駄馬で向かうのだが現地到着は何時になるだろう。

バードは移動手段の一つ・駄馬のスピードを、日光・湯元で試みに計測している。

記録によると、〝…途中休みをとらずに八時間かけて十五マイル（約六里・二十四キロ）走った〟とあり、バードが内国通運会社継立所からチャーターした駄馬の時速は〝約三キロ〟だった計算になる。西部劇映画でカウボーイが乗るサラブレットと比較しては少々可哀想だが、馬子が手綱を引く短脚・草鞋履き（蹄鉄は打ってない）の駄馬ではこの程度か。

女性の馬子もいたそうで、人間の歩く速度より駄馬が早い訳はない。

念の為、日光市役所に電話で確認してみると、日光・湯元間は中禅寺湖の手前で急峻な坂道が続き、途中には〝馬返し〟の小集落もあり、駄馬が〝休みをとらずに〟一気に登れる筈がない、との返事だ。バードが実際にテストした区間は、平坦な別の街道ではなかったか？

都市部の人力車や、郵便を運ぶプロの脚夫の時速は少し早い約六キロだった、というが、バードは山形県内でも駄馬の速度を捉えている。例えば、楯岡・新庄間の直行スタイルで『二十三マイル（三十七キロ）以上に及んだ今日の旅では…』と移動距離が書いてあり、昼食と休憩時間を加えると時速は三キロ程度か。

また新庄・金山間（約十五キロ）でも『ここ（金山）に着いたのはまだ早く真昼だった…』と、午前中に到着したことになっているから、時速はほぼ

朋友の笑顔脳裏によく描き

井熊　玲月

同じだった、と想像している。

僕が現役だった頃、〝奥の細道〟TVロケでお世話になった江戸文化に詳しい山本陽史先生（山形大学基盤教育院教授）に、当時の実態を考証して頂くと

「その頃の旅人は、やや前方の路上を俯き加減に見つめ、脇目もふらずに黙々と歩いて、一時間で一里行けた。夜明けか早朝には宿を出発し（昼に目的地へ着く旅人もいたが）、日没前の明るいうちに、必ず次の宿へ到着していた。夜道は暗くて物騒だから誰も歩かない。駄馬のスピードは人と同じ程度だが、途中の継立所で馬を交代させる必要があり、時間はさらにかかった、と思う…」

と話してくれた。

完訳本の旅程表によると、出発地・上山から楯岡に至る羽州街道の距離は十里十二町（約四十一キロ）。山形からでも六里二十九町（約二十七キロ）ある。県都での公式訪問ナシの〝直行スタイル〟の移動なら大よそ一日分の行程であり、日没までに現地へ到着するのは何とか可能だ。しかし午後二時過ぎの山形発となれば話は別。人間並みの遅いスピードの駄馬利用では深夜到着になる。

文明開化の時代を迎え治安は多少よくなったとはいえ、街灯も無い真っ暗で危険な夜道を、大量の現ナマ（旅費）を携えた異国女性が安全に通行出来る訳がない。バードのチェックアウトが日本人より多少遅かったとしても、山本教授が言われたように、当時の旅人は夕刻までには目的地へ到着するのがお決まりのパターンだった、と思う。

（僕の知る限り）数多くのバード関連書籍のうち、山形宿泊を明確に記述したものは一冊もなかったようだが、彼女は一日限りのトランジット・パッセンジャー（通過客）ではない。この日の午後まで、通庸の手掛けた施設を公式訪問したバードは、山形のどこかの宿に、最短でも〝ワンナイト・ステイ（一泊）する必要があった〟というのが、僕の結論である。天候がやや不良だったとはいえ、山形に似た視察内容でありながら秋田では三日も滞在した、というのにである。

さて、これからが本邦初公開！

独断と偏見に満ちたフィクション〝バードの山形一泊紀行〟である

バードの旅は大英帝国・準公使級の視察であり、内務官僚の県令・通庸にとっても大切な賓客だから、宿舎には迎賓用の施設を使った、と僕は推理している。

さて、バードはどの宿にチェックインしたのだろうか。

賢明な読者諸兄姉はもうお分かりかと思うが、その宿とは、バードが昼間〝茶屋〟と呼んでいた食事処と同一の、湯殿山神社境内なる料亭野々村の出張店（でみせ）ではなかったか？

内務卿・伊藤博文、天皇勅使・佐々木高行らが翌年に来形した折も、新聞が〝出張店に宿泊した〟と伝えていたように、可能性は十分ある。旅行中、バードがいつもリクエストしていた（大名クラスの宿）〝旧本陣〟が既に姿を消していた山形では、出張店がその代役を務めた、と僕は考えている。

この程、明治九年の湯殿山神社創建からの経緯を伝えた貴重な資料群を、調査・解読された郷土史家・小形利彦先生（日本大学・人文科学研究所研究員）に、バード来形当時の状況を聞いてみると

「記録資料から判断して、境内広場にあった各施設の運営は（期間を決め）氏子総代を通じて三島県令に申請していたと思われる。湯殿山神社は県社だから、出張店や水茶屋は県の指示により迎賓館的な役割も担っていた、のではないか…」

と話している。

バードの夕餉は、通庸主催の豪華な〝歓迎夕食会〟に変わった。

そして、これまで顔を見せていなかった総監督の通庸が、宿の奥座敷に初めて登場する。勿論、彼は単身ではない。かって通庸が東京時代、銀座煉瓦街の建設で行動を共にし、今は県職員として活躍中の土木課長・高木秀明。設計の名手・原口祐之、海江田綱範。さらに腹心の警察署長・鬼塚綱正ら薩摩出身の面々も一緒だ。

席上、通庸が語る県政発展の壮大な夢や、土木知事として

出張店主人・野々村政太郎の肖像
〈撮影は七日町・照井写真館で〉

Yamagata Feature Magazine.
ZERO★23
月刊山形ゼロ・ニィ・サン
山形県内書店
コンビニエンスストアにて
毎月27日販売（300円）
IMC
INFORMATION, MEDIA & COMMUNICATION
株式会社 アイ・エム・シイ
〒990-2251 山形市立谷川2丁目486-4
TEL.023-686-9575 FAX.023-686-9576
Women's Active & Amazing Information in Yamagata way
mamaid

やまがた地域産業応援基金助成事業
二州文庫
やまがた ぶんこ
書 神保亮
誰にでも物語があります。
人生の軌跡を
子供に、孫に伝えたい、残したい。
自分史づくり
◉自分で書くのが苦手、面倒くさいという方には、じっくりお話を伺って書き起こします。
◉ある程度まとめてある方には、いっしょにご提案しながら作っていきます。
◉データーも写真も準備万端の方には、さっそく制作を始めます。
まずはご相談ください。
■お問い合わせは
tel/fax (023) 646-5222
企業組合リンクシップ内
〒990-2473 山形市松栄1-3-8
山形県産業創造支援センター205号室
URL http://www.yamagatabunko.com
E-mail info@yamagatabunko.com

子ら巣立ち向かい合わせの膳につく
大沢むねお

の名声をあげた数々の実績が、伊藤鶴吉の手慣れた通訳によりやや誇大にバードへ伝えられた、だろう。バード自身もこの日は通庸プロジェクトの作品群を実際に見ているから、彼女も十分に理解・納得できた、と思われる。

この夜、洋食も含め宴席に運ばれた料理の数々は、主人の野々村政太郎が東京仕込みの腕を振るって入念に調理し、食通のバードも満足してくれた、に違いない。

宿には料亭としても使う静かな個室が完備し、バードのプライバシーは完全に守られた。また清潔な夜具（絹布団）には、血に飢えた蚤・シラミは一匹もいなかった筈だから、毎夜続いたバードの悩みはこれで一挙に解消、久しぶりに熟睡できた、と思う。肝心の警備体制も、宿が広場に立地して周囲に空間があり、万全だったといえる。

翌十六日早朝、バード一行は山形の宿を発ち楯岡へ向かった。気温・摂氏二十一度、羽州街道には爽やかな北風が流れていた。

駄馬で進むバード一行の姿が視界から消えたあたりで、五回（一年）にわたって連載した彼女の〝ウオッチング〟は終了、そろそろこの辺でお別れしたい。

拙稿執筆にあたり、永年にわたってバードを研究されている金坂清則先生（地理学者・京都大学名誉教授）にはこれまで引用した訳文をはじめ、訳注・解説などの著作を通じ教えて頂く点が多かった。厚くお礼を申し上げたい。

とくに先生が主張されている〝旅行記を恣意的・主観的に取上げず、客観的に真摯にとらえる姿勢…〟を順守しつつ、旅と旅行記を『科学し』、微力ながら工夫してみた積りである。山形市街の狭いエリアの謎を追っただけだが、浅学菲才の僕には真実を解明できたかどうか、あまり自信が無い。

最後になったが、先生が昨秋出版された「イザベラバードの日本旅行」の地図（百十二頁）で、山形市街の道筋には彼女が通過したマークの〝小丸〟でなく、宿泊したとされる〝大丸〟が描かれていた。原著を翻訳された当時から、既に先生も〝バードの山形一泊〟を推測されていたのではないかと思い、お会いする機会があればお話を伺いたい。

《参考資料・文献》

- 「完訳　日本奥地紀行　①②」イザベラバード著　金坂清則訳　平成二十四年　平凡社刊
- 「イザベラバードと日本の旅」　金坂清則著　平成二十六年　平凡社刊
- 「山形県初代県令・三島通庸とその周辺」　小形利彦著　平成二十五年　大風印刷刊
- 「山形県史　第四巻・近代史編」　山形県編　昭和五十九年　山形県刊
- 「山形新聞」朝刊　明治十二年十一月九、十一日。

平成二十七年五月六日　発行

島津亜矢ディナーショー
12月9日開催決定！
聴く人の胸を
熱くさせる迫力の熱唱を
お楽しみください。
山形国際ホテル
お問い合わせ
宴会予約課
TEL.023-626-3131
〒990-0039 山形市香澄町3-4-5［ホームページ］http://www.kokusaihotel.com

蔵王史話　第一回

新関昭男
山形県地域史研究協議会会員

昔から豊かな観光資源に恵まれて発展した蔵王温泉は、このところ老舗旅館の撤退や噴火の風評被害などが相次ぎ低迷である。山形市に生れ育った私は、幼いころから蔵王に親しんだ一市民として寂しさを感じ、蔵王の歴史や伝説を記してみようと思う。

温泉発見と蔵王信仰

南北約二十五キロ、十一の峰々が連なる蔵王連峰は、たび重なる噴火によって秀麗な山容が形成され〝忘れることのない美しい山〟と賞賛されたことから古くは「不忘山」と呼ばれた。その一連の噴火年表には奈良期の七七三（宝亀四年）の火山が最古の記録としている。だが、蔵王温泉の開湯説はさらに時代を逆上り西暦一一〇年とされ、盃胡（カルデラ胡）が爆裂した際に隆起したのが外輪山の瀧山（標高1・362メートル）であり、麓にわき出た蔵王温泉をかつては「高湯」と呼んだ経緯に次のような伝え話が潜んでいる。

十二代景行天皇の皇子である日本武尊（やまとたけるのみこと）が国内統一を図るため、大和朝廷に従属した古代の吉備地方（現在の岡山と広島県の東部）の豪族、吉備一族の誉れ高い「吉備多賀由（きびのたかゆ）」という武人を従えて東国の制圧に赴いた。途中、当地方へ差しかかると、多賀由は敵の矢を受けて瀧山（りゅうざん）山頂へ逃れた。そこから東側の麓を見下ろすと、岩場に立ち込める湯けむりの中に豊かな出湯を発見した。多賀由は山を下り、早速体を湯に浸けると癒されて傷の治りも早かった。以来、薬湯として尊ばれて湯治客が訪れるようになると、はるか遠い伝説の〝多賀由〟の名にあやかり、「高湯」の二文字に替えて温泉名に反映させたという。後に「最上高湯」とも呼ばれ、福島の「信夫高湯」、米沢の「白布高湯」と並び奥羽三高湯と命名された。いずれも温泉の名は、単に高地に湯がわき出たことにほかならないのだろうが、最上高湯の場合は多賀由説を除いては語れない。その理由は、馬の背と呼ぶなだらかな山陵の苅田岳（標高1・758）に祀られた「苅田嶺（かったね）神社」は日本武尊が御神体である。「日本書紀」（天皇の命により編纂された歴史書）や「延喜式」（律令法施行細則の集大成）にも見え、朝廷はこの苅田嶺神社に対して火山を鎮静し、出羽国の開拓における霊験あらたかな神として、平安期の八四八（嘉祥元年）に「従五位下」と、八六九（貞観十一年）には、「正五位下」の位を与えている。さらに最上高湯に祀られた「酢川神社」の守護神は大国主命（おおくにぬしのみこと）な

どを祭神とした瀧山の護り神でもある。清和、陽成、光孝の三天皇に及ぶ史書「日本三大実録」の八七三（貞観十五年）の条に、「酢川神社に従五位下の神階（位）が授与されたー」という記述があり、平安期には酢川神社が祀られ温泉も存在したことが確認できる。これらの縁起録が基を成し、日本武尊と吉備多賀由を絡ませた伝説が生れ、往時の湯宿では山深い湯治場へ誘客するにふさわしい話として商魂逞しく語り継いだことが、今日の蔵王温泉開湯歴千九百余年に結び付いた要因と思われる。

後の鎌倉期以降、和歌山県東牟婁（むろ）郡の熊野三山を本拠地とする「熊野信仰」は、全国に布教され隆盛を極めた。この頃から不忘山は「蔵王山」と改称され、熊野派の修行僧によって、噴火で火口（お釜）が形成された最も高い荘厳な嶺を「熊野岳」（標高一八四一m）と命名した。山岳修験の祖とする役小角（えんのおづぬ）が霊感で創造したという伝えの修験の御身仏「蔵王権現」を金剛界、白山妙理大菩薩を御神体とする雨乞いの「白山神」を胎蔵界として祀り、苅田嶺神を含めて壮大な神仏習合の浄土の世界を構築。行者たちは神や仏の姿が火口の清らかな水面に映ることを念じて修行に励んだという。江戸期は月山を「西の御山」と呼んだのに対し蔵王は「東の御山」と称され、民衆の信仰はさらに高まり、熊野山頂へ至る参拝道は山形側から下宝沢の「三乗院」と半郷の「松尾院」。上山からは「安楽院」。それに宮城県遠

（上）雄大な蔵王の噴火口（お釜）
（下）蔵王温泉、後方は瀧山

刈田などが主な登拝口とされた。特に下宝沢の三乗院は、地元の修行僧、覚山（がくさん）か「万福山」と号した寺を創建したのが始まりとされ、境内には室町初期に造られた高さ約三・八mの憤怒の様相をした「木造蔵王権現像」が祀られている。

（上）昭和初期頃の酢川神社境内
（下）蔵王参拝の長蛇の列

蔵王と一体、円仁や西行伝説秘める瀧山信仰

山形市街から東方に望む瀧山は大きく裾野を広げ、西蔵王高原を包み込むようなたおやかな山容である。一方、蔵王温泉街から見上げる瀧山は荒々しく立ちはだかり険しさを感じさせる。その瀧山は、奈良期の七〇八（和銅元年）に法相宗の高僧、行基の開山とされ、平安期の八五一（仁寿元年）に最澄を宗祖とする天台宗の慈覚大師円仁が、天皇領（文徳～清和）の聖域として再興を図り、蔵王と一体化した山岳信仰の礎を築いた。その頃、瀧山信仰の中心的寺院である石行寺や平泉寺は従来の法相宗から天台宗へ改宗された。以来、弘法大師空海が宗祖とする真言宗の布教ルートは西側の出羽丘陵沿いに対し、天台宗は東側の奥羽山脈に沿って広められたという。ちなみに円仁が山寺を開山したのは八六〇（貞観二年）のことで、

既に瀧山は九年前に再興されており幾つかの伝説が語り継がれる。

　円仁が当地方へ赴いた際に村人は干ばつに襲われ悩んでいた。哀れんだ円仁は沼のほとりで雨乞いの祈祷を行なった。すると天空に暗雲がたなびき、沼から突然、羽のある龍が昇天すると一帯に恵みの雨を降らせて山中へ消えた。後に、龍のご利益で村人が救われたことから龍を御神体とする水神信仰が芽生え、「龍（りゅう）」を「瀧（たき）」の字をもって山名を「瀧山（りゅうざん）」と呼び、沼の名は「羽龍（はりゅう）沼」と称するようになったという。また、円仁が瀧山に入ると霊感によって薬師如来が宿る山と悟った。夜更けに山深く足を進めた円仁は、竜馬の嘶く声とともにまばゆい光の中で出合った竜女に「あなたはこの麓の池に住み、水に困った諸人を救いなさい」と諭した。山を巡った後に円仁は岩屋に籠もり不動明王を中心とする「五大明王」の像を彫り、二十㍍もの大きな滝の岩場に奉納し、山頂には天台宗の護り本尊である「薬師如来像」を安置した。さらに山中に「瀧山神社」と麓には「瀧山寺」、古くは「霊山寺（りょうぜんじ）」とも称した寺社を創建して神仏習合の一山を構築し、瀧山大権現とあがめて世の安泰を願ったという。

　こうした円仁ゆかりの霊山寺は、八六七（貞観九）年に「定額寺」（寺の乱造を是正して国家統一を図った官寺）に格上げされたと伝えられている。だが、鎌倉期の一二五八（正嘉二年）に幕府による宗教弾圧で閉山に追い込まれ、双方の寺社は中桜田に移築され別当は「新福山般若院石行寺」が今日も当たっている。また、瀧山の西方に位置する羽龍沼は、江戸期の一七六三（宝暦十三年）に造成された記録があり、七七八（安永七年）に襲われた干ばつの際に村人が雨乞をしたが効果がなく、代わって萬松寺十八世の鉄山和尚が三日三晩の雨乞いの祈祷を行なったところ、雨が降り田畑を潤したという。その恩恵に報い、村人が沼の東側対岸に建立した「請雨塔」と大きく刻字した石碑が立っている。

また、霊山寺が定額寺に格上げされた後の天延年間（九七三～七六）の頃に、瀧山大権現に奉納した鳥居が丘の「御立鳥居」が建立された。さらに百数十年後の一一〇九（天仁二年）には成沢の「八幡神社鳥居」が建ち、双方の鳥居はいずれも成沢の東側山中に存在する空清水（うつぼすず）という場所から採石した凝灰岩を用いて明神鳥居の様式で造られ、国の重要文化財に指定されている。

（上）山形市の東方に聳える瀧山
（下）西蔵王高原に咲き誇る大山桜

平安後期、後鳥羽上皇の北面の武士で歌人の西行＝俗名・佐藤義清（のりきよ）が奈良吉野の蔵王権現堂で修行した後、鎌倉初期に東国へ旅立つ。目的は、兄の頼朝に追放された源の義経主従が、無事に奥州平泉の藤原秀衡（ひでひら）の元に逃れたことを確かめることにあった。義経たちを見届けた西行は安堵して秀衡と岩手の束稲山で観桜していると、ある修行僧と出会い、都へ帰る途中に出羽国の“瀧山”に咲く山桜を観て帰ることを勧められた。そこで瀧山に立ち寄ったという西行は「又の月の三月に出羽国に越えて　瀧の山と申す山寺に侍（はべ）りけるに櫻の常よりも薄紅の色濃き花にて　並たてりけるを　寺の人々も見興（みこう）じければ　類（たぐい）ひなき思いではの櫻かな　うすくれなゐ（い）の花のにほひはー」と、山桜が咲く様子を「山歌集」に詠み記した。しかし、西行が訪れて歌を詠んだとする場所は、当地の瀧山ほかに山形市西方の本沢地区の「滝ノ山」という見方もある。今も両地区の郷土史関係者は相譲らず静かな論議を交わされているが、円仁も西行もはるか遠いいにしえの人、確かな足跡は定かではない。

瀧山はまた、蔵王連峰の前方に聳えることから「前立山」とも呼ばれた。行者たちは山容を望みながら瀧山川に沿って山頂へ至ると、円仁が安置した薬師如来像を拝した。そこからは蔵王の湯治場へ下り、禊ぎをしては霊峰熊野岳へ向かったことがうかがえる。上山藩の儒学者、五十嵐于拙

政治家は小説家より嘘をつく　森田　宏

驚きの低価格！
インターネットサービス
スタートコース
月額
846円+税
ケーブルテレビ山形が選ばれる3つのポイント
1.用途で選べる6コース!
お客様のご利用目的に合わせて、コースをお選びいただけます。
2.全コースが使い放題の定額!
月額には、プロバイダ料・通信料・モデムレンタル料が全て含まれています。
3.地域密着の充実サポート!
初期設定から普段のトラブルまで、迅速な対応を行っています。
初期費用割引キャンペーン実施中
サービス対象エリア
山形市、天童市、山辺町近江
※各一部地域を除く
※「スタート」の他に「エコノミー」、「ライト」「スタンダードプラス」、「ハイパープラス」「ビデオレンタルパック」の各コースがございます。
ケーブルテレビ山形
TEL 023-624-5000(代表)
TEL 023-679-4018(営業部)
MAIL sales@catvy.ne.jp

（上）昭和初期頃の「御立鳥居」周辺
（下）羽龍沼のほとりに立つ「請雨塔」

（うせつ）＝本名・柔兵衛は「瀧の山　かへりもうでの　袖ふれて　石の鳥居も　細らぎやせし」と、多くの参詣者で賑わったことを詠み記している。時に御立鳥居はまさに瀧山の〝登竜門〟と言えたであろう。また、死霊が集まる場所を「モリノ山」と称する信仰がある。その思想は、死者の骸（むくろ）は墓地に残るが魂は遊離してさまようという。お盆などには子孫に迎えられて家でお参りを受けると、再び里山、中山に籠もり、その繰り返しによって次第に御霊が浄化されて深山へ遠ざかるというのである。当地方にも里山を「千歳山」とし、中山を「瀧山」、深山を「蔵王」とした祖霊信仰が存在したことがうかがわれ、蔵王と瀧山の関係を切り離しては語れない。

参考文献／『瀧山の歴史』（瀧山地区町内会連合会刊）
『山形の蔵王』（山形市観光協会刊）

【やまがた好古酔連】連載第七回

上山藩士金子清邦宛書状を読む（その二）

〈公財〉上山城郷土資料館学芸員　長南伸治

はじめに

前稿（『やまがた街角《秋》』七〇号）で述べた通り、本稿でも上山藩士金子清邦（一八二三～一八六七）宛書状巻子（上山市蔵・保管場所は上山城）収録書状を紹介しつつ、金子が幕末史の中枢に関わり得た「主役の一人」だったことを論じていきたいと思います（金子の略歴は本稿末尾に附。巻子収録書状一覧は前記『街角』七〇号を御参照願います）。

本稿で紹介する書状

今回紹介するのは、年不明一一月一七日付の仙台藩士富田鉄之輔（一八三五～一九一六）書状、年不明一二月四日付の富田・同藩士朽木五左衛門連名書状となります（共に寺尾英量『幕末之名士　金子與三郎』〈上山市教育会、一九二六年〉未収録書状）。

差出人の富田・朽木について、ご存知ない方もいるかもしれませんが、幕末の仙台藩で活躍した人物達で、特に富田については、明治期に日本銀行初代副総裁に就任するなど、近代日本の政財界でも活躍しています。

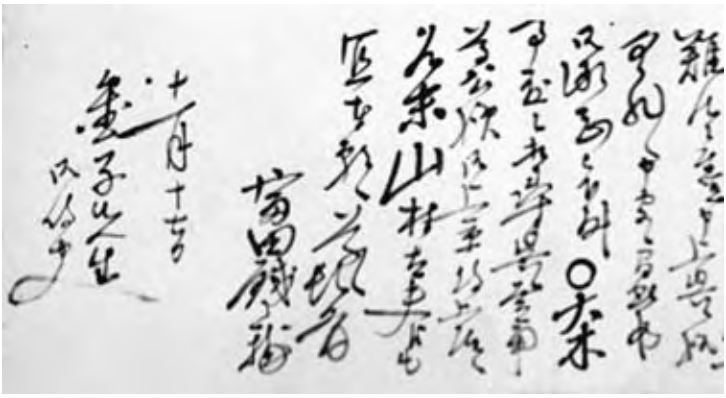
金子が富田・朽木と出会ったのは、若き日に遊学した仙台の儒者大槻平泉の塾となります。入塾時一八歳（天保一一年〈一八四〇〉）だった金子は同塾で約四年間学問に励み、その間に同門中「偉材」と称されていた富田、朽木（他に玉蟲左太夫）と知遇を得たといわれています。上山に戻った後も金子は両人と交流を続けて、後出の書状からは、晩年まで書状のやりとりを続けていたこと、さらに、当時としては重要度が高いと思われる情報が両人から提供されていたことがわかります。まさに金子と富田・朽木の間には「終生の友」と呼び合えるほどの、濃厚な人間関係が形成されていたと想像されます。

年不明一一月一七日付、富田書状

最初に年不明一一月一七日付の富田書状（次頁上段写真）から見ていきます。書状の原文は次の通りとなります。

朽木ゟも宜申上候○但木入京知申次第
申上候間是非御
微行被下候様奉願候将其内御同藩様ニ

而御上京も候ハ、御立寄被下度候少々風聞書共入手之分懸御目度候事
拝呈弥御堅固被成御座候由奉恐賀候扨過日玉蟲左大夫事不一方御高情相蒙り候由甚恐入候事共ニ御座候御禮よろし



年不明11月17日付、富田書状

く奉申上候小生事も疾ニ下坂是非ノ〳〵拝謁仕度思慮罷在候処朽木五左衛門事病床中ニ付不得止延引罷在申候于時別紙御届之通リニ而外①国使官江上様御面会と申事相出居候所最早摂海へ異舩渡来と風聞も御座候右等ニ付ても早々下坂仕度候所前文之次第ニ御座候間其辺御聞込之義も候ハ、御洩被下候様奉願候上様御下坂御日限も未タ相知不申候得共前以奉願置候一御内話仕候名代も未入京日限不申来候昨今江戸着位と遠察罷在申候
一備②阿両矣連名之建白有之候別紙伊木某之通リ少々潤飾有之斗ニ候加矣も有之由是者入手不仕候昨日出立帰国之御時其外指立候事も不承候少々風聞書ハ入手仕置候得共多忙写方仕急候間不指上候肥前閑叟久留米矣ハ不　日尓入京と申候其外不知備阿も近々帰国支度之様子上杉者願指出候
一大村珍麿江ハ度々出会仕候勢州君ニも不日御逢被下候筈ニ御座候于時昨日大村相越候所尊公ゟ大木江之御典書失紛仕御申分無之次第直ニハ難申上候間小生ゟ右之段申上呉候様申事ニ候尤途中ニ而ハ無之仕舞込候ニ者無相違候得共今日尓至リ見出急々ニ付黙止難仕ニ付宜申上呉候様具礼ノ〳〵申処候間此段御承知被下度○大木事度々相尋呉候節角尊公様御上京待上居候乍末山村太夫江も宜奉願候草々頓首

富田鐵之輔

十一月十七日
金子先生　御侍史

長文かつ、内容は多岐に渡っていますが、本稿では書状作成時期、および、時代背景を探るうえで重要と思われる二点（傍線①②）に注目し解説していきたいと思います。まず、その二点を現代語に要約すると次の通りとなります。
①将軍徳川家茂の京都上洛を間近に控え、大坂湾に外国船が現れたとの噂について、その真偽を教えてほしい。
②岡山藩主池田茂政と徳島藩主蜂須賀茂韶が連名で朝廷に建白書を提出した。
①②から上方（京都・大坂）が大変騒がしい時期に作成された書状であることが伝わってきます。次に①②に解説を加えつつ、書状作成時期・時代背景について述べていくこととします。

まず②から。岡山・徳島両藩主が連名で朝廷に建白書を提出したのは、調べた限り、文久三（一八六三）年八月の出来事となります。建白内容は、長州藩と朝廷内過激攘夷派の画策により決定された、孝明天皇の攘夷祈願（「大和行幸」）の延期を願ったものとなります。

次に①について。まず、実際に大坂湾に外国船が現れた事件は、慶応元（一八六五）年九月に発生しています。ただし、幕府は安政五（一八五八）年の通商条約により欧米諸国に五港（箱館・神奈川・長崎・新潟・兵庫）の順次開港を約しながらも、孝明天皇が京都近傍の港を開くことに反対したため、兵庫開港は延期せざるを得ない状況に追い込まれていました（条約中では文久二〈一八六二〉年一一月までの開港約束）。そのため、開港期限超過後は、兵庫近傍（大坂湾）への開港を求める外国船の侵入は大変警戒されていました。そういった状況だけに、富田が記した噂とは、兵庫開港期限超過以降ならば、いくらでも立ち得るものだったといえます。

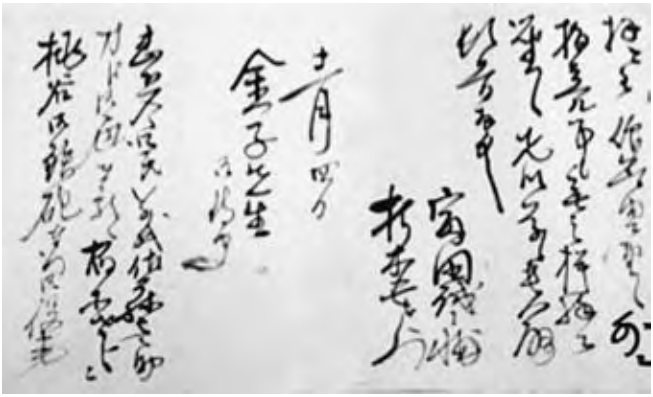
また、将軍家茂の上洛については、同人の生涯で文久三年三月、元治元（一八六四）年一月、慶応元年閏五月の三回限りとなります。

つまり、要点②が文久三年八月頃の出来事で、富田書状の月日は一一月一七日、そこに、要点①の外国船の大坂湾侵入が警戒され、さらに、将軍上洛が間近に迫っている時期であることを勘案すると、この書状は文久三年一一月一七日作成と推測することが最も妥当と考えられます。

そのとき上方では、天皇に攘夷を約束しながら、一向に実行しない幕府を、朝廷の過激攘夷派と結託し責め立てていた長州藩が、薩摩・会津藩の政略（八月一八日の政変）により京都から追放されています。そして、攘夷実行を巡り冷え込んだ朝廷・幕府の関係を修復すべく、将軍の上洛が翌年一月に行われようとしていました。まさに、幕末史が大きく転換しようとしていた時期といえます。

この書状に対する金子の返答は不明ですが、天皇・幕府の双方に忠誠心を持つ「尊王佐幕」論者だったとされているだけに、両者の関係改善の兆しが見えたことに安堵していたのかもしれません。

年不明一二月四日付、
富田・朽木連名書状



年不明12月4日付、富田・朽木連名書状

次に、富田・朽木の連名書状（前頁下段写真）について見ていきます。書状の原文は次の通りとなります。

華翰難有拝誦仕候時下御堅固被為渡候由奉欣然候然者此表之義ハ高栗氏より御聞取被下度何連申上候今①日ハ弥将軍宣下被仰出候先ニ人心趨向之所者出来候所此後之一着者如何相成候哉十ニ七八者上之御英断尓相帰候所ニ御座候本②圀寺公子者佛国ゟ御越被成ルト申方實事ニ相見得候両三日已前ゟ同所之動揺不一方大凡高栗氏御聞取奉願候弊邸名代方も未夕駛と不仕候得共国許ハ去月廿三日出立と申来候左候得者十五六日頃入京ニモ可相成哉と被存候右之御心得ニ而其前後之内御微行奉願上候尚右等之義者留守居国分ゟも宜申上候尚着前日限を申遣候筈ニ御座候得共序ニ而③如此且又今日江戸書翰有之候所濱御殿を海軍局と相變去月廿一日ゟ武官之者を留袖平服同様ニ被仰出候由ニ御座候外ニ指立ル事も無之模様ニ御座候先以草々貴酬頓首拝具

富田鐵之輔
朽木五左衛門

十二月四日

金子先生

御侍史

甚恐入候得共別紙佐藤七之助方江御届奉願候宿所左申上

桃谷御鉄砲奉行御役宅

先の書状同様、この書状についても作成時期・時代背景を述べていくことにしますが、その前に一つ触れておきたい点があります。

それは波線の箇所となります。その箇所を現代語に訳すと「本日、江戸から届いた書状によると」になります。つまりこの書状には、富田らが直接仕入れた情報の他に、在江戸の仲間からもたらされた現地の情報も記されていることがわかります。知り得た情報を余す所無く伝えようとする富田らの姿勢から、いかに金子に対し高い信頼を寄せていたかが伝わってきます。

では、本題となる書状の作成時期・時代背景について述べていきます。先と同様、その点を探るうえで重要と思われる三点（傍線①②③）について、

JISQ27001:2006/ISMS
インフォメーション セキュリティ マネジメント システム
お客様の情報を確実に守ります
Okaze
OKAZE CORPORATION
株式会社 大風印刷
JMAQA-S011 ISMS IS601
tel.023-689-1111 fax.023-689-1212
山形市蔵王松ヶ丘1-2-6〒990-2338 http://www.okaze.co.jp/
営業企画事業部
天童営業所／東根営業所／仙台営業所／東京営業所

それらを現代語に要約すると次の通りとなります。

①新しい将軍が本日決定する。
②次期水戸藩主徳川昭武の渡仏決定は、同藩内に大きな動揺をもたらしている。
③濱御殿に海軍局（海軍奉行）が設置された。

①が全てを物語っているような気がしますが、まずは②から見ていきたいと思います。

徳川昭武は、慶応三（一八六七）年一月、将軍の代理としてパリ万博に参列すべく渡仏しています。書状には、その渡仏決定を受け、水戸藩内に動揺が走っていると記されています。その理由は、当時藩内で尊攘・反尊攘の二派が抗争中だったためと考えられます。その状況下、藩政に少なからぬ影響力を持つ次期藩主の不在は、藩の統制に悪影響を与えると捉えられても不思議ではありません。まさに、藩内に動揺が走るもの無理からぬことだったといえます。

次に③について。濱御殿（現在東京都中央区「濱離宮」）に幕府海軍局が設置されたのは、慶応二年一一月となります。濱御殿は江戸城南西の沿岸に位置し（右掲写真参照）、もとは将軍家の鷹狩り場や別邸として利用されていました。時代が下り幕末になると、海軍局のみならず、周辺に砲台（台場）が築かれるなど、海防拠点として利用されていきました。

「江戸城下絵図」（上山城所蔵）

そして①について。②③の時期と照合するまでもないかもしれませんが、①は江戸幕府最後の将軍徳川慶喜誕生を指しています。それゆえ、この書状は慶応二年一二月四日作成と断定することが可能です。なお、書状には将軍決定は「今日」（四日）とありますが、実際は翌五日の出来事となります。

この将軍決定について、富田らは書状で「先ニ人心趨向之所者出来候所此後之一着者如何相成候哉十ニ七八者上之御英断尓相帰候所ニ御座候（今後、世の中が治まるか否かは、これまで以上に将軍の決断力に負う所が大きくなるだろう）」と述べています。この富田らの言に対し、金子はいかなる想いを抱いたのでしょうか。前述の如く、金子が「尊王佐幕」論者だったとするならば、誰が将軍になろうと支え続けるのみと考えたかもしれません。

おわりに

今回紹介した書状から、金子には富田・朽木から、数々の中央政局に関する重大情報が伝えられていたことがわかります。つまり金子は、そういった類の情報を、「公的」（上山藩の探索方）のみならず、「私的」（旧知の人物達）

な情報網からも得ることができたといえます。特に、高精度の情報を提供してくれる「私的」情報網は、そう易々と構築し得るものではないだけに、大変貴重なものだったといえるでしょう。そして、こういった情報網を有していたことから、金子は上山という僻遠の地に身を置きながらも、常に中央政局を意識しつつ藩政を考えることができたといえます。まさに金子とは、幕末の世を傍観していたのではなく、主体的に考え・行動する手段（情報網）を持った、「主役の一人」だったといえるでしょう。

■金子清邦略年表

年	出来事
一八二三（文政　六）	出羽国村山郡上山に生まれる。
一八四〇（天保一一）	仙台の大槻盤渓の門に入る。
一八四三（天保一四）	江戸昌平黌に入る。
一八四六（弘化　三）	上山藩藩校明新館の都講となる。
一八五二（嘉永　五）	鎮西遊歴の途に出る。
一八五四（安政　元）	家督を相続する。
一八五七（安政　四）	次期上山藩主松平信庸の教育係に就任。
一八六〇（萬延　元）	上山藩の側用人に昇進。
一八六六（慶応　二）	上山藩の中老に昇進。
一八六七（慶応　三）	江戸薩摩藩邸浪士取締に出動し負傷（翌日死亡）。

（参照）寺尾英量『幕末之名士　金子與三郎』（上山町教育会、一九二六〈大正一五〉年）

【主要参考文献】

寺尾英量『幕末之名士　金子與三郎』、上山市教育会、一九二六年／栗原伸一郎「幕末期の上山藩と奥羽諸藩―上山藩士金子与三郎の思想と行動を中心に―」（『東北文化研究室紀要』四五、東北大学文学研究科東北文化研究室、二〇〇四年）／『国史大辞典』各巻（国史大辞典編集委員会、吉川弘文館

奥の壹路
白露ふうき直　山田家
〒990-0043
山形市本町一丁目七番三〇号
TEL〇二三-六二二-六九九八
FAX〇二三-六二二-六六六八
〈地方発送承ります〉

◎整った4年ぶりの舞台！ ホーム開催「みちのくダービー」

なんとか降格圏からの脱出を狙う山形だが、お隣宮城のクラブチーム、ベガルタ仙台も降格圏が気になる状況となってきている。2009年にJ２優勝を果たし、クラブ史上2度目のJ１昇格を決めた仙台。2012年には優勝争いに加わるなど、J１での戦いぶりにも安定感をみせつつあった近年であったが、ここにきて苦しい状況からなかなか抜け出せないでいる。2ndステージでの勝利は僅か１試合のみ、積み上げた勝ち点は山形と並んで4ポイントのみ。年間総合でも13位とズルズル順位を下げ、16位松本との勝ち点差も6ポイントと詰まってしまった。目下の課題は守備面にある。ここ7試合で14失点、年間総合では34失点。それは、これまでJ１の舞台において堅守を武器に戦ってきた仙台にとっては痛い数字であり、14位に沈んだ昨年からいまだに改善されていない点である。

そんな苦しい状況にある東北が誇る2つのクラブ、モンテディオ山形とベガルタ仙台の対戦が9月26（土）に開催される。多くの人はこの対戦カードを「みちのくダービー」と呼び、年間の中でも重要な意味を持つ一戦と位置づける。1stステージの対戦は今季の開幕カードに組まれ、開催地は仙台（ユアテックスタジアム仙台）。そして今回の開催はモンテディオのホームスタジアム、天童市にあるNDソフトスタジアム山形だ。毎回２万人近くが詰めかけるこのカードの重要度は当然選手も理解しており、ここで挙げるひとつの勝利がその後の戦いにも影響を与えることは過去に何度も経験していること。そしてそれは、仙台の選手達にとっても同様であり、ここでの結果は両者にとって今季の重要なポイントとなるであろう。

年々厳しさを増す、J２上位争い。ここ2シーズン、昇格プレーオフにも参戦できていないモンテディオ山形が、いよいよ本気で勝負を仕掛けなければならない時が来たようだ。

◎昨季の再現なるか終盤の勝負強さ！ 天皇杯の快進撃！

最も暑い時期の戦いを終え、リーグ戦も残すところ10試合を切った。繰り返しにはなるが、残留へ向け正念場を迎える山形。苦しい状況に変わりはないが、その状況を良い方向へ改善すべく、ここからの勝負強さには期待したい。なぜならばJ1・J2と舞台は違えども、昨季のシーズン終盤でのタフさは強く印象に残るところ。クラブ史上最高の成績を収めた天皇杯準優勝含め、昇格プレーオフではJ１昇格の切符を手にし、今季へ繋げたわけである。「サッカーは最後の最後まで何があるかわからない」。石崎監督は過去の経験から、よくこの言葉を口にする。では今度はJ１の舞台で、再びその力をみせてくれるのではないか。そんな期待を寄せるのは私だけではないはずだ。

越智隼人（おちはやと）氏プロフィール

1982 年埼玉県・上尾市生まれ
選手歴／セレッソ大阪、モンテディオ山形
選手引退後／山形市内にて知人が代表を務めるサッカースクール（小学生対象）に関わりながら指導の勉強をはじめる。2006 年より、自らが代表、兼指導責任者となり、SFC（サッカー・フットサル・クラブ）ジェラーレを立ち上げる。指導スタッフ 5 名、選手/キッズ約 10 名/小学生約 80 名/中学生約 50 名が在籍し、現在は Jr ユースの監督を務める。（指導者 B 級ライセンス取得）2007 年（当時 25 歳）からはスカパー! にて、モンテディオ山形のホームゲーム解説を担当。今季で 9 年目となる。

悲しみを弥陀に願って遍路旅　橋本　皐月

《2015》Monte Page

シーズン終盤。J1残留へ向け、いよいよ正念場を迎える！

◉越智隼人

◎J1順位表:年間総合(2ndステージ第7節終了時)

	チーム名	勝点	勝数	引分数	敗数
1.	浦和	52	15	7	2
2.	広島	49	15	4	5
3.	FC東京	48	15	3	6
4.	G大阪	41	11	8	5
5.	川崎F	41	12	5	7
6.	鹿島	38	11	5	8
7.	柏	36	10	6	9
8.	名古屋	35	10	5	9
9.	横浜	34	9	7	8
10.	湘南	33	9	6	9
11.	神戸	29	7	8	9
12.	鳥栖	29	7	8	9
13.	仙台	27	7	6	11
14.	甲府	25	7	4	13
15.	新潟	22	5	7	12
16.	松本	21	6	3	16
17.	清水	19	4	7	13
☆18.	山形	18	3	9	12

※年間総合16位～18位の3チームは来季J2へ自動降格

◎13戦未勝利…決定力不足に泣く2ndステージ

「J1残留」という目標達成へ向け奮闘を続けるモンテディオだが、いまだ苦しい状況が続いている。勝利を挙げたのは5/10の1stステージ第11節まで遡り、そこから13戦も白星から遠のいている。とりわけ課題として浮き彫りとなっているのが「得点力不足」。つまり、相手陣内ゴール前において決定的な仕事の出来る選手がいまだ現れないのが悩まれるところである。2ndステージに入り7試合で挙げたゴール数は僅か3ゴールのみ。また、開幕からここまでの1試合平均得点は0.7得点と、リーグ内において最も少ない甲府に次いで低い数字となっている。ただし、どの試合も決定機が作れていないわけではなく、FWディエゴやMFロメロ フランクといった外国籍選手を中心とした攻撃陣は多くのシュートシーンに関わっており、ゴールの匂いが全くしないわけではない。

◎残りのシーズンのカギは新たな存在が握る！？

そこでクラブは、課題解消のために新たな戦力の獲得に動いた。8月初旬にJ1鹿島アントラーズより期限付きでFW高崎 寛之（29歳）の獲得を発表。魅力は188cmというサイズだけではなく、瞬間的なスピードを武器に相手DFの背後に抜ける動きや、ゴール前での勝負強さという点でも大いに期待できる選手だ。また、同時期にG大阪よりMF小椋 祥平（29歳）の獲得もあったことから、ゴール前の職人と、（相手）ボールの回収職人といった新たな2人の存在がこの苦しい状況に変化をもたらしてくれるかが、終盤の巻き返しには大きく影響しそうだ。高いポテンシャルを持ちながらも、前所属クラブではなかなか出場機会に恵まれなかった両選手、自身のフットボーラーとしての評価を取り戻すために奮起する姿に注目だ。

E D I T O R ' S　R O O M

●県民の森の大沼へ行く途中に展望台がある。道路沿いに東屋とベランダがあって山形市が一望できる。真下に富神山があるのでけっこう高い場所だ。そこへ女がやって来た。しかし車がない。どこから来たのだろう。帰ろうとすると「一人にしちゃうんですか」なんて妙なことを言う。それからのことは夢の中。妄想は楽しい。　（真）

●里山でのさまざまな体験はどこかで自分の現在を担っている感覚がある。子どもの頃、暮れなずむ雑木林のなかで迷ったときの得も言えぬ恐怖体験や、いっぽう栗拾い、キノコ採りなどの自然の恵み収穫体験、冬の開墾地でのスキーや橇遊びと実に多様なものだった。いま、子どもたちが里山で遊んでいる姿はほとんど見かけない。　（岩）

●生まれ育ったのは山大小白川キャンパスのすぐ側でグランドから千歳山までは一面のすべて桑畑で民家やアパートなどは何もない。私にとっての里山は千歳山でした。馬見ヶ崎川からの支流は山大キャンパスの中を流れ、蛍が乱舞する夏の夜、近所の遊び仲間と肝だめしと称して千歳山までの夜道を歩く。里山特集は少年時代へとタイムスリップしていた。　（花）

●今夏異常な猛暑のなか各位の里山に関する玉稿を頂き特集を編む事が出来ました。ご強力に対し感謝申し上げる。里山についての「想い」がそれぞれ異なっているのも面白い。里山とは各自心の中にある故郷の原風景なのだろう。　（彦）

表紙画制作／大竹順子

バックナンバーのご案内

「やまがた街角」のバックナンバーをお探しの方は、八文字屋本店にお問い合わせ下さい。ただし、お問い合わせ頂いた時点での対応となりますので、その後、〈お取り置き〉の場合をのぞいては、残部数は変化致しますので保証は致しかねます。〈お取り置き〉をご予約頂くか、直接ご来店のうえご確認頂き、お買い求め頂くのが最良かと思われます。どうぞよろしくお願い致します。

いっとき〈奥羽越〉はひとつになった！

～幕末奥羽の矜持と無念～／岩井哲　新書判／864円（税込）

http://syoshi-sai.com

編集出版工房・書肆犀　上山市石堂7-3-2　FAX.023-673-3040

本との出会い、豊かな時間
日本医書出版協会認定医学書専門店

株式会社 高陽堂書店

〈本　店〉
〒990-0073
山形市大野目3-1-17
TEL.023（631）6001
FAX023（632）1168

八文字屋

www.hachimonjiya.co.jp

〈本　店〉
〒990-0043
山形市本町2-4-11
TEL.023（622）2150

八文字屋本店
八文字屋北店
TENDO八文字屋
八文字屋エビスヤ店
みずほ八文字屋
丸井八文字屋
八文字屋書店泉店
八文字屋書店セルバ店

やまがた 六曜会

うなぎ・川魚料理
電話六三一―二七三八

割烹
電話六三一―三六四四

割烹
電話六二二―〇〇四三

割烹
電話六二三―〇四一五

日本料理
電話六二二―二〇〇七

料亭
電話六四一―〇五一五

別冊：やまがた街角・近刊予定のごあんない

◎山形市で開催されている「山形国際ドキュメンタリー映画祭」も今年で第14回を迎えます。これまで本誌に掲載してきた記事をベースに、開催年毎の受賞作品や審査員等の情報をデータとして収録し、さらに「デイリーニューズ」に掲載されたインタビュー記事など盛りだくさん。本映画祭で世界デビューを果たした河瀬直美監督ほか多くの監督たちのメッセージ、ファンの映画祭への思いなどをお届け致します。（制作協力／やまがた国際ドキュメンタリー映画祭事務局）

臨時増刊号「別冊：やまがた国際ドキュメンタリー映画祭」（9月下旬）
〔予定〕B5判100頁前後　予価：1000円（税別）

◎連載中好評を博したユーモア溢れるエッセー風「訛」学。思わず吹き出してしまう故神保亮氏の挿画も見逃せない。文章と挿画の絶妙な絡みから醸し出されてくる「山形語」の味わい！

佐藤誠二著「私的《山形語》考」（10月下旬）
〔予定〕A5判160頁前後　予価：　800円（税別）

一冊の絵本に学ぶエトセトラ

遠藤こかめ

創業万延元年
未来伝承
株式会社 石駒
〒990-0031
山形市十日町三丁目10-20
電話 023 (622) 3364
http://isikoma.net

やまがた街角
《秋》第74号
平成27年9月1日発行
定価 600円（税別）
編集・発行人　大久保義彦
発行所
やまがた街角編集室
〒990-0043 山形市本町2丁目2―28
電話　023-642-8888

JGD
www.jgd.co.jp
私たちは
モンテディオ山形を
応援しています
日本地下水開発
Tel 023-688-6000
Fax 023-688-4122

ムービーオンの話題作！

アンフェア the end

9/5（土）公開

警視庁検挙率No.1の刑事・雪平。警察や国家を裏で操る権力組織との最期の戦いが幕を開ける!「アンフェア」シリーズ遂に完結！

©2015 関西テレビ放送／フジテレビジョン／ジャパン・ミュージックエンターテインメント／東宝／共同テレビジョン

天空の蜂

9/12（土）公開

史上最悪の原発テロが発生。巨大ヘリ墜落まであで8時間！日本消滅の危機を回避できるのか！？原発事故を経験した日本で、改めて社会と人間の在り方を問う衝撃作。

© 2015「天空の蜂」製作委員会

合　葬

10/17（土）公開

終わりゆく江戸 切なく揺れ動く 青春最後の１ケ月。江戸幕府解体に反対する「彰義隊」に加わった若者たちの数奇な運命、知られざる真実。

© 2015 杉浦日向子・MS. HS／「合葬」製作委員会

雪の轍

10/17（土）公開

昔の記憶を支えに生きてきた…。一途な思いを貫いた女性が、老境を迎えて旅に出る。人と人の出会いとつながりをみつめた心温まるドラマ。

©2014 Zeyno Film Memento Films Production Bredok Film Production Arte France Cinema NBC Film

いしゃ先生

11/7（土）公開

第2次世界大戦前後の混乱期に、山形県大井沢村（現・西川町）で生涯を医療に捧げた医師・志田周子さんの人生を映画化。村人の命を守った「いしゃ先生」の愛と勇気の物語。

©2015「いしゃ先生」製作委員会

起終点駅 ターミナル

11/7（土）公開

果ての街・釧路で人生の終わりへと向かっていたはずの男と女が出会い、孤独を分かち合い、そして再びそれぞれの人生の一歩を歩きはじめる感動の物語。

©2015桜木紫乃・小学館／「起終点駅 ターミナル」製作委員会

やまがた街角愛読者へのチケットプレゼント 編集室宛にご応募下さい。5名様に当たります。

MOVIE ON やまがた

TEL.023-682-7222（自動音声案内）
山形市嶋北1-2-2　TEL.023-682-7235（9:00~18:00直通）
www.movieon.jp

“よいものをより安く”
皆様の生活を応援します。

生活応援
いきいきくらしの応援団！

ヤマザワ

本部／山形市あこや町3の8の9　TEL（023）631－2211
山形県44店舗　宮城県 22店舗

やまがた街角　第74号《秋》平成27年9月1日発行
編集・発行人／大久保義彦　発行所／やまがた街角編集室　〒990-0043 山形市本町2丁目4-56 TEL.023-642-8888
定価 600円（消費税別途）

第153回 直木賞受賞！

「私は何度も驚き、ずっと幸福だった。これほど幸せな読書は何年ぶりだ？」
伊集院 静氏（選考委員）

「欠点のつけられない青春小説。とんでもない商売敵を選んでしまった。」
北方謙三氏（選考委員）

「これぞエンタメ作品！興奮しました。十五年間で一番幸せな選考会でした。」
林 真理子氏（選考委員）

「これからの大衆文学を牽引するスター、エンタメ界の王貞治になってほしい！」
東野圭吾氏（選考委員）

「東山さんの守護聖人はならず者のじいちゃんの姿をしていて、おまえは血を流さずに何を証明できるのだと問いかけてくる。この小説は、その問いに対する唯一無二の答えなのだ。」
宮部みゆき氏（選考委員）

電子書籍配信中！

定価：本体1600円（税別）
978-4-06-219485-3

撮影／森 清

講談社
〒112-8001 東京都文京区音羽 2-12-21

雑誌86209-06　4910862090254 00600